牟礼村丸山遺跡発堀調査報告書

上水内郡牟礼村教育委員会

牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書

上水内郡牟礼村教育委員会

序

明るい暖かい太陽の光に育まれ、夕には燦燦と輝く月光の下に時は流れ年は経て文化の流転は生物の環境を著しく変めた。そして今後もどのように変るかは計り知ることも出来ない。人の生活環境も又その一つとして止めることも出来ない。

「大蛇(おろち)も住まん八蛇川」と歌に詠まれた八蛇川の流れは清くその音律は今尚道往く人の耳に響く。

丸山遺跡は昭和45年に県より埋蔵文化財包蔵地として指定を受けた所である。飯綱山麓高坂地区の東に位置し大丸、小丸と呼ばれていた小高い丘の畑地であった。

古い文献には『「丸山城墟(じょうきょ)」本村子の方にあり東西一町南北一町回字形をなす、某の居城なりしか不詳。里俗傳に往古城主某僧となり、薬師堂を開基し之に移り、武具を近辺の地に埋め塚を築き經文を讀誦(どくじゅ)すと云。塚は本村酉の方にあり、今村民之を称して經塚と云ふ。後廢城となり今耕地となる。里人該地を鑿(さくつ)て古城具を得ることあり。』と記されている。

遙かに高社、斑尾、黒姫、妙高等の連山が聳え眼下に牟礼村全景を見おろすことの出来る景色は特筆するものがありその展望は広く隣接町村にも及び絶景の場所である。

昭和52年度実施の県営圃場整備のためこの地が姿を変えて水田に化することが決定し県教育委員会文化課指導主事関孝一先生の現地調査よ結果急拠発掘することになり飯山北高校高橋桂先生を団長とする20名より成る調査団により発掘を進められた。

夏の炎下にこつこつと掘り続ける団員が往古の民族の生活を連想し乍ら一掘り一掘りに力が籠められた。好天に恵まれ発掘は村の職員、土地改良区の職員、文化財調査委員、教育委員等多勢の方の応援を得て延百人にも達し多忙を極めた。

発掘されたものの中には、縄文平安時代の貴重な土器もあって復元の可能なものも数点現われた。鉢の一つは六千年前のものと推定され類例のない珍らしい尖底鉢形土器で昭和53年6月13日より8月27日の間、東京国立博物館表慶館に於て行われる特別展観「日本の考古遺物」として展示され広く一般の参考に供され多くの人に古の趣を連想させた。

祖先がこの展望よき地に住居を定め大自然に接し少しずつ変って来た社会の下で獲物や木の実を食とし淡淡として原始的な生活を送り得たことを思う時、連綿として社会の流れが現在に至るまで繋がり、その変転に云い知れない遠大さを感ぜずにはいられない。

平安時代の住居の跡と推定される所も三ヶ所ほど現れたことは猛獣などよりの防備もよく山あり川あり当時から豊かな安住の地として、十分なる生活の条件が整っていたことと思う。

せせこましい複雑な現在の社会に於ても、このような大自然の中に生活した心の豊かさを求めて、明るい社会の実現に努力してゆきたいものである。

発掘されたものはそれぞれの手続きを終了し、復元の可能なものは復元した上、村に保存することとなった。

この遺跡の周辺に集落があった筈であると調査された考古学の先生方は云われているその地が何処であるか？　未来への大きな夢を残して発掘を終了した。

今は立派に出来上った圃場として其の面影は更にない。来る年も来る年も黄金の波が漂って人類に無限の幸福を与えることであろう。

この記録が牟礼村の歴史に些かたりとも役立つことを念願すると共にお忙しい中を挺身御尽力をいただいた関係の皆様に心から厚く御礼を申し上げ筆をとどめる。

昭和53年9月

牟礼村教育長　米　澤　竹　志

例　言

① 本書は上水内郡牟礼村高岡地区の圃場整備事業にともなう緊急発掘調査報告である。

② 発掘は昭和52年8月3日から、8月7日まで行った。

③ 本報告は、調査団の共同討議にうえに分担執筆し、文責を文末に明記した。

④ 図版作成には、松沢芳宏、金井正三、太田文雄が主としてあたり、大原正義、金井晴美、望月静雄の協力があった。

⑤ 発掘調査及び遺物整理には次の人達の協力があった。

金井清敏、金井晴美、松沢伸一、松沢澄江、松沢けさ子、田中美佐子、松沢はつ、上水内北部高等学校社会部。

⑥ 調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々から御教示、御助言を賜った。明記して感謝の意を表します（敬称略、順不同）。

永峯光一、野口義麿、関　孝一、安孫子昭二、川崎義雄、桜井洋、清藤一順。

⑦ 土坑内出土土器の拓影の中に記した小文字の記号は出土遺構を表わしている（1P……1号土坑等）。

発掘関係者一覧表

長野県教育委員会文化課	指導主事	関　孝一
北信土地改良事務所	所長	岡田　謙一
	管理係長	赤沼　好男
	技師	坂本　光男
牟礼村土地改良区	理事長	岡田　一雄
	事務局長	丸山　義一
	主任	本山　秀
	主事	長沢　照和
発掘調査委員委員長	文化調査委員長	小林　幹雄
〃　副〃	教育委員長	原田　清繁

発掘調査委員副委員長	牟礼村長	金井　義男
	牟礼村議会議長	中川　　功
牟礼村役場	文社委員長	原田　幸衛
	土地改良区理事長	岡田　一雄
牟礼村役場	文化財調査委員長	上野　　涼
	文化財調査委員	白鳥　　耀
牟礼村教育委員会	〃	矢野　恒雄
	〃	風間　　敏
	牟礼村文化財調査委員	臼井健太郎
	〃	武居　　襄
	〃	丸山　　久
	牟礼村教育委員職務代理	石川　穂積
	牟礼村教育長	米沢　竹志
	牟礼村教育委員	井沢　　静
	〃	丸山　良雄
	助役	黒柳　多十
	収入役	目須田　勉
	総務課長	金井　庄五
	総務係長	原田　忠直
	次長	池内　健造
	職員	加藤みどり
	公民館主事	青木　　清
	〃	近藤　克彦
	公民館八ミリ技手	北沢　悦登
	〃	柳沢　博見
	公民館八ミリ技手	飯島
	〃	寺島　政次
	西小学校技手	朝比奈利和

調査団 ○団　長　飯山北高（教諭）高橋　桂

○調査員　松沢芳宏、金井正三、松沢伸一、
望月静雄、今井正文、太田文雄、水野裕美子、広瀬昭弘、大原正義。

○補助員　北部高校（教諭）金井清敏、（北部高校生）宮田忠彦、
（〃）倉石和彦、（〃）田中博敏、（〃）野村彰人、（〃）久保田克彦、
（〃）滝沢純一、（長野東校生）青木勝彦、（専修大学生）米沢勇志、
（牟礼村高坂）土屋トナコ。

目　次

序 ……

例言 ……

目次 ……

図版目次 ……

第Ⅰ章　発掘に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　環境 …… 2

第１節　地理的環境 …… 2

第２節　歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　調査日誌 …… 8

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物 …… 11

第１節　遺構 …… 11

１．住居址 …… 11

２．土坑 …… 12

第２節　遺物 …… 21

１．住居址内出土遺物 …… 21

２．土坑内出土遺物 …… 22

３．遺構外出土遺物 …… 33

第Ⅴ章　歴史時代の遺構と遺物 …… 36

第１節　遺構 …… 36

第２節　遺物 …… 39

第Ⅵ章　考察 …… 47

第１節　縄文時代の遺構と遺物について …… 47

第２節　歴史時代の遺構と遺物について …… 52

第３節　まとめ …… 55

挿図目次

第１図　丸山遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 …… 3
第２図　遺跡周辺の地形と発掘区 …… 7
第３図　遺構分布図 …… 10
第４図　１号住居址 …… 11
第５図　土坑（１） …… 13
第６図　土坑（２） …… 15
第７図　土坑（３） …… 17
第８図　土坑（４） …… 19
第９図　１号住居址出土遺物 …… 21
第10図　土坑内出土土器（１） …… 23
第11図　土坑内出土土器（２） …… 24
第12図　土坑内出土土器（３） …… 26
第13図　土坑内出土土器（４） …… 27
第14図　土坑内出土土器（５） …… 28
第15図　土坑内出土土器（６） …… 30
第16図　土坑内出土土器（７） …… 31
第17図　土坑内出土石器 …… 32
第18図　覆土一括土器 …… 34
第19図　２号住居址 …… 36
第20図　３号住居址 …… 37
第21図　４号住居址 …… 38
第22図　２号住居址出土遺物 …… 40
第23図　３号住居址出土遺物 …… 41
第24図　４号住居址出土遺物 …… 42

図版目次

図版一	住居址	59
図版二	住居址	60
図版三	土　坑	61
図版四	土　坑	62
図版五	土　坑	63
図版六	土坑内出土遺物	64
図版七	土坑内出土遺物	65
図版八	住居址・土坑内出土遺物	66
図版九	土坑内出土遺物	67
図版十	土坑内出土遺物	68
図版十一	土坑内出土遺物	69
図版十二	土坑内・遺構外出土遺物	70
図版十三	遺構外出土遺物	71

第Ⅰ章　丸山遺跡発掘経過

丸山遺跡は、７月初旬県よりの指示により発掘のため文化財調査委員会により準備を進められていたが、７月28日の県教委関孝一指導主事の現地視察により、緊急発掘が断定され８月９日迄発掘が行われた以下その詳細を記す。

昭和52年

１月15日		牟礼村文化財調査委員会開催
７月26日		文化財調査委員会委員現地視察
７月28日	(2)	県教委文化課関孝一指導主事現地調査の結果緊急発掘調査の必要性を断定し調査準備にかかる。現地にて協議せし者次の通り 北信土地改良事務所赤沼好男管理係長 牟礼村土地改良区丸山義一事務局長外職員 牟礼村文化調査委員長小林幹雄 牟礼村教育委員
	(3)	調査団長、高橋桂氏（飯山北高校教諭）に決定し承諾を受く。 調査員については県教委で選考する。
	(4)	文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知だす
	(5)	牟礼村土地改良区理事長岡田一雄より発掘の承諾を受く
	(6)	旧土地所有者松沢順造、小池長雄両氏より発掘の承諾を受く 発掘実施委員会（別紙）発足
８月１日		北信土地改良区より埋蔵文化財調査の依頼を受く
８月２日		発掘準備、北信土地改良区へ発掘調査計画表提出
８月３日		庁内打合せ
８月４日	(2)	土地改良区と教育委員会の間に埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書の交換
	(3)	発掘開始　　発掘者　22名
８月５日		発掘　　〃　21名
８月６日		発掘　　〃　20名
８月７日		発掘　　〃　18名
		住民、一般公開　　見学者　200名
８月８日		整理　　９名
８月９日		発掘調査以外の地帯の掘削立合い　６名

8月12日	埋蔵文化財発見届を長野中央警察署に提出
	埋蔵文化財保管証を県教育委員会へ提出
10月1日	高橋桂団長に出土品の洗浄及復元について依頼する
昭和53年	
3月15日	北信土地改良事務所長より竣工完了
	検査結果通知書を受領
3月31日	東京国立博物館より尖底鉢形土器の出品について依頼あり
6月13日より 8月27日まで	表慶館（東京国立博物館）に出品

第II章　環　境

第1節　地理的環境

遺跡は上水内郡牟礼村、字丸山に存在する。

善光寺平と頸城平野の中間に近く、妙高、黒姫、飯綱、戸隠、斑尾の美麗な山容が人々をとらえる。また、山を映して深く、静かに野尻湖がたたずむ。ここ牟礼村は野尻湖の南約8㎞の地であり、中近世、北国街道の宿として栄え、また坂中街道など善光寺平への脇街道もいくつか走るなど、古来からの交通の要衝であった。

地形的には隣村、三水村と相似た様相を呈し、標高500m～700mの高原状台地を形成する。しかし、やや観察を細かくした場合、山間の小盆地といった感が強く、斑尾山（1381m）と飯綱山（1917m）とに挟まれた小天地を形成している。

小盆地の中央、北西から南東へと鳥居川が流れる。この川は戸隠山に源を発し、途中いくつかの支流を従えて、水量を増す。長い年月を経て、下刻作用を続け、付近一帯には段丘が発達する。

一方、牟礼の西部地区には八蛇川があり、いくつかの谷川を従えて鳥居川に合流する。上流には扇状地がいくつか形成されるが、鳥居川の合流点近く、V字谷が形成され段丘が発達する。

扇状地のいくつかは、既に谷川による浸食が進んで、やや複雑な地形をなす。本遺跡はこのような扇状地の扇央に位置し、標高は約700mである。

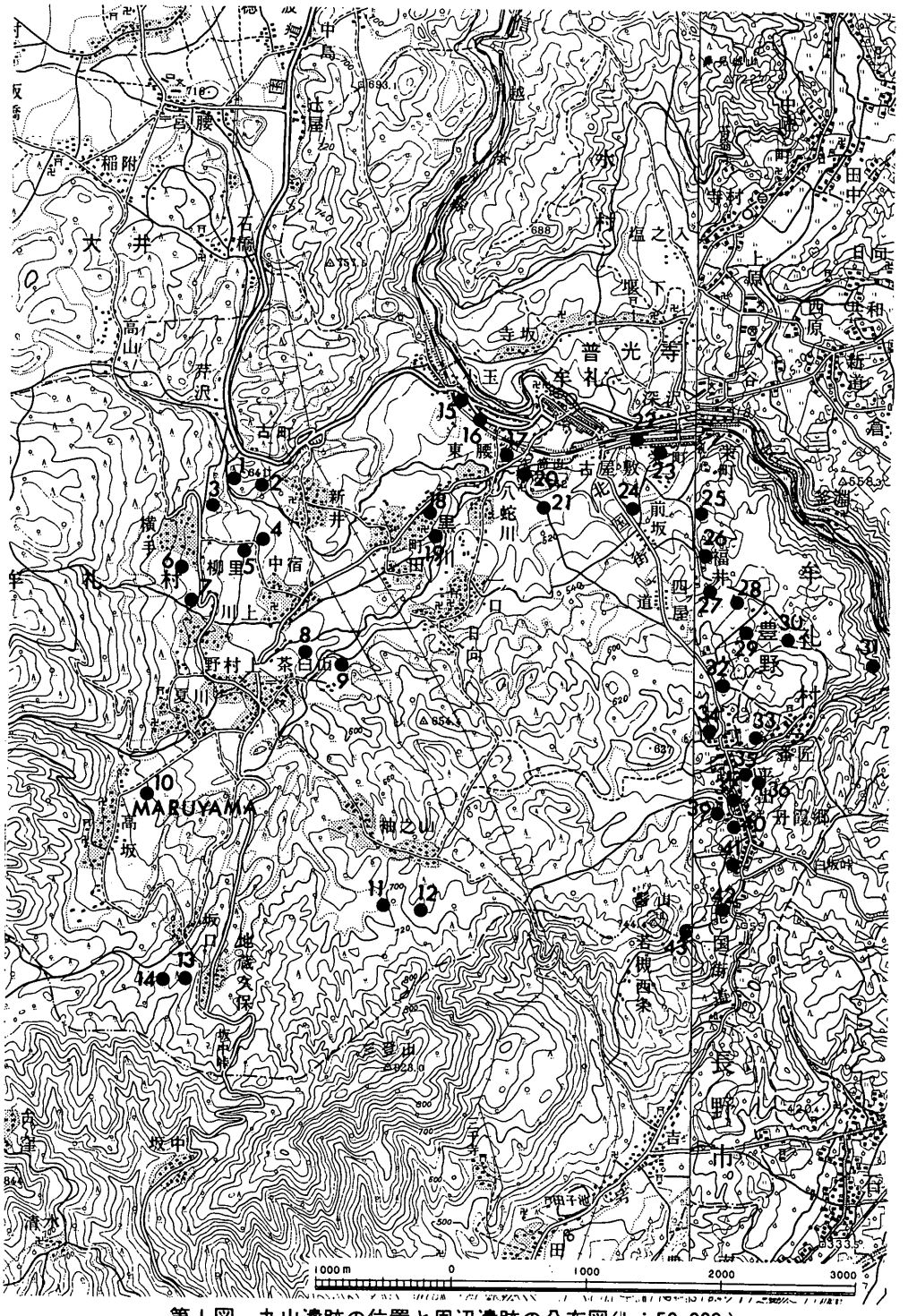
厳密には、左右の谷に浸食されて残った舌状台地に遺跡があり、残丘ともいえる微高地をなしており、ロームが堆積している。

遺跡の南方の谷は比高差約12mであり、現在は湿田がある。谷のみならず、扇状地全般が水田となっているが、本台地のみ畑地であったことを付記しておこう。

遺跡は飯綱山の麓に近く、採集、狩猟の生活を営む先史人類にとっては、恵まれた環境にあった。この一帯、植生上は落葉広葉樹林帯に属し、植物性及び動物性食料の豊富なところである。

なお、気候については、各時代によって寒暖の推移があるけれども、冬期積雪の多い裏日本型気候

と夏期乾燥の内陸性気候の両者の性格をもつのが、この地方一帯の特質であるとされ、遺跡付近の標高の高さは、高冷地気候の特色をも加えさせる。参考に、現在のこの付近の積雪が1mを前後するものであることをつけ加えておきたい。(松沢芳宏)



第1図　丸山遺跡の位置と周辺遺跡の分布図(1：50,000)

第1表

番号	遺跡名	所在地	遺物
1	石原	（長野県上水内郡牟礼村）大字古町字石原 829	石鏃
2	上ノ山	大字古町字上ノ山 546 等	土師器土器片
3	蟹原	大字柳里字蟹原	縄文時代・打石斧，石鏃
4	下向山	大字古町字下向山	縄文前期土器片，弥生後期土器片，小形徳利形灰釉陶器（糸切皿）
5	大岩	大字柳里字大岩 442 － 3 等	縄文時代・打石斧，石鏃
6	南	大字柳里字南 807 等	縄文時代・打石斧，石鏃
7	横道	大字柳里字横道	縄文時代・石鏃
8	茶臼山	大字川上字茶磨山1882	縄文時代・石鏃，土師国分期坏，高坏・盌，須恵器片
9	強清水	大字黒川字強清水	土師国分期土器片
10	丸山	大字高坂字丸山 803，804 他	本報告
11	かつも原	大字袖之山字かつも原1045	土師国分期土器片（坏等）多量
12	東久保	大字袖之山字東久保	縄文草創期・丸ノミ（頁岩製）
13	甘池	大字坂口字甘池 112，117，119 他	縄文前期南大原式，中期加増利E式土器片，打石斧，磨石斧，石匙，石鏃，弥生時代太形蛤刃石斧，土師国分期土器片（坏，高台付坏等）多量
14	上向	大字坂口上向 206	土師国分期土器片（高台付坏等）
15	西屋敷		縄文期磨製石斧，須恵器片
16	小玉		縄文中期土器片，土偶片，土師国分期土器片
17	庚申塔	大字黒川字庚申塔1610他	弥生後期箱清水式土器片，土師国分期土器片
18	前田	大字黒川字前田	土師国分期土器片
19	殿屋敷		土師器，須恵器片
20	裏町		鉄製頬当 1 点，石臼破片，鉄鏃多数
21	七割		土師国分期（坏10枚）
22	栄町	大字牟礼字橋詰 522 － 1	縄文前期南大原式，中期加曾利E式，後期堀ノ内式土器片，磨石斧，打石斧，石棒，石匙，石錐，石鏃
23	橋詰	大字牟礼字橋詰	弥生後期箱清水式土器片（高坏等）多量，太形蛤刃石斧
24	東前坂	大字牟礼字橋詰	縄文中期加曾利E式土器片，磨石斧，打石斧
25	宮の下	大字豊野字宮下	宮の北脇 ― 縄文時代・石鏃，弥生後期箱清水式

			土器片，太形蛤刃石斧 宮の前 ― 縄文中期加曾利E式土器片，石鏃，弥生中期栗林式土器片，打石斧 宮の南松脇 ― 土師器破片
26	大　久　保	大字豊野字大久保	縄文前期南大原式土器片，魔石斧，打石斧，石鏃，土師器（手づくね盌）片等
27	山　道　平	大字平出字山道 561， 562	土師器片
28	桃　　樺	大字豊野字桃樺	土師国分期（坏等）土器片
29	山　　道	大字平出字山道 590	五輪塔（台3基，五輪2個）
30	北　の　原	大字豊野字北の原	弥生時代土器片（焼土），土師国分期坏
31	谷	大字豊野字谷	須恵器片
32	家　　岸	大字平出字家岸	須恵高台付坏，須恵器片（多量）
33	番 匠 窯 址	大字豊野字番匠	古窯址，焼土，窯滓，須恵器片（高台付坏，盌，甕等）
34	室　　飯	大字平出字室飯道	土師器片
35	東　浦　A	大字平出字東浦	縄文中期加曾利E式土器片，磨石斧，土師国分期土器片（多量），須恵器（坏，甕）片
36	東　浦　B	大字平出字東浦 298	土師器，須恵器（焼土），（木炭片）
37	平　出　北	大字平出字東浦 289	土師国分期（高台付坏，蓋等）土器片
38	酒裏（坂浦）	大字平出字番匠	須恵器（甕，壺）破片
39	小 丸 山 古 墳	大字平出西浦 880， 881， 882	円墳（前方後円墳）？長軸39ｍ，高さ5ｍ
40	平　出　南	大字平出字長山1943－1	縄文中期加曾利E式，後期堀ノ内式土器片，魔石斧弥生後期箱清水式土器片
41	名 称 不 明	不　　明	不　　明
42	庚　申　塚	大字平出字西浦1007－1	縄文時代磨石斧
43	鍛治久保古墳	大字平出字鍛治久保	人骨，直刀(2)，剣(1)，刀子(1)，鉄鏃(12)，鎗(1)，手斧(2)

第2節　歴史的環境

牟礼村は昭和30年4月中郷村と高岡村が合併して成立した純農村である。中郷地区牟礼は自然環境の項でも触れているように古来から信濃と越後とを結ぶ重要な交通ルートであった。特に江戸時代には北国街道牟礼宿として繁栄した。しかし明治21年信越線の開通とともに時代の流れから取り残され、昔日の栄光を失うにいたったけれども、今でも北国街道牟礼宿のたたずまいを静かに残している。

さて、牟礼村内の遺跡数は、金井汲次氏等の分布調査によれば、縄文式遺跡19、弥生式遺跡8、古墳2基、歴史時代（奈良、平安時代）29をかぞえるという。(註1)このうち縄文式時代の遺跡は、草創期から晩期にわたって散見されるが、いずれも小規模であって山開地の縄文式文化のあり方を如実に示している。これら縄文式時代の遺跡のうち今回緊急発掘調査を実施した丸山遺跡は規模も比較的大きく、

縄文式前期、中期、後期の土器、石器が古くから出土しており、注目されていた遺跡であった。

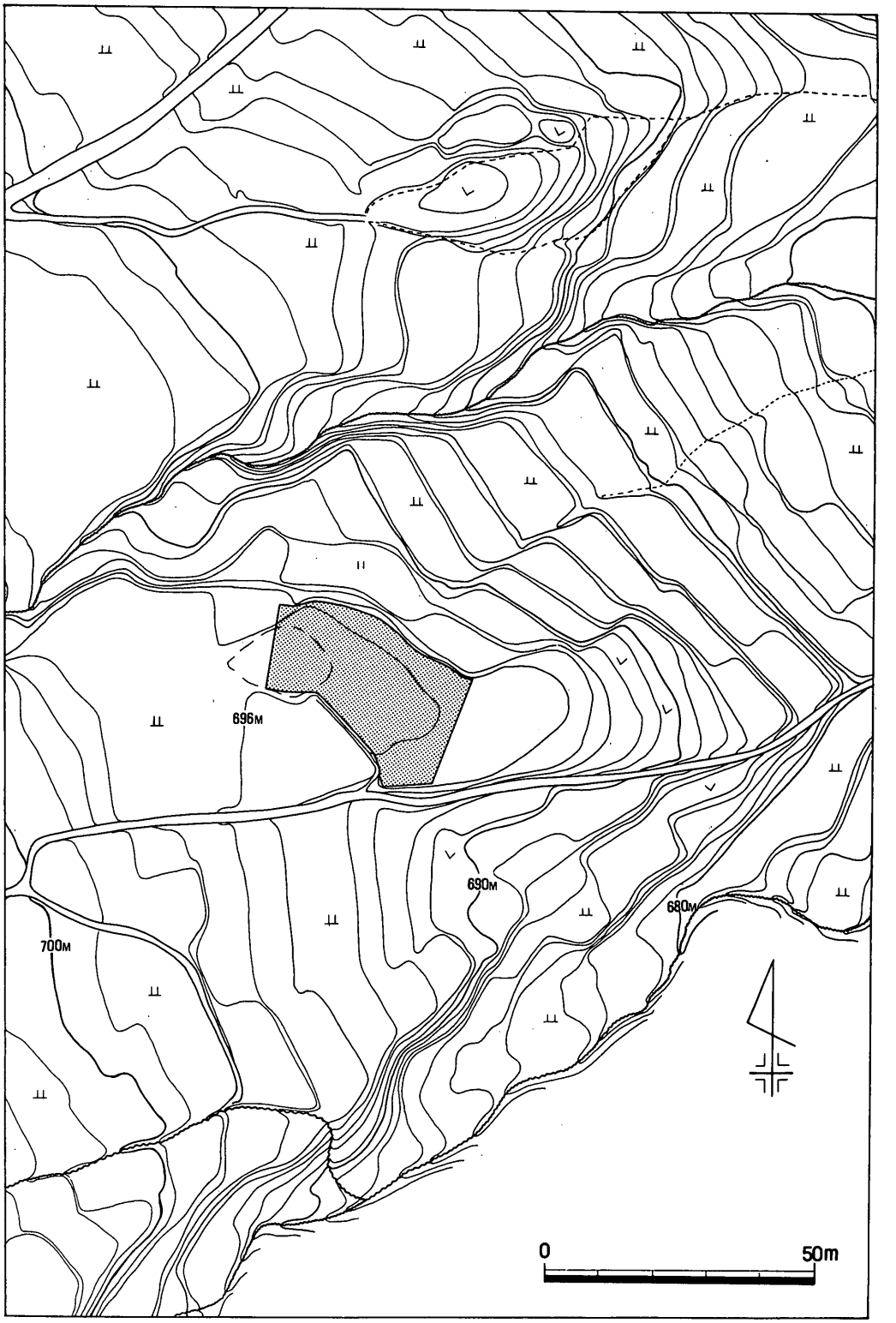
弥生式遺跡は、8ヶ所が確認されているだけであり時代的にはほとんどが後期の箱清水期のものである。中期のものは微々たる存在である。牟礼村に近接する善光寺平に弥生式文化が波及し開花したのが、中期中葉頃であることを考えると牟礼村に稀薄であるのは、水稲耕作を行なうに相応しい立地条件に恵まれなかったためであろうか。

牟礼村の開拓が急速に進展するのは、歴史時代に入ってからであった。それは、奈良、平安時代の遺跡が急激に増加し、山間僻地にも同時代の遺跡が存在することをもって知ることができる。いうなれば、開拓の鍬が奈良、平安時代に至って本格化したといえよう。それは朝廷の東北日本の経営と密接な関連をもっているものとして受取ることができるのではなかろうか。そして歴史時代の遺跡の所在は、現在の集落のあり方と一致している。

牟礼村の遺跡分布を見ると大部分が北国街道に沿って存在している。時代的にも歴史時代の遺跡が多い。中郷村史によれば、信濃国府より越後国府へ通ずる小官道が牟礼村を貫通しており、それが北国街道となったもの(註2)であろうとしている。いずれにしてもかつての北国街道沿いに古墳、歴史時代の遺跡が集中していることは、牟礼村が古代から信濃と越後とを結ぶ重要な交通の場所たる有力な証左といえよう。(高橋桂)

註1　「農業振興等開地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」1971・3
長野県教育委員会

註2　「中郷村史」中郷村史刊行会、昭和35年9月



第２図　遺跡周辺の地形と発掘図(1:1,500)

第Ⅲ章　調査日誌

8月3日（水）　天候　晴

午後、発掘調査についての打合せを牟礼村教育委員会、圃場整備会長と行なう。打合せに先だって教育次長池内健造氏と高橋は発掘現場を見に行く。

8月4日（木）　天候晴後曇

大平洋高気圧がどっしりと居坐り日本列島は今日も暑い。

発掘についての細部打合せを行ない、午前9時より作業開始。まず、ブルドーザーによって削平され、住居址の落ち込みと思われる3ヶ所を重点的に追跡する。

台地西南端の縄文前期の住居址とおぼしき地点を金井正三が中心となり調査を進める。畑の耕作、ブルドーザーによる削平で住居址はほとんど壁が破壊されてわずかに痕跡をとどめているに過ぎない。遺物の出土もきわめて僅少で床面密着の土器はほとんどない。1号住居址と命名。

台地中央の南縁部付近の落ち込みの追求の結果、平安時代の土師器の住居址を検出する。カマドは住居址の南東隅にあたるようだが畑の耕作で石が抜きとられたらしく検出できず。床面中央部にはおびただしい焼土と炭化物が認められた。土器の出土はまことに少ない。2号住居址と命名。

2号住居址の北東に近接して土師器の住居址を検出。ここは、ブルドーザーによる削平中に土器が出土し、地元の小中学生が発掘し土器破片を得たことは調査前に判っていた所である。カマドは小中学生によって完全に破壊され、痕跡としての焼土のみの検出にとどまった。ただ住居址の掘り込みは比較的深く、方形の立派な住居址である。

台地中央の北縁部近くに集石遺構の存在を確認。125cm×110cmの円形のピット内に人頭大から拳大の河原石を設置せしめている。この河原石は例外なく火熱を受けていたところから人工的なものであることは疑う予地がない。集石中には炭化物が混入していた。更に集石中に縄文前期の土器破片が検出された。従って縄文前期の集石遺構とみて差支えないであろう。望月静雄が中心となり検出に努め、午後2時に完了。望月静雄、今井正文、松沢伸一の3名で実測をする。

午後ブルドーザーを入れ、削平の足らない部分を剝土する。3号住居址の北東で土師器の住居址と思われる落込みを発見。剝土のくすぎで壁がほとんど破壊されたが、住居址の輪郭は把握できた。4号住居址と命名。

集石遺構の北部、まさに台地の縁辺に縄文前期の落ち込みを2・3個所発見。この検出を明日の作業の重点目標とする。

見学者、牟礼村役場職員数名。

8月5日（金）　天候晴時々曇、午後雨。

4号住居址の検出に努める。東北隅に存在したカマドは完全に破壊されており、壁もブルドーザーによって削平され、南壁は明瞭に看取できるがその他の壁は痕跡をとどめているのみであった。

4号住居址の検出と併行して、昨日発見した落込みを追跡した結果、径1m内外のピットを6ヶ検

出した。ピット内からは縄文前期の土器破片が発見され、縄文前期の遺構であることを確認した。

午後2時半頃より雨が降り出し、雨足は時とともに激しさを増したため3時に作業を中止する。

8月6日（土）　天候　曇

昨日の雨で山野の緑があざやかな彩りを呈している。気温は9月下旬なみで、夕方には肌寒いほどであった。従って作業は快調に進んだ。

昨日に続き土坑の追跡を進める。太田文雄、水野裕美子、松沢伸一の3名は1～4号の住居址の平板測量を行なう。

17号土坑内から大形の浅鉢形、小形の浅鉢形土器があたかも伏せたかのような形で検出された。特に大形の浅鉢形土器は圧巻であった。諸磯b式併行のものである。この土拡は190×180cmの方形を呈し、深さは34cmである。土坑内から木炭片、焼土が検出された。

4号住居址の東北方の12号土坑より早期の尖底土器が、ほぼ完形で横倒しの状態で出土した。絡状体圧痕文と条痕文の組合さった見事な尖底土器である。

台地の中央部分から東端の南縁部をブルドーザーで剝土した所、縄文前期土器が台地中央部よりやや東寄りで多量に出土した。その出土状態はブロックごとのまとまりで出土しているのでこれも土坑となる可能性がつよい。その他の土坑も縄文前期土器片が若干ではあるが出土しており、ほとんどの土坑は縄文前期のものとしてよいであろう。ただ9号土坑からは後期の土器が出土しており、これは縄文後期の土坑と思われる。

一方、地形図の中に住居址、土坑の位置を記入する測量作業を行ない夕方まで完了する。県文化課指導主事関孝一氏指導に見える。

8月7日（日）　天候　晴

昨日発見された台地南縁の土器群を追跡した結果、土坑とするには浅すぎるので土器溜りとすることが適当と判断した。が一応記述の必要土坑として取扱うこととした。従って土坑は全部で31ケとなる訳である。

土坑全体の測量を太田文雄が中心となり行なう。これと併行して土坑の清掃と掘り足りない部分の発掘を進める。その結果、2号土坑は二段に構築されており、下段の土坑より無文有段の浅鉢形土器が横倒しとなって壁に密着して出土した。諸機b式併行のものである。午後3時頃土坑の清掃完了。広瀬昭弘が写真撮影をする。

遺構の全体測量を松沢芳宏が中心となり、午後3時までに完了する。

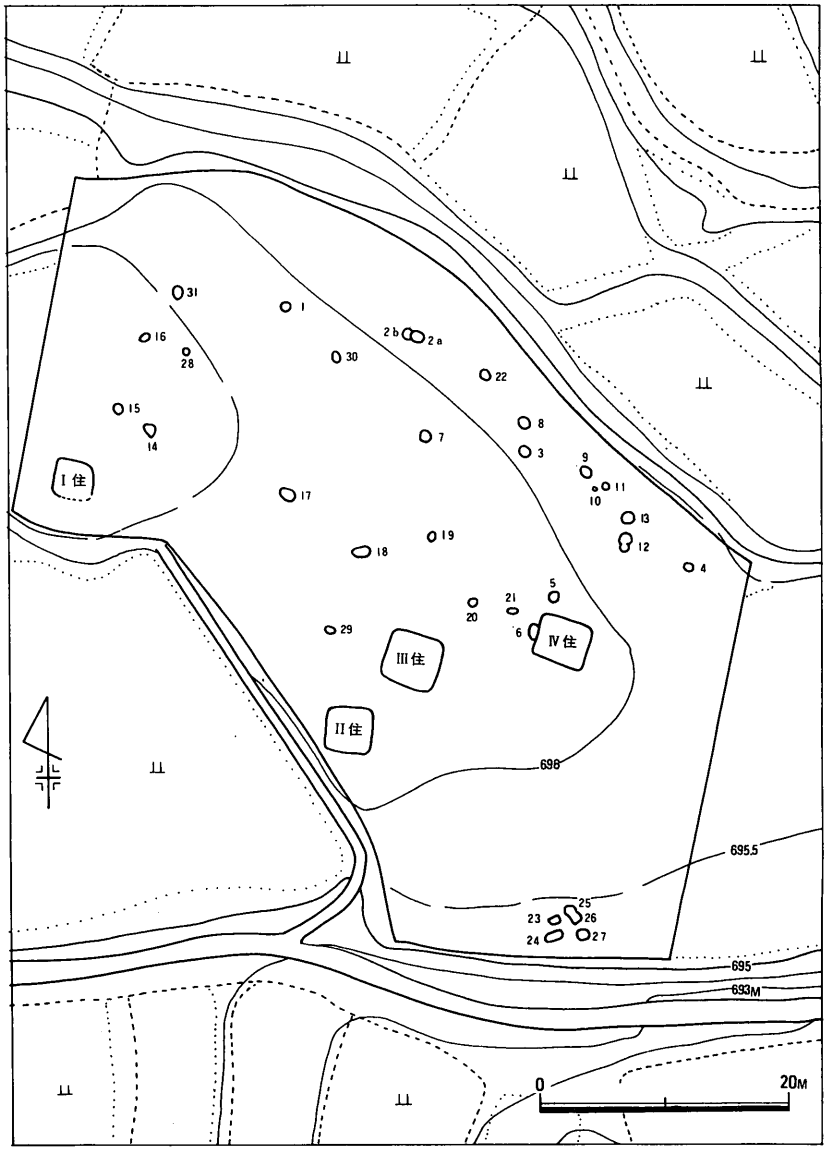
なお、2号住居址の西側に幅40cmほどの溝状遺構が発見された。調査の結果この溝状遺構は畑の耕作に関連のものと判断するを適当と結論した。ただこの溝状遺構の南端は土拡となっており土器破片と骨片が少量出土した。土拡の実測は午後6時近くにようやく終了。夕闇のせまる中で簡単に労をねぎらう。この中で最後に発見した土坑内出土の土器と骨片が話題の中心となり、出土土器が縄文前期であることが判明し、もっと詳明に調査する必要があるとの結論に達し急拠追跡したところ前期土器破片と比較的大きい骨片を得ることができた。後に東京で鑑定して頂いた結果人骨の一部であるとの

判断が示された。そういう意味で本遺跡の土坑の性格を考える上で重要な資料となった。

午前中村民に対して遺跡の公開を行なった。多数の村民が見学に見え賑やかであった。

見学者、大沢一夫（長野県考古学会々長）、森嶋稔（同会事務局長）ほか数名の同会会員。

（高橋　桂）



第３図　遺構分布図(1：600)

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　遺構

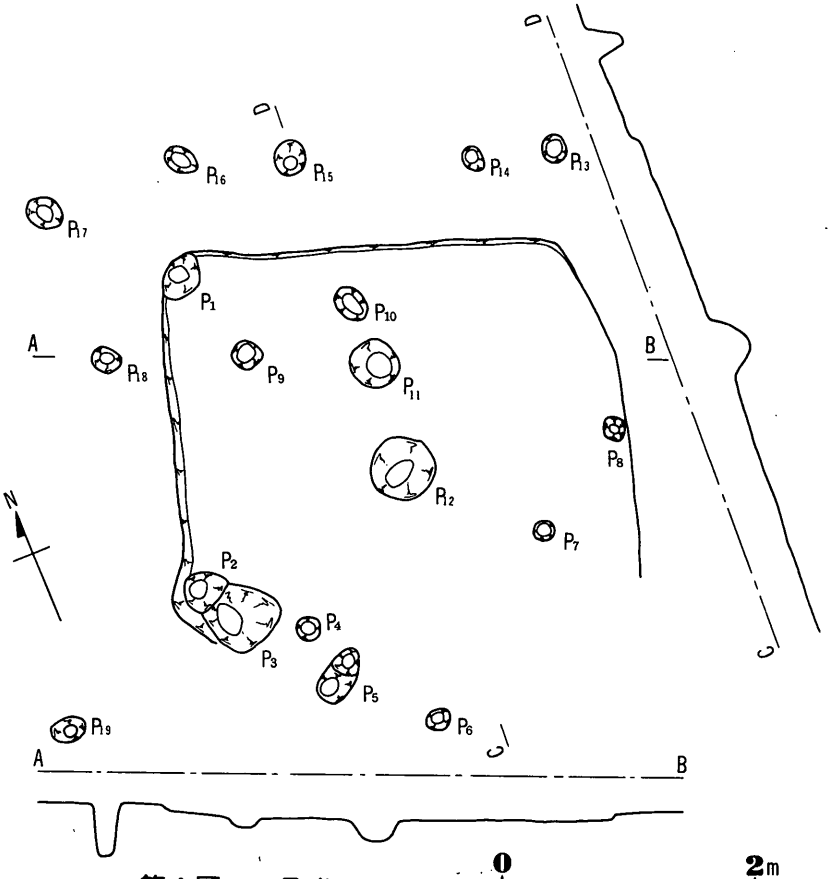
１　住居址

１号住居址（第４図）

本住居址は、発掘区域のもっとも北寄りで検出された。この発掘区域は、北側より南側に向って傾斜するように削平されているため、本住居址の南半分の壁が確認されなかったが、東西320cm、南北現存300cmで、長方形のプランを呈していたものと思われる。なお、壁高は北側のもっとも深いところで６cm残存していた。本住居址に附随するピットは、住居址内12個、住居址外７個で合計19個が検出された。それぞれに深さは異なるが、主柱穴と思われるＰ１～Ｐ２は約40cm、その他の住居址内ピット（Ｐ３～Ｐ12）の深さは10～20cmであり、このうちＰ12では僅かに焼土が検出され、炉であると推定される。また、住居址外ピット（Ｐ13～Ｐ19）の深さは30～50cmで、比較的規則正しく並んでいる。

遺物は後に示すように、少量ではあるが、縄文前期関山式併行がほとんどである。プランが長方形であることを考え合わせると、本住居址は、縄文前期関山式に位置づけられよう。

（金井正三）



第４図　１号住居址(1:60)

2　土坑（第5～8図）

本土坑は扇状地を流れる小河川に浸蝕された舌状台地状の地形上に営まれたもので、総数31基にのぼる。検出地点は舌状台地中央頂部より北縁部にかけて広範囲に散在し、互いに切り合い関係をもたない群と、舌状台地南縁部の比較的小範囲に切り合い関係をもつ群とがある。便宜上前者をAブロック、後者をBブロックとして以下個々の土坑についての説明を行なうこととする。

1号土坑

Aブロック北東部の舌状台地北縁にあり、長径138cm、短径128cmのほぼ円形に近いプランを呈し、土坑の深さは41cmを計る。土坑床面（以下床面とする）は平坦であるが踏み固められた様子はなく壁の立ち上りは垂直に近い。土坑東側には径30cm程の小ピットが付髄する。覆土中には若干炭化物が混入する。

出土遺物は少量の諸磯b式土器片と磨石が1点認められる。本土坑は該期の所産であろう。

2号土坑

Aブロック北側の舌状台地縁部に位置し北側はすぐに斜面となる。長径195cm、短径110cmで東西に細長く中央でくびれて瓢形を呈し、その東半分が一段深くなる。当初2基の土坑を想定させたが、覆土、遺物の出土状況の観察から1基の連続した土坑であることが判明した。床面までの深さは西側の浅い部分（仮称a土坑とする）で25cm、東側の深い部分（仮称b土坑とする）では40cmを計る。床面はa・b土坑共平坦であるが、a土坑のそれはb土坑に向かって若干の傾斜を見せている。覆土は柔らかい黒色土で数個の人頭大の礫と炭化物が混入する。

遺物は縄文前期後半の諸磯b式土器片を主体として関山式、諸磯c式、十三菩提式が混入する。またそれと共に諸磯b式の完形の浅鉢形土器がa土坑の縁からb土坑に向かって落ち込むように器体を傾け、口縁部前方には人頭大の河原石があたかも蓋をしていたかのごとき状態で横たわっていた（写真図版四参照）。土坑の時期は諸磯b式期と思われる。

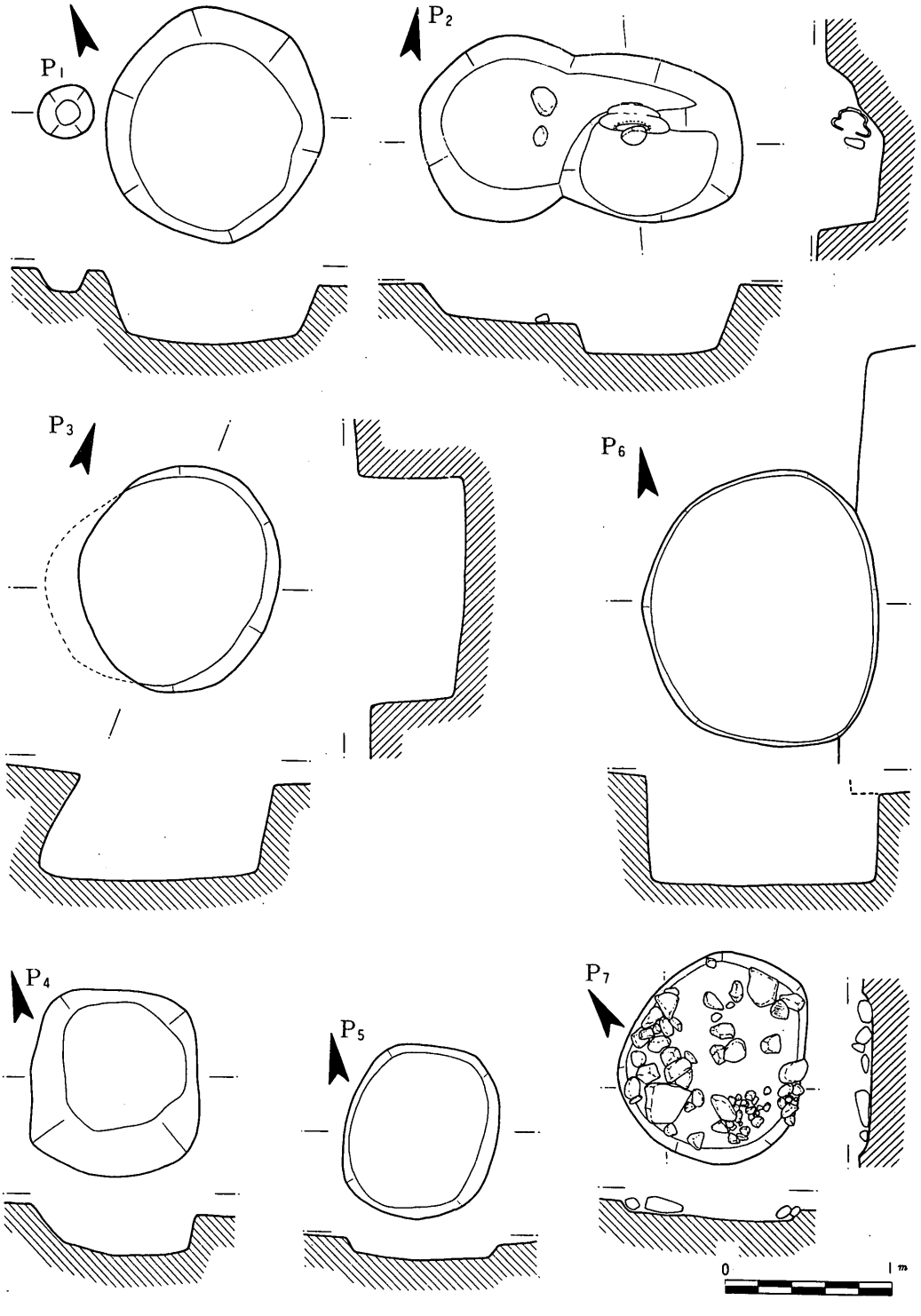
3号土坑

Aブロック東部の舌状台地北縁にあり、長径138cm、短径120cmの卵形を呈し、深さは65cmを計る。片面は堅くしまり平坦で、そこからの北、東、南壁は垂直に近い立ち上りを見せているが、西壁は上端から床面に向って20cm程のふくらみをもち、いわゆるフラスコ状の土坑形態を示す。覆土中には多量の炭化物が混入し、床面付近は粘性に富み堅くしまった暗褐色土が堆積している。

遺物は諸磯c式の土器片が主体をなし、若干後期加曾利B式土器片が混入する。諸磯C式期の土坑として大過あるまい。

4号土坑

Aブロック北東端部の傾斜地に移行し始める舌状台地縁辺にあり、長径110cm、短径100cmの隅丸方形のプランを呈し、深さは台地縁辺であるためか23cmを計るにとどまるやや浅い土坑である。床面は若干凹凸をもち、しまりも弱い。壁の立ち上りは比較的緩くだらだらとしている。



第5図　土　拡(1)

遺物は諸磯ｃ式の土器片を若干出土したのみである。該期の土坑であろう。

5号土坑

Ａブロック東部の舌状台地頂部、４号住居址の北側約１ｍの地点にあり、長径105cm、短径90cmの隋円形のプランを呈し、深さは10cmと極めて浅い。床面は平坦ではあるが桑弱で壁の立ち上りは緩い。

遺物は小形の浅鉢形土器が１点（第12図・２）の他は破片が少量出土したのみである。諸磯ａ式期の土坑である。

6号土坑

Ａブロック東端の舌状台地頂部にあり、４号住居址によって東側上部を切られている。長径165cm、短径140cm、深さ50cmの円形のプランを呈す。壁は垂直に近い立ち上りを示し、床面は踏み固められ平坦である。さらに覆土下部は粘土を含有した暗褐色土で堅くしまっていた。覆土中には多量の炭化材が混入している。

遺物は覆土上位から中位にかけて比較的まとまって諸磯ｂ式土器片がロート状に出土し諸磯ｃ式も若干混在している。諸磯ｂ式の土坑である。

7号土坑

Ａブロック中央の舌状台地頂部に位置し、長径125cm短径110cmの円形プランを呈す集石土坑で、黄褐色土層への掘り込みは20cm前後と浅く皿状の断面をとる。礫は床面に接するかあるいは若干浮いた状態を示し、壁に多少くい込むものも見られる。大きさは挙大のものが主体を占め、人頭大、小児挙大のものもある。それらのほとんどは火気を受けているためか赤色化してもろいものやひび割れている。また磨石もそれらに混って見られた。さらに覆土中より多量の炭化材、焼土が検出された。

遺物は諸磯ｂ・ｃ式の土器片が少量と石匙、磨石が出土している。諸磯ｂ式期の土坑と思われる。

8号土坑

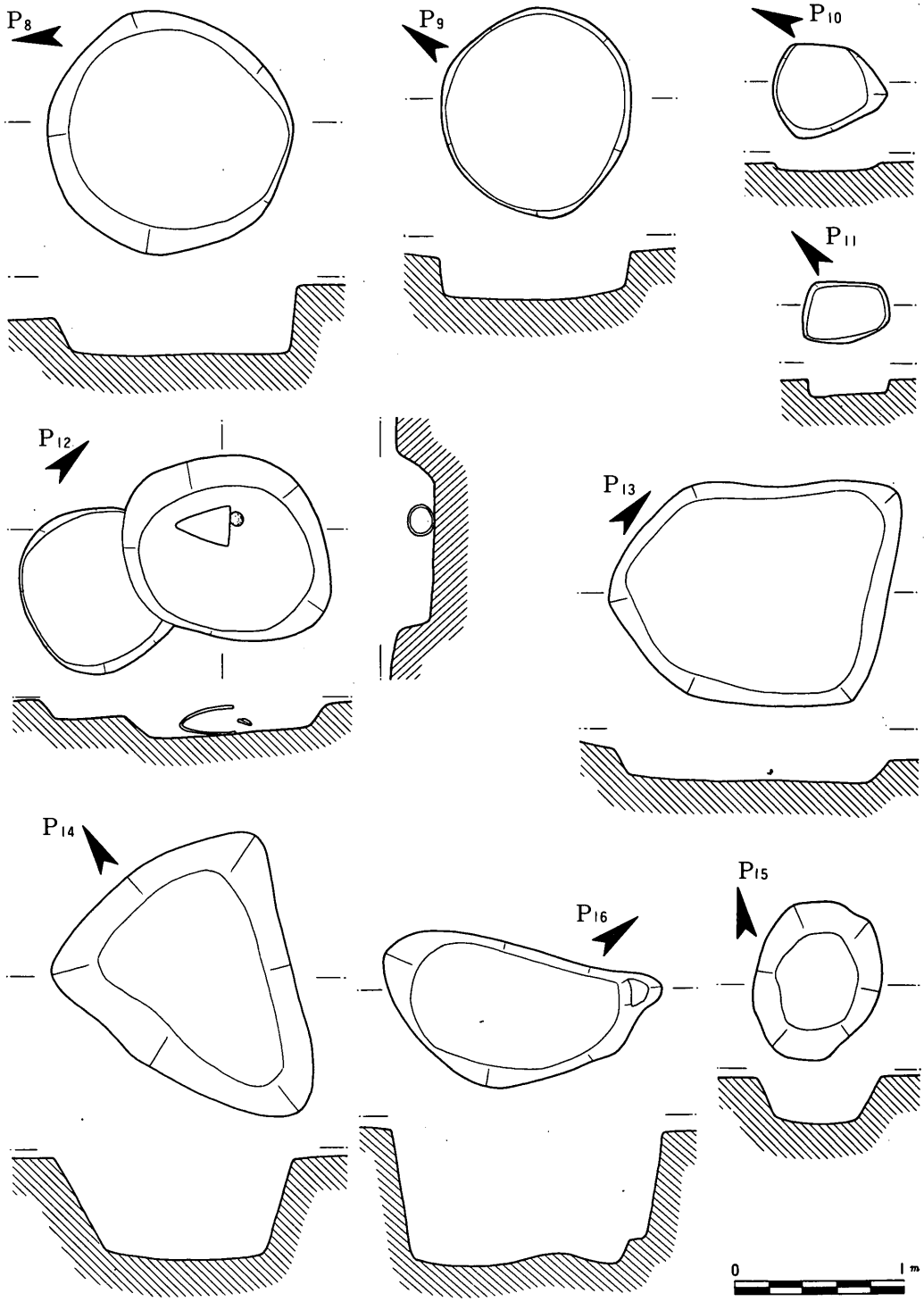
Ａブロック北側の舌状台地縁に位置し、１ｍ南には３号土坑がある。長径145cm、短径142cmのほぼ円形を呈し、深さは斜面に移行する地点にあるため南壁で40cm、北壁で20cmを計る。床面は堅くしまり平坦で、壁は垂直に近い立ち上りを示す。覆土中には炭化材を少量含み、礫を若干混入する。

遺物は諸磯ｂ式土器片が少量出土しただけである。該期の土坑である。

9号土坑

Ａブロック北東部の舌状台地縁辺にあり、すでに北に向かって傾斜が増しつつある地点に存する。掘り込み面が検出された時はすでに削平が行なわれていたため土●上部は掘削されていた。現在で長径120cm、短径112cm、深さ30cmにとどまる。黄褐色土層が50cm程削平されていることを考え合せると80cm前後の深さに達していたものと思われる。床面は平坦で、壁の立ち上りはほぼ垂直である。

遺物は後期加曽利ｂ式が主体をなし床面付近より出土している。また諸磯ｃ式も混入する。後期加曽利ｂ式期の土坑であろう。



第6図　土　拡(2)

10号土坑

Aブロック北東部の舌状台地縁辺にあり、9号土坑のすぐ東側に位置する。長径70cm、短径50cmと比較的小形な不整円形プランを呈し深さは15cmを計るにとどまる。さらに9号土坑同様削平により上面は削られているため東側ではすでに壁の立ち上りは認められない。

遺物は認められなかった。

11号土坑

Aブロック北東部の傾斜面に移行し始める舌状台地縁辺にあり、10号土坑となかば接する位置にある。長径50cm、短径35cmと10号土坑よりもさらに小規模な長方形プランを呈す。床面は平坦で壁の立ち上りは垂直に近い。

遺物は出土せず、時期は不明である。

12号土坑

Aブロック東端の舌状台地縁辺にあり、2基の土坑が切り合い関係をもって検出された。2基の土坑のうち南側の切られている古い土坑をA号土坑、北側の新しい土坑とB号土坑とした。A号土坑は径が100cm程の円形プランを呈し、深さは10cmを計り、壁の立ち上りはほぼ垂直である。床面はほぼ平坦であるが、北側に向い緩く傾斜している。このA号土坑からは遺物は検出されていないが、B号土坑より古いことは切り合い関係より知り得る。

B号土坑はA号土坑を切って北側に構築されている。長径125cm、短径110cmの不整円形プランを呈し、深さは10cm程であるが北及び東側の立ち上りは明瞭でない。床面はほぼ平坦である。

本土坑北東部で床面に密着するようにして縄文早期の絡条体圧痕文が施文された土器が1個体出した。また、この土器の口縁部に接するように径10cm程の円形扁平な石が伴って出土した。

以上、12号土坑は出土遺物よりしてB号土坑は縄文早期後半の所産、A号土坑はそれ以前の早期のものと考えられる。

13号土坑

12号土坑の北側に接する。Aブロック北東部の舌状台地縁辺にあり、長径163cm、短径130cmの不整長方形プランを呈し、深さは20cmと浅い。床面は平坦で壁の立ち上りは垂直に近い。

遺物は諸磯c式土器片が数片出土したにとどまる。該期の土拡であろう。

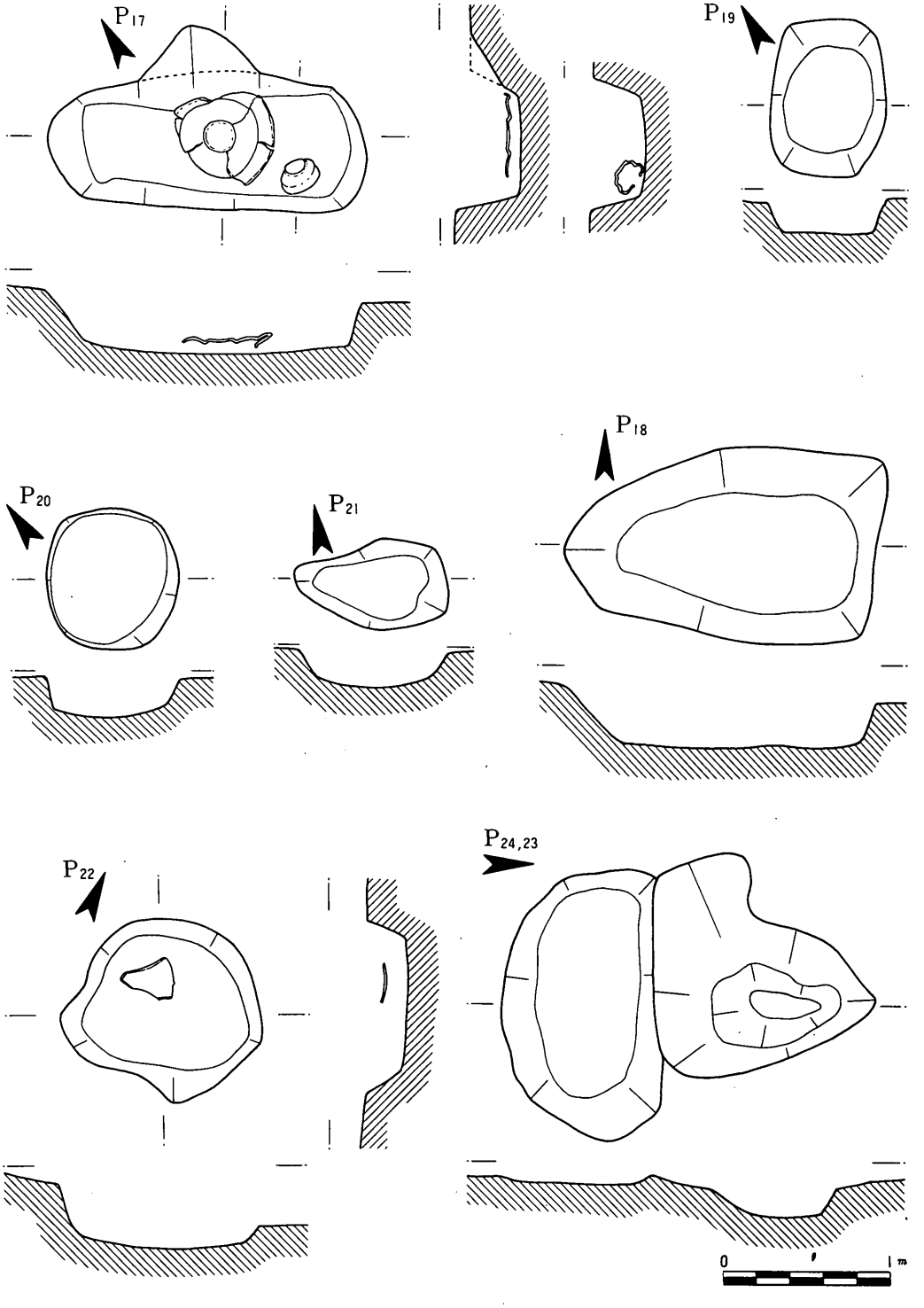
14号土坑

Aブロック西端の舌状台地頂部に位置し、長径170cm、短径140cmの不整三角形を呈し、深さ75cmと比較的深い。床面は桑弱で壁の立ち上りは垂直に近い。覆土は粘土プロックを混入した黒色土で、炭化物を含み、土拡中位には人頭大から拳大の礫が多数混在している。

遺物は、礫と共に集中して出土したが量的にはさほど多くはない。諸磯c式期の土拡である。

15号土坑

Aブロック西端の1号住居址の北側約5mの舌状台地頂部にあり、長径93cm、短径76cmの不整楕円



第 7図　土　拡(3)

を呈し、深さは28cmを計る。床面はやや凹凸があり、壁の立ち上りは多少緩い。

遺物は検出されなかった。

16号土坑

Aブロック西端の1号住居北側にあり、舌状台地頂部に位置する。長径165cm、短径82cm、深さ81cmを計る不整長円形を呈す。床面は凹凸が激しく、北端部には10cm程の段をもって壁の立ち上りとなる。壁の立ち上りは急で垂直に近い。覆土中には礫を多量に混入していた。

遺物は覆土上部に多く下部に移行するにしたがい減少する傾向を示した。時期は諸磯b式期で多量の土器片と共に石匙、磨石、剝片等も出土している。該期の土坑である。

17号土坑

Aブロック中央やや南側の舌状台地頂部に位置し、周辺の他の土拡とは距離を隔てて存在する。プランは長径190cm、短径80cm、深さ34cmの長方形を呈し、他の土坑とは若干趣きを異にする。さらに完形の浅鉢形土器が大先・小形の2個出土した点についても特異な存在である。

大形の浅鉢形土器は土坑中央やや北寄りに裏返した状態で底部を上にし、北壁に接する鍔の部分は土圧により折り曲げられたかのごとくほぼ垂直な壁に沿って直立する。他の部分は床面からは5cm程浮いて、平たく押しつぶされた状況を呈している。それに対して、その10cm程東側にある小形の浅鉢形土器は南壁から流れ込むように斜めに裏返しで床面より10cmから15cm浮いた状態で出土し、その破損状況は押しつぶれた形跡はなく内部に黒色土がつまったまま数箇所のヒビ割れにもかかわらず丸味を帯びた形状を示し、前者とは異なる破損状況を示している。

覆土中には他の土器片は少なく、礫の混入も認められなかった。さらに炭化物が多量に混入し、それに伴う事象か、南壁の一部が床面付近で若干焼成を受け赤色化している。なお、覆土中に炭化物以外の遺存物がないか精査したところ骨片と思われる白色の粉末が摘出されたが微量であり採取、分析が不可能であったが、かかる事実のあったことを付記しておきたい。

諸磯b式の良好な土坑資料である。

18号土坑

Aブロック中央の舌状台地頂部にあり、17号土坑の東側6mの地点に位置する。長径183cm、短径117cm、深さ36cmの不整長方形を呈する。床面は中央がやや深く、壁は緩い立ち上りを示す。

遺物は認められなかった。

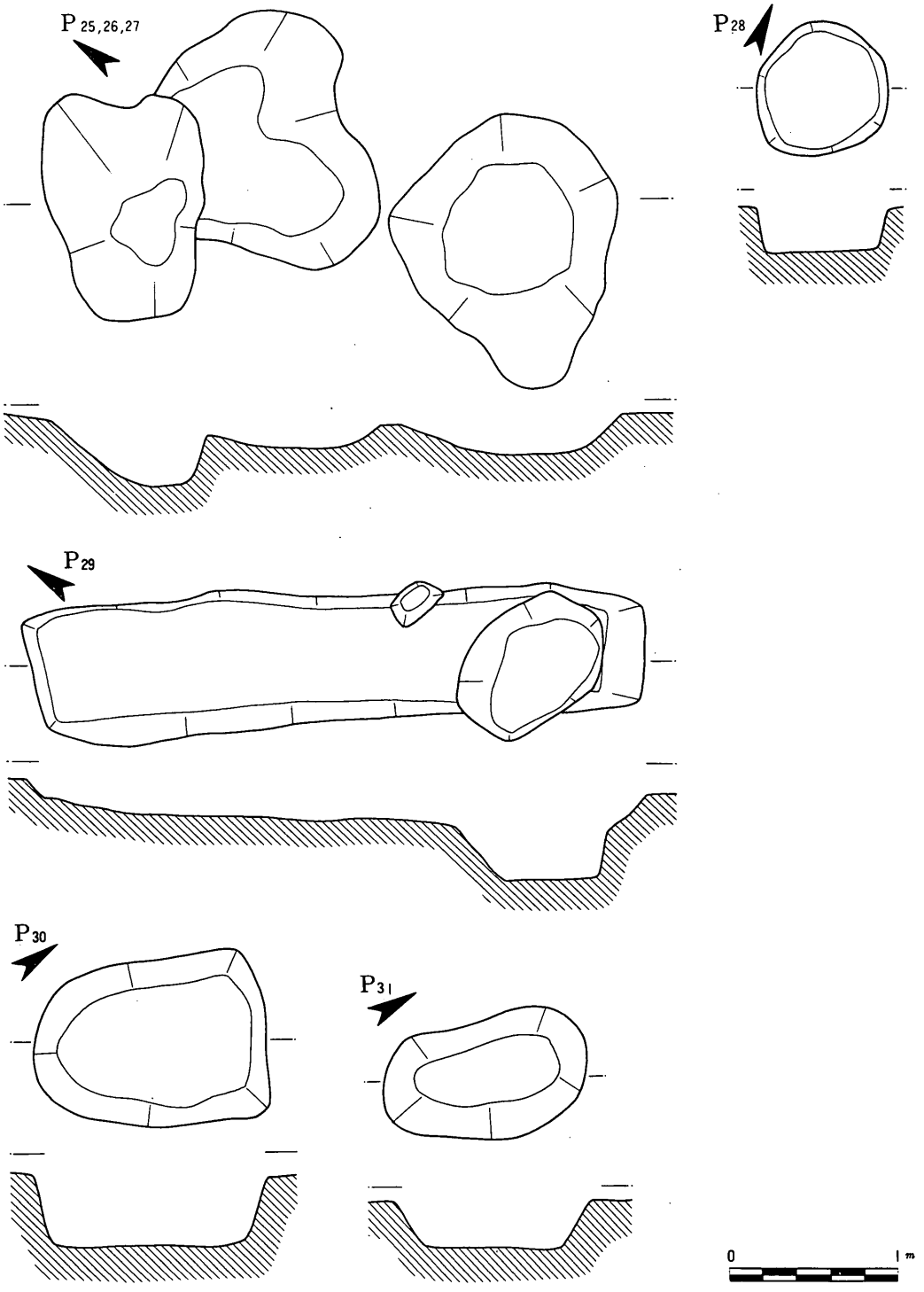
19号土坑

Aブロック中央からやや南寄りの舌状台地頂部にあり、長径93cm、短径70cm、深さ20cmの隅丸長方形のプランを呈す。床面は平坦で壁の立ち上りは良好である。

遺物は認められなかった。

20号土坑

Aブロック東部の舌状台地頂部にあり、長径85cm、短径80cmのほぼ円形に近いプランを呈し、深さ



第8図　土　拡(4)

は26cmを計る。床面は柔らかく丸味をもつが、壁の立ち上りは垂直に近い。

遺物は認められなかった。

21号土坑

Aブロック東部の4号住居址西側約2mの舌状台地頂部にあり、長径90cm、短径55cmの不整円形を呈し、深さは27cmを計る。床面は柔らかく凹凸が激しく、壁の立ち上りも比較的緩い。

遺物は認められなかった。

22号土坑

Aブロック北端の舌状台地北縁部にあり、長径120cm、短径110cmの所々突出した円形に近い不整形なプランを呈し、台地縁辺の傾斜地に移行し始める地点であるため深さは南西部で30cm、北東部で15cmとなる。床面は平坦で壁の立ち上りも比較的良好である。覆土中には炭化物を若干混入している。

遺物はややまとまって出土しているが、特に諸磯b式の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大形破片が床面より15cm程浮いた状態で器内面を上にして出土している。諸磯b式期の土坑である。

23号土坑

Bブロックにあり、24号土拡と切り合い関係を示すが同時存在の可能性が強い。プランは不整形で中央よりやや北側で20cm前後凹み、あとはだらだらとした立ち上りでAブロック中の土坑とは異なる趣きを呈す。(当初23号土坑から27号土坑までは小範囲にまとまって土器が露呈してきたことから住居址を想定させたが、掘り下げ精査した結果、住居址床面、柱穴と思われるものは発見されず、5個の凹みになることが判明し、一応土坑として取り上げることにした。)

出土遺物は諸磯b式土器で比較的多量に認められる。深鉢が大半を占める。

24号土坑

Bブロックにあり、23号土坑と切り合い関係を示す。不整楕円形のプランを呈す。深さは10cm弱でだらだらの立ち上りを示す。

遺物は諸磯b式土器片を多量に出土し、石匙も1点伴出している。

25号土坑

Bブロックにあり、26号土坑と切り合い関係を示し、不整形のプランを呈す。深さは30cmで南壁は垂直に近い立ち上りを見せる反面他の壁はだらだらとしている。

遺物は諸磯b・c式土器片が多量に出土し、b式土器が主体を占める。

26号土坑

Bブロックにあり、25号土坑と切り合い関係を示す。不整形プランを呈し、深さは10cmと浅い。

遺物は多量な諸磯b式土器片を出土した。

27号土坑

Bブロックにあり、26号土坑となかば接する南側に位置する。プランは不整円形で、深さは前者より若干深い程度である。壁はだらだらと立ち上る。

遺物は諸磯b式土器が量的にまとまって出土している。

以上23号土坑から27号土坑について若干つけ加えておくが、これら5個の土坑についてはその出土状況からして、それぞれ独立した土坑と考えるより、凹地に土器を廃棄した土器だまり的な性格を有

する遺構と思われる。

28号土坑

Aブロック西側の舌状頂部にあり、16号土拡の東約2.5mに位置する。長径18cm、短径75cmの円形プランを呈し、深さは27cmである。壁の立ち上りは垂直に近い。床面は平坦である。

遺物は認められなかった。

29号土坑

Aブロック南側で3号住居址の西約4m地点の舌状台地頂部に位置する。長径92cm、短径68cmの楕円形を呈し、深さは50cmである。土坑上部は後世の攪乱によりカッティングされている。壁の立ち上りは南側が急で北側は緩い。

出土遺物は諸磯b式土器片で、復元可能な黒色精製の浅鉢形土器が出土し、さらに指頭大の人骨片が10数片検出されている。

Aブロック西側の舌状台地頂部にあり、28号土坑の北約4mに位置する。長径120cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さ30cmを計る。壁の立ち上りはやや緩い。

遺物は認められなかった。

31号土坑

Aブロック北西部の舌状台地頂部からやや北傾斜に移行し始めるところにあり、1号土坑の東約6mの地点に位置する。長径140cm、短径100cmの隅丸長方形を呈し、深さ45cmを計る。城の立ち上りは良好である。

出土遺物は諸磯c式土器及び十三菩提式土器であるが、前者が主体を占める。諸磯c式期の土坑であろう。

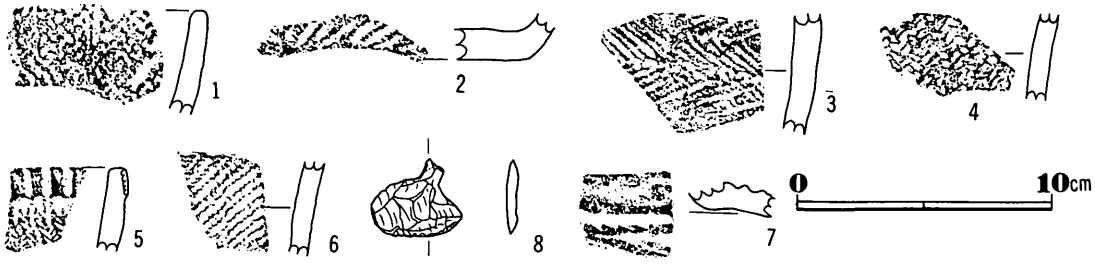
（太田文雄）

第2節　遺物

1　住居址内出土遺物

1号住居址出土遺物（第9図）

本住居址から出土した遺物は、縄文前期関山式土器9片と上原式土器2片及び石匙1点の計12点のみである。



第9図　1号住居址出土遺物(1:3)

1は縄文のみの土器の口縁部、2は底部である。いずれも繊維を含有している。

3はループ文、4は組紐文であり、繊維を含有している。5はもっとも特徴的な神ノ木式土器である。すなわち、複合口縁を呈し、櫛歯状工具による刺突文を施している。地文は縄の束である。

6～7は上原式である。いずれも繊維は含有していない。6は縄文のみの土器、7は浮線文が貼付された浅鉢である。

8は石匙である。横巾3.6cm、厚さ4㎜である。表裏面共やや荒く剝離が行なわれているが、刃部は細かく調整されている。石質はチャートである。(金井正三)

2　土坑内出土遺物

第1群　縄文早期の土器（第10図、第11図、1・2）

縄文早期後半の条痕文系土器である。口縁部及び尖底部の一部分を欠損するのみの尖底深鉢である。

口径19.8cm、高さ26.8cmを測り、口縁部よりほとんど屈曲なく底部に至る。地文として器全面に条痕文を施文してあり、口縁部には絡条体圧痕文による文様帯を有する。

絡条体圧痕文は、口唇直下に縦位、その下部に横位と施文されている。横位の絡条体圧痕文の施文方向は〔左→右〕で、部分的に二段及至三段施文される。施文は、器面に強く押しつけている。特に縦位の絡条体圧痕文では指で原体を挾み込むように施文しており、器内面に指頭痕が認められ、口縁が若干押し上げられ小波状となっている。

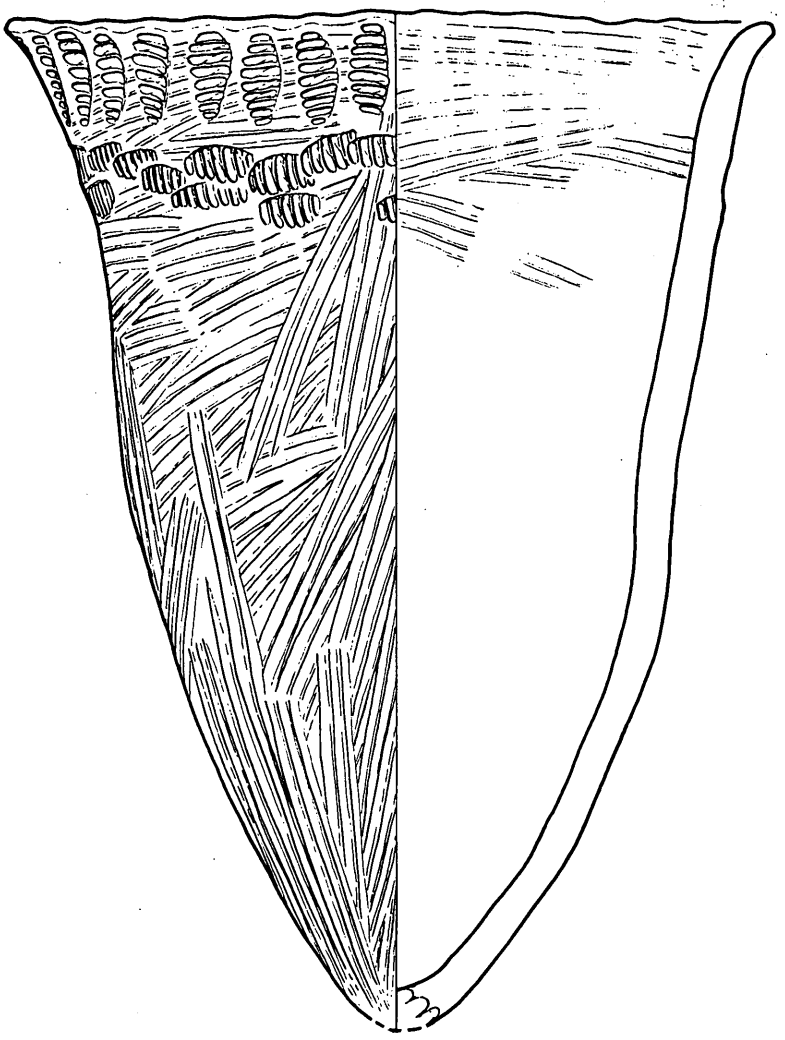
施文原体は、Rの撚紐を直径1cm程の比較的太い軸に8回程巻きつけたものである。この原体の特徴として、まず撚紐は○段、一段の撚りとも非常にゆるく撚ったものであること。また軸が木、竹の様に堅いものでなく、茎の様な軟かい軸であるということがあげられる。軸が軟かいという点は、圧痕文の中央部のみが深く押されていることより知られる。

地文の条痕文は、口縁部では横位に、それ以下では左下りの斜位あるいは縦位方向に施文されている。

絡条体圧痕文は横位の条痕を磨り消すことなしに施文しており、絡条体圧痕文の施文の後に更に左下りの条痕文が施文されている。胴部においても条痕文の施文は一回のみでなく、重複して施文されている部分が認められる。器内面の条痕文は、口縁内面のみで横位に施文されている。又口唇部にも部分的に条痕文が施文される。これら条痕文の圧痕は浅く、特に口縁内面では擦痕状となっている。

この条痕文は貝殻によるものではなく、前述した絡条体圧痕文の原体を回転させずに引きずった絡条体条痕文と思われる。これは、条痕文の条間が1～2㎜と非常に狭く、これが絡条体圧痕の間隔に近似し、又条痕文の広さ(註1)も絡条体圧痕文の撚紐の太さとほぼ同じであること、更に口縁内面の条痕文に僅かではあるが絡条体圧痕文原体によると思われる撚糸圧痕が認められるからである。なお、器内面の条痕文は、完全に引きずらずに部分的に回転している可能性がある。

条痕文施文の意味については、諸説があり定かでないが、本土器の条痕文をみると、器表面の条痕文はある程度の器面調整の後に施文したものと思われるのに(註2)対し、内面は、粗くナデが加えられているのみで、ほとんど器面調整が行なわれていないようで、凹凸が目立ち、繊維、砂礫等の含有物が表面にあらわれている。これらの点から口縁内面に施文された条痕文は、器面調整としての意味が大き



第10図　土拡内出土土器(Ⅰ)

かったのではないかと思われる。

胎土には繊維を含み、砂粒、径5㎜程の砂礫も含有する。器厚は1㎝前後を測る。二次焼成のため底部附近は磨滅している。(広瀬昭弘)

註

1．多摩ニュータウンNo.269遺跡の報告で、貝殻条痕文と区別して述べられている。〔安孫子、1967〕

2．器面調整のため、文様として、器面調整と文様とを兼ねている等の解釈がある。〔岡本、1962、安孫子、1967〕

第２群　縄文前期の土器

第１類　関山式土器（第11図）

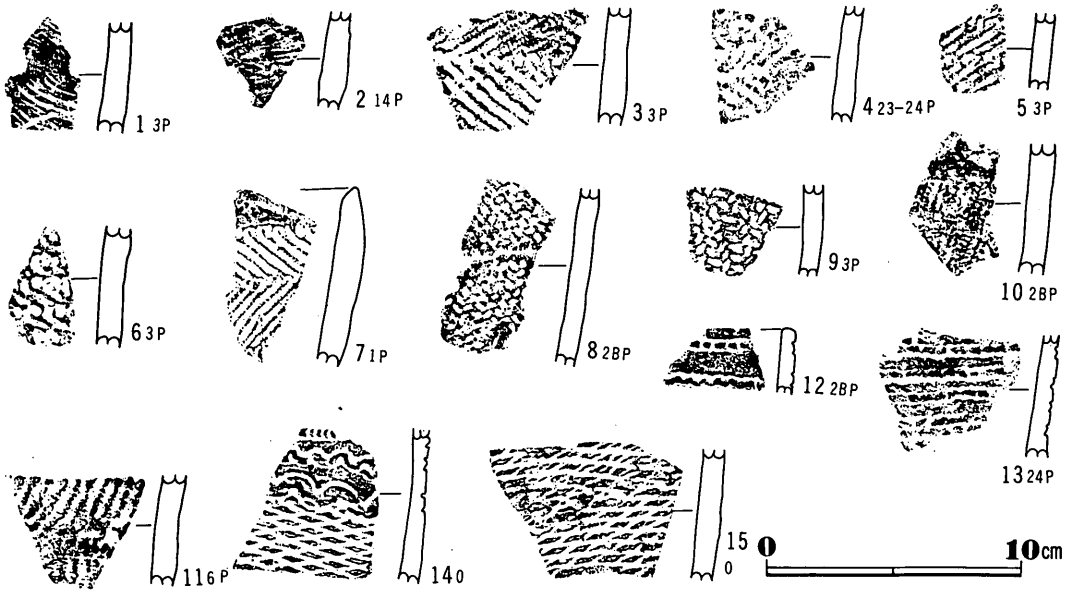
本類土器は長野県においては神ノ木式と呼ばれている。各土坑から少量づつ検出されたが、まとまって出土した土坑はなく、流れ込みによるものと考えられる。

ループ文（３～７）　いずれも繊維を含有しているが、比較的整形は良い。３・７のように羽状になるもの、４のように右下がりと左下がりを交互に施文するものがある。また、５・６のように同じ方向のものを施文するものもある。器形は、ほとんどが深鉢形を呈すると思われる。７は、波状口縁である。

組紐文（８～９）　いずれも丸組紐である。繊維は含有していない。焼成・整形とも良好である。関山式及びその併行形式に特徴的な文様であり、その他の時期には使われない文様である。

縄の束（10）　紐を４本束ねて、回転押捺したものである。10は、約2.5cmのO段の紐を４本合わせて、上下を他の繊維でゆわえた原体を回転押捺したものである。この文様は、関山式にも若干伴出するが、神ノ木式に特徴的な文様である。

コンパス文（12～15）　いずれも、コンパス文と爪形文を併用している。12・13は、繊維を含むが、焼成・整形ともに良好で、あるいは、黒浜式に属するものかも知れない。いずれも、かなりくずれた



第11図　土拡内出土土器(2)(1:3)

コンパス文である。14・15は、同一個体である。爪形文1条、コンパス文2条を横走させ、以下はきれいな網目状撚糸文を施している。網目状撚糸文は、関山式・神ノ木式にはほとんどなく、東北地方の影響と考えられる。

第2類　諸磯a式土器（第13図・第12図1～2）

本類土器は、各土坑から出土したものの、量的にはあまり多くはない。

縄文（16～33）　いずれも深鉢形を呈すると思われるが、第5号土坑から出土した第12図2は、小形浅鉢である。22・24は、口唇部にも縄文を施文している。25・26及び第12図1は口唇部に八の字状の刻目を施している。27～33は、底部である。いずれも平底であるが、33は、若干上げ底である。胴部への立ち上がりは、若干、外反しているものが多い。31は、網代底であるが、時期が下るかも知れない。

爪形文（34～41）　器体部全面に縄文を施文し、口縁部に爪形文帯をめぐらるものである。第12図3は、口径33cm、推定高35cmのきわめて大形な深鉢である。胴部には羽状縄文を施文し、口縁部には平行沈線文を数条横走させて、その上に左開きの爪形を施文している。口縁部には八の字状に刻目を施している。34～37は、薄手小形の土器である。胴部以下は、縄文あるいは羽状縄文を施文し、口縁部の無文帯には爪形文帯を2～3条横走させている。36・37は、低い波状口縁の波頂部である。

格子目文（42～48）　器形は朝顔形の深鉢であり、口縁部は平縁である。文様は、胴部は縄文であり、口縁部文様帯は上下を2条づつの爪形文帯で区画し、その爪形文帯間を平行沈線で格子目を描き、格子目の交点には円形竹管文を押捺してある。本種土器は、いずれも同じ文様構成である。

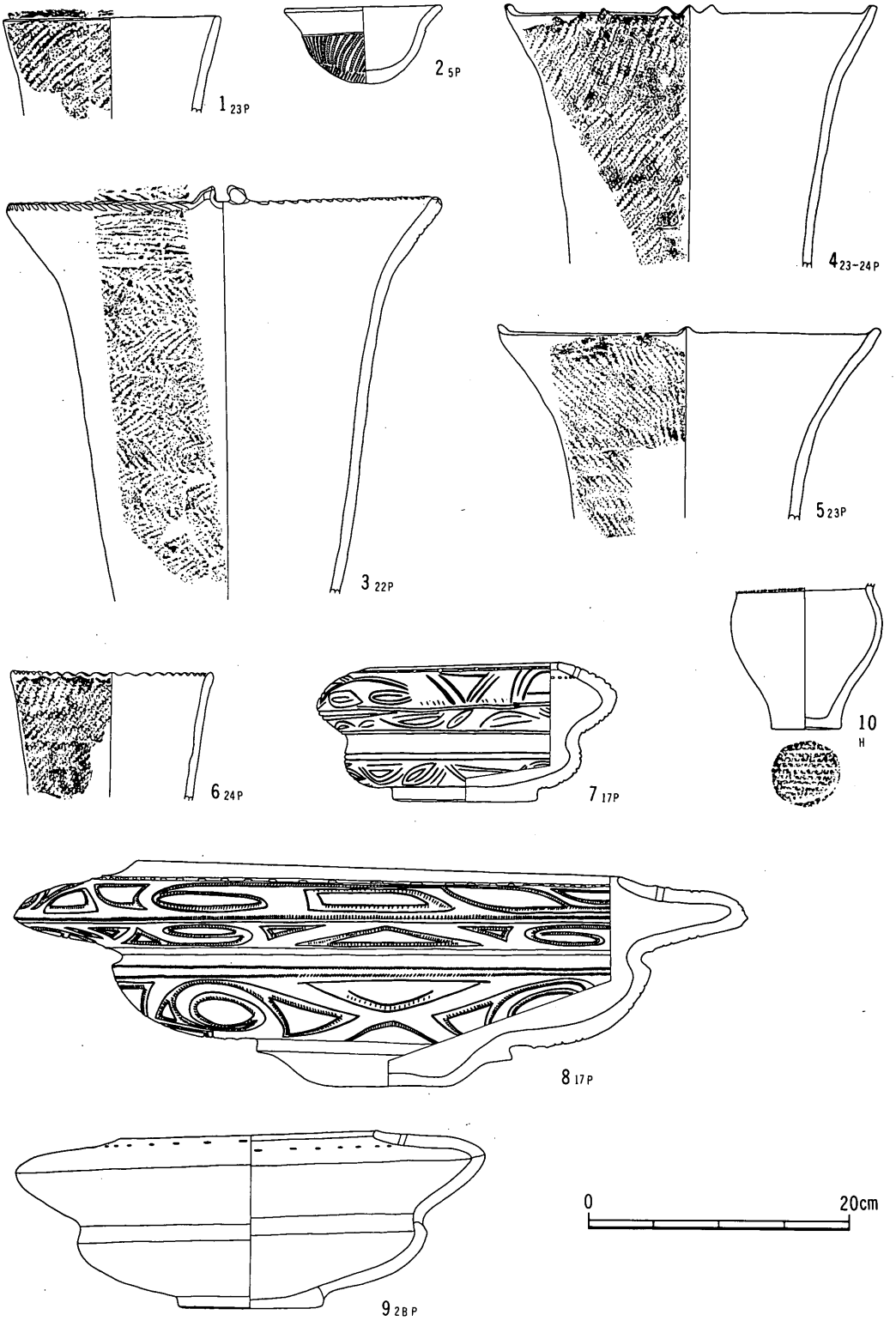
第3類　諸磯b1式土器（第14図）

本類土器は、諸磯b式のうち古い部分に属するものを一括した。完全な2分割は、まだ資料が少ないためにできない。特に、縄文のみの土器の場合、分離がほとんど不可能であるため、一応、全部本類に含めた。

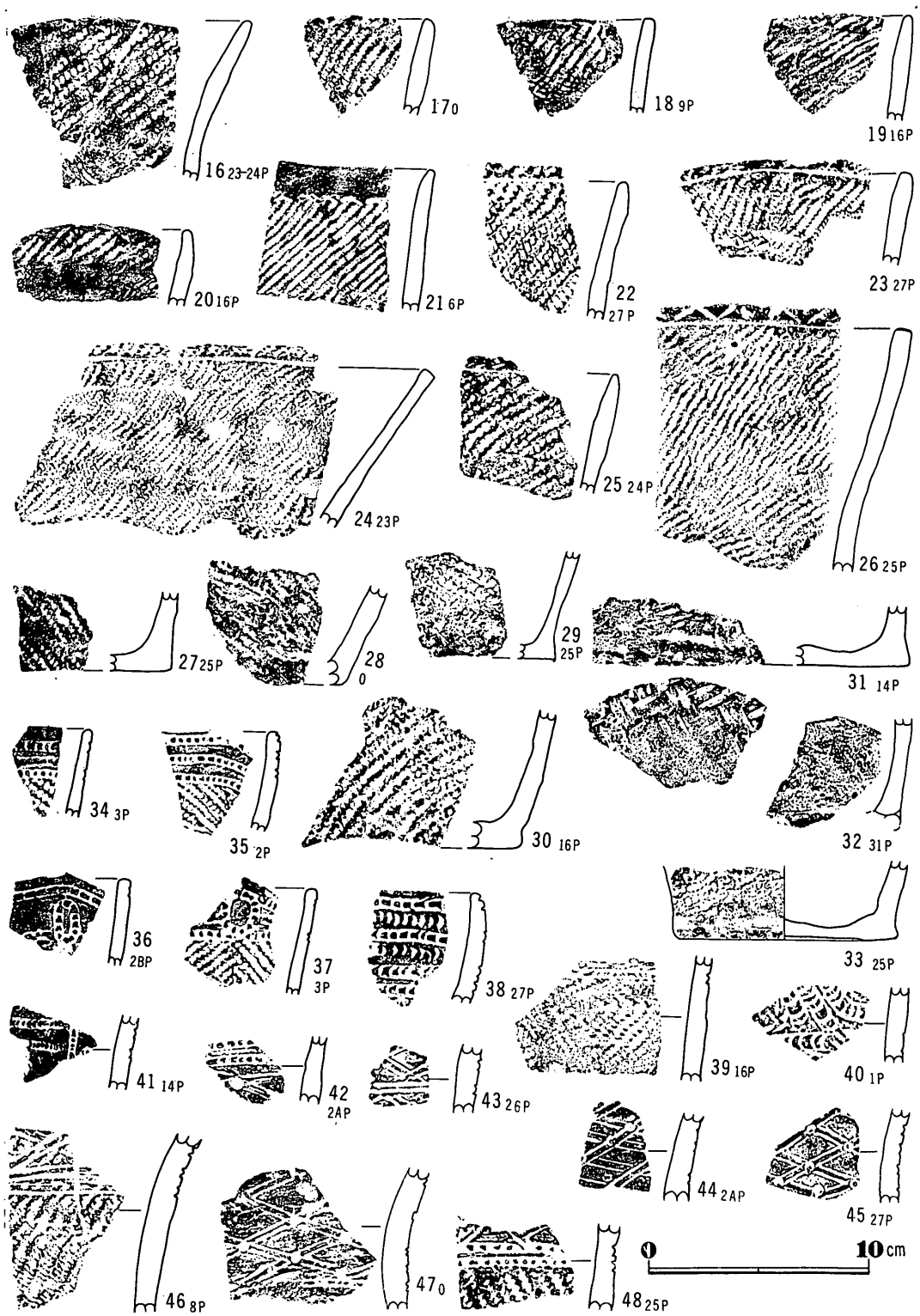
縄文（49～55）　器形は、比較的大きい深鉢形である。第12図4・5は、朝顔形の大きな深鉢である。口縁部は、平縁のもの（49・50）、部分的に小波状を呈するもの（第12図4・5）、全体的に小波状があるもの（51・52第12図6）がある。底部は平底で、張り出し底のもの（55）もある。縄文は、羽状縄文になるもの（49～51、53～55）と単なる斜縄文のもの（52、第12図4～6）がある。

爪形文（56・57）　図示した2片共、青みがかった異質な胎土で、きわめてもろい。器形は、深鉢形である。57は、口縁部に粘土粒を不規則に貼付している。文様は、地文に羽状縄文を施文し、その上に不規則に爪形文をめぐらせている。

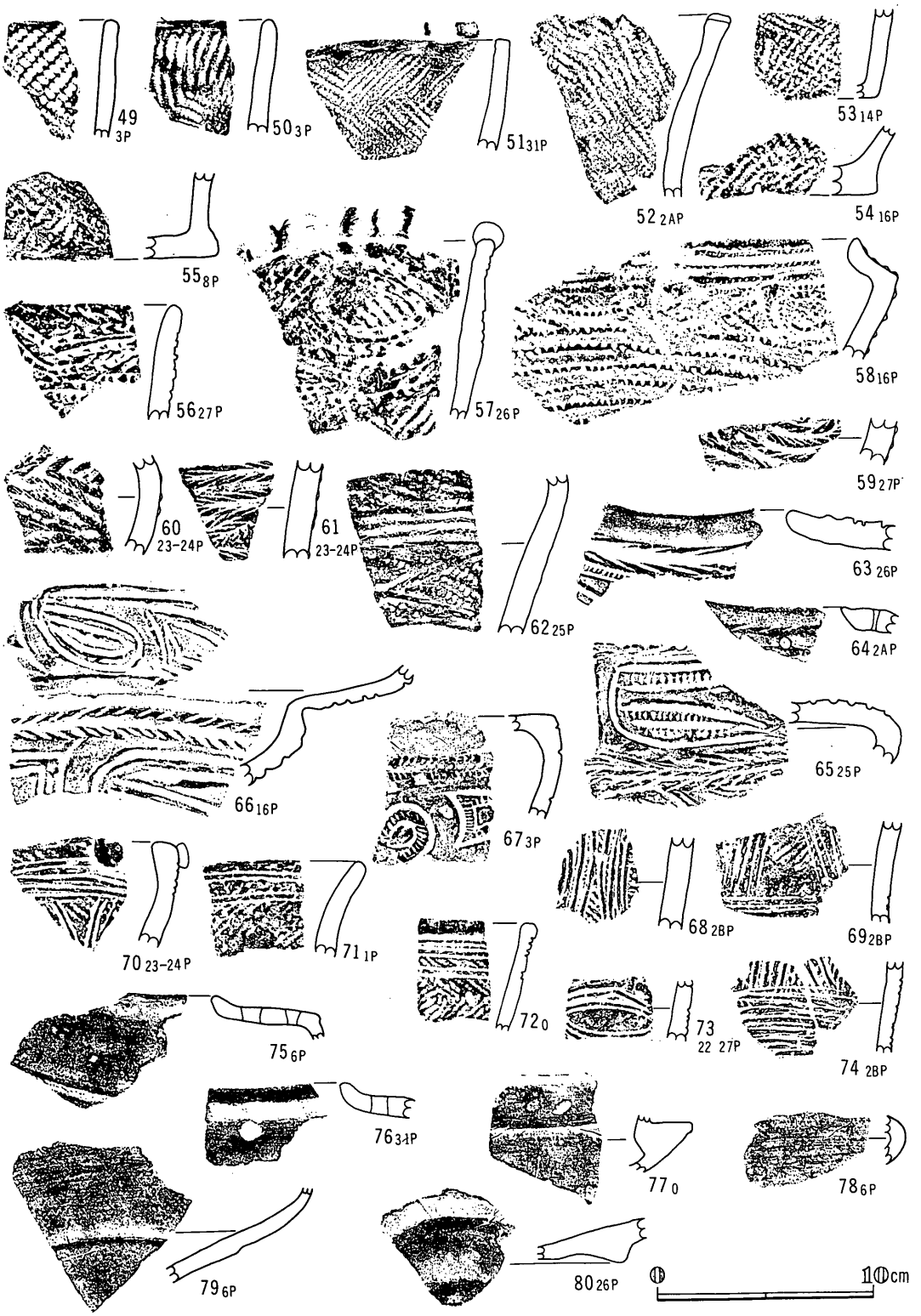
浮線文（58～62）　本種土器は、いずれもキャリパー形の深鉢である。58は、口縁部である。胎土・焼成ともに悪く非常にもろい。地文には縄文を施文し、その上に粘土紐を貼付して、爪形文を施している。59～62は、同じ手法であるが、爪形文の代りにヘラで刻目を施している。



第12図　土鉱内出土土器 (3)(1:5)



第13図　土拡内出土土器(4)(1:3)



第14図　土拡内出土土器(5)(1:3)

篦切文（63～67）　第12図７・８によって代表される本種土器は、浅鉢である。いずれも胴部で一度くびれて、胴部が２度張る器形で、キャリパー形の器形のものを上から押しつぶしたような形である。そして、必ず口縁部にいくつかの孔が開けられている。文様は、前段階の諸磯ａ式の木葉文が変化し、発達したもので、文様を描く原体は、ほとんど篦状工具、あるいは細い棒状工具である。第12図７は、高さ10.5cm、直径はもっとも広いところで23cmである。胎土・焼成とも、きわめて良好、堅致である。文様は、篦状工具で幾何学的に描いているが、規則性はない。本土器のみ一部に平行沈線文が使われている。第12図８は、きわめて大きな土器で、高さ16.6cm、直径は最大で56.3cmを計る。胎土・焼成とも良好で、非常にていねいに整形されている。文様は、４単位で、ほぼ同じ文様を４回繰り返して、一周している。

第４類　諸磯ｂ2式土器（第14図、第12図９）

本類土器は、諸磯ｂ式の新しい部分である。今回、分離したのは、以下の２種であるが、前類の縄文のみの土器も多量に含まれているはずである。

平行波線文（70～74）　本種の土器は、平縁あるいは低い波状を呈する深鉢形の器形である。地文には、羽状縄文を施文し、しかる後に、口縁部に平行沈線で凸レンズ状の文様を描く。70は、粘土粒が貼付された特殊な例である。

無文（75～80）　本種は無文の浅鉢形土器である。第12図９は、本種土器の完形品である。高さ13.2cm、最大直径36.1cmである。平底の底部から強く外反しながら立ち上がり、胴部の中ほどで一度収約し、さらに大きく外反して最大径となって、次に強く内湾して口縁に至る。口縁部に孔が開けられる他は、全く文様はない。75～80もほとんど同じ器形・手法である。

第５類　諸磯ｃ式土器（第15図）

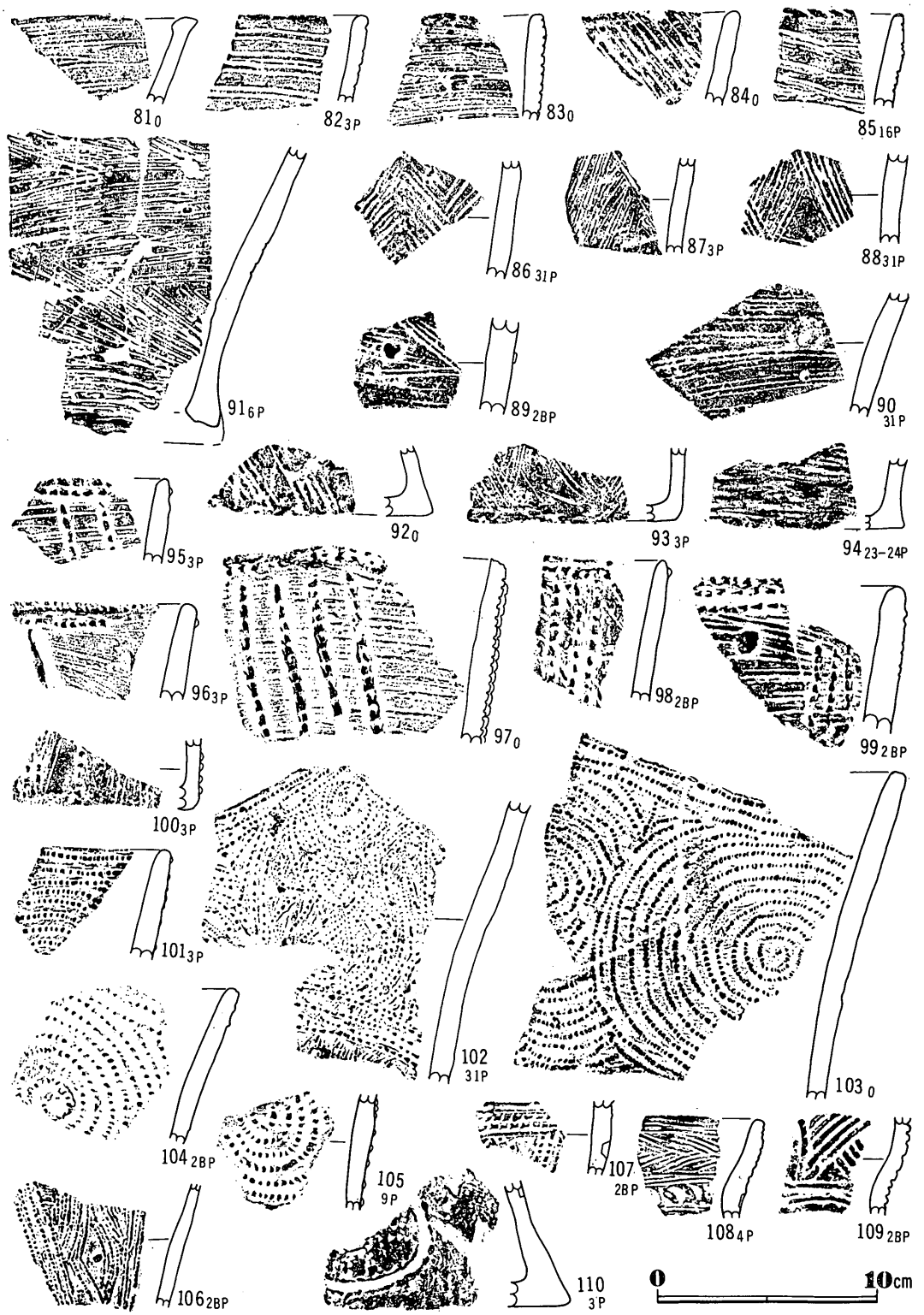
集合条線文（81～94）　器形は、平縁の深鉢形である。口縁部は、若干、外反しているが、底部付近は、内湾しながら立ち上がるもの（92）、ほぼ垂直に立ち上がるもの（93）、外反しながら立ち上がるもの（94）等がある。文様は、地文に縄文はなく、口縁部から底部まで集合条線で飾っている。89のように粘土粒が貼付されるものもある。

結節状浮線文（95～106）　本種は、いずれも深鉢形を呈するが、２分できる。95～100は、器形が平縁の深鉢である。文様は、地文に集合条線を施し、その上に直線的な粘土紐を貼付して結節状浮線文としている。101～105は、波状口縁の深鉢である。地文は、集合条線であるが、結節状浮線文は渦巻状になるものが多く、102のように、きわめて複雑になるものもある。

第６類　前期末の土器（第15図）

三角形印刻文（107・110）　107は、篦切浮線の中心を三角形で印刻している。110は、底部である。内湾しながら立ち上がっている。くずれ爪形文を全面に施文し、２ヶ所に三角形印刻文を配している。

集合条線文（108・109）　頸部がくびれ、きわめて中期に近い器形である。108の爪形文は、ほとんどくずれている。



第15図　土拡内出土土器(6)(1:3)

第３群　縄文後期の土器（第16図）

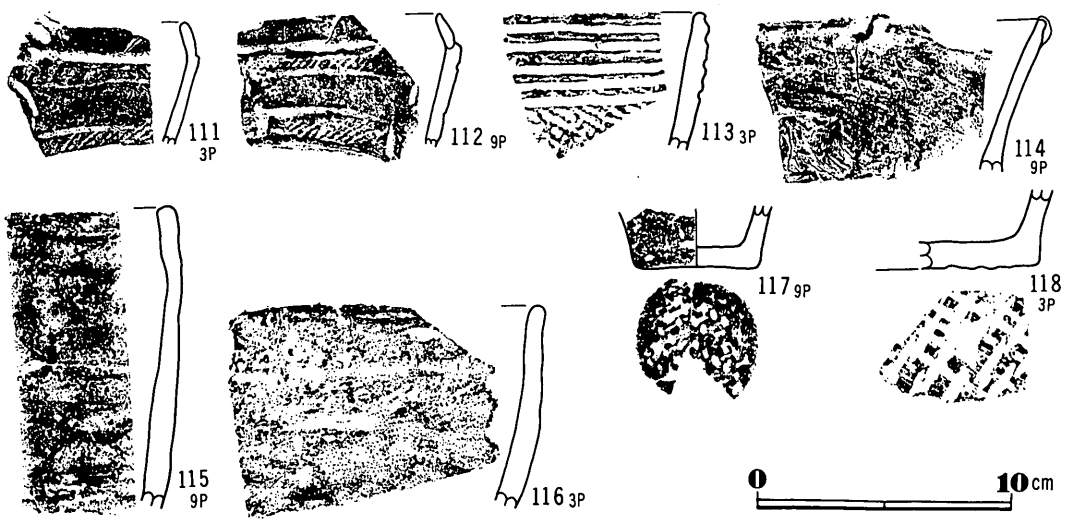
本群土器は、全て加曾利Ｂ式に併行する一群である。出土量は少なく、ほとんどが第３号土坑と第９号土坑から出土した。

磨消縄文（111～113）　いずれも精製土器である。111・112は、低い波状口縁を呈する小型の鉢である。器壁は、きわめて薄く４～６㎜、胎土・焼成はきわめて良好でよく整形されている。文様は、沈線とその区画内に細かな縄文を施文している。113は、平縁の深鉢形土器である。文様は、胴部以下は縄文で、口縁部は５条の沈線を水平に施文している。

無文（114～116）　114は、精製土器である。器形は、平縁の小型深鉢で、胎土・焼成ともきわめて良好、内外面とも良く研磨されており、黒色を呈する。口唇部には、１ヶ所に隆帯が貼付されている。115・116は、粗製土器である。いずれも比較的大きな平縁の深鉢形である。胎土には、砂を多く含み、きわめてもろい。整形は荒い。

その他（117・118）　117・118は、網代底である。いずれも精製土器である。

（金井正三）



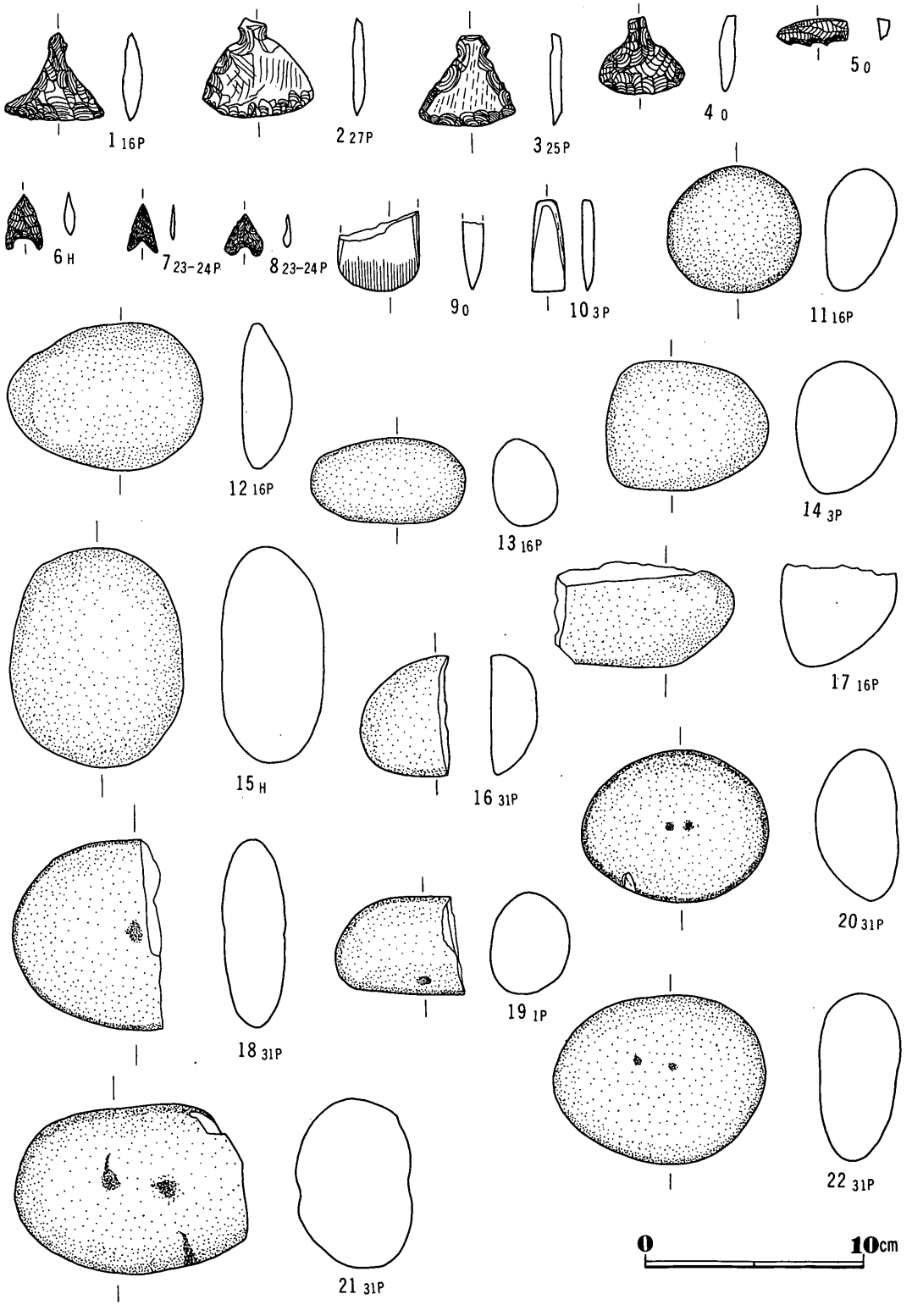
第16図　土拡内出土土器(7)(1：3)

石器（第17図）

石器の出土量は少なく、図示した21点のみである。

石匙（１～４）　いずれも三角形を基調とした横長石匙である。撮みは、中央（１・２）か、若干、左あるいは右に片寄っている（３・４）。１・４は、細かく調整されているが、２・３は、荒い仕上げである。石質は、１～３が粘板岩、４は、チャートである。

石鏃（７・８）　２点のみである。いずれも無茎である。７は、黒耀石製である。全体に非常に細かな調整が加えられ、整った形をしている。また、きわめて薄く仕上げられており、もっとも厚い部分で、２㎜である。８は、チャート製である。石質が良くないせいか、きわめて荒い調整である。



第17図　土拡内出土土器(1：3)

磨製石器（9・10）　9は、基部が欠損した刃部の破片である。最大巾3.8cm、最大厚9㎜である。先端部は、非常に磨滅しており、使用痕がきわめて明確に残っている。10は、長さ4.2cm、最大巾1.6cmの完形品である。

磨石（11～14・16・17）　いずれも全体的によく磨かれている。12は、最大径9.1cmである。

凹石（18～22）　ほぼ完形の20～22は、両面の中ほどに2つづつ凹がある。18は、半欠品なので凹は1つであるが、2つづつあったものと思われる。19を除いた他は楕円形である。

その他（5）　小形の黒耀石製品である。全体的には荒い調整であるが、刃部は鋸歯状に細かい細工をしている。植刃のような鋸であろうか。（金井正三）

3　遺構外出土遺物（第18図、第17図6・15）

今次の発掘調査で、1号住居及び土坑以外のところから出土したものを一括した。分類は、前節の分類表に従った。

第2群　縄文前期の土器

第1類　関山式土器

ループ文（1・2）　いずれも繊維を含んでいる。深鉢の胴部である。ループ文は、異方向の原体を交互に施文する羽状である。

組紐文（4）　深鉢の口縁部である。胎土焼成ともに良好、繊維を含有している。

縄の束（3）　繊維は含有していない。縄文は、1段の紐を4本束ねて、一方を他の繊維でゆわえた縄の束を回転押捺した文様である。

第2類　諸磯a式土器

縄文（5～8）　いずれも平縁の深鉢である。繊維は含有しない。5・6・8は、単節斜縄文、7は無節斜縄文である。8は口唇部にも縄文を施している。

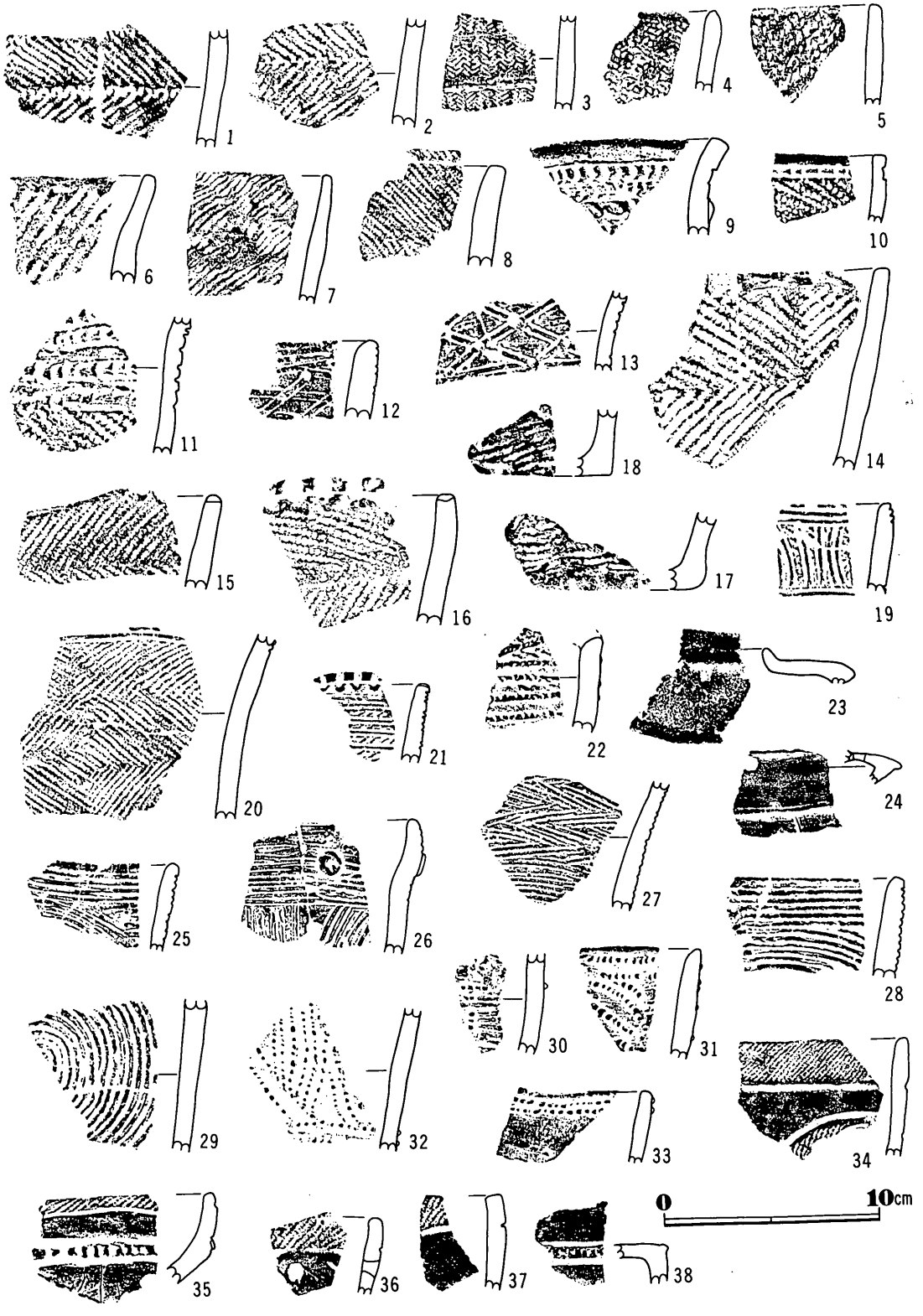
爪形文（9～11）　9・11は深鉢形であるが、10は浅鉢になるものと思われる。いずれも口縁部と平行に横走する単純な文様構成である。胴部以下は縄文である。

格子目文（12・13）　器形は朝顔形の深鉢である。本種土器の文様は、ふつう文様帯の上下に2条づつ爪先文帯をめぐらすのであるが、12には爪形文帯はない。13は不明である。

第3類　諸磯b1式土器

縄文（14～18）　器形は全て深鉢形であるが、口縁部は平縁のもの(14)、低い波状を呈するもの(15)、及び鋸歯状を呈するもの（16）がある。底部はほぼ垂直か、若干、外反しながら立ち上がる。縄文は羽状縄文のものもある。

浮線文（22）　キャリパー形の深鉢である。縄文地に粘土紐を貼付して、その粘土紐上に爪形文を押捺している。



第18図　遺構外出土土器(1：3)

第4類　諸磯b2式土器

平行沈線文（19～21）　19・21は同一個体である。口縁部が強く外反する平縁の深鉢形である。文様は器全面に羽状縄文を施文し、加えて、口縁部には平行沈線で凸レンズ状文を描いている。

無文（23・24）　いずれも浅鉢形土器の口縁部である。焼成・整形とも良好で、文様は全くない。

第5類　諸磯c式土器

集合条線文（25～29）　器形は平縁の深鉢形である。文様は器全面に平行沈線文を横位に、縦位に、綾杉状に、あるいは渦巻状に充慎させている。26は粘土粒が1つ貼付されている。

結節状浮線文（30～33）　多くの場合、30～32のように地文に平行沈線文を器全面に充慎させている。33は無地である。31は波状口縁である。

第3群　縄文後期の土器（34～38・第12図10）

加曾利B式土器

磨消縄文土器（34～38・第12図10）　全て精製土器である。34・35は平縁、36は波状口縁である。35・38は隆帯に刻目を付している。第12図10は、口縁部を欠く半完形の壺形土器である。大きさは現残高10.7cm、胴部最大径は11.7cmときわめて小形である。頸部が若干、残っている部分には縄文が押捺されている。胴部は全くの無文で、底部は鮮明な網代底である。（金井正三）

石器

石鏃（第17図6）　黒耀石製である。全体に細かな調整が行なわれているものの整った形となっておらず、中心が厚くなってしまっている。

磨石（第17図15）　最大径10.2cmの楕円形で、厚さは4.8cmである。凹は全くない。

（金井正三）

第V章　歴史時代の遺構と遺物

第1節　遺構

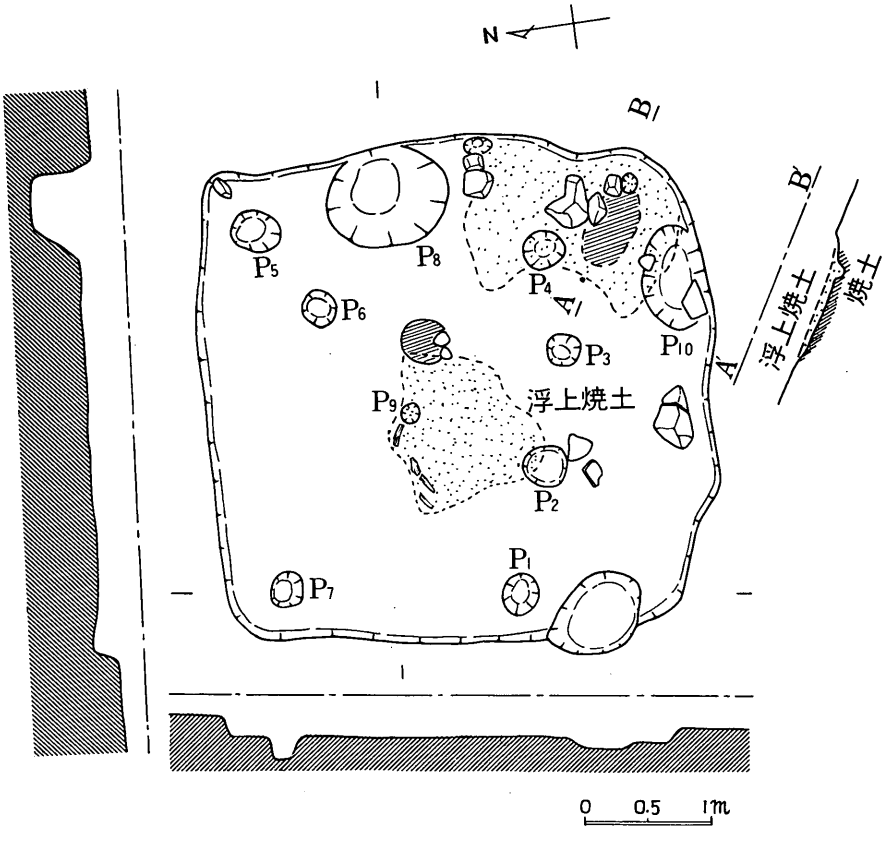
2号住居址（国分期）（第19図）

ほぼ方形プランをなす住居址であるが、南東と南西隅はカーブが緩やかである。ローム層に掘込まれた部分の壁の高さ（現存壁高）は、北壁13～15cm、東壁10～15cm、南壁9～12cm、西壁9～15cmである。地形は本地点では南傾斜しているので、南壁がやや低い状態になっている。

床面はロームそのものであり、若干の起伏があった。

住居址内のピットについては全部で九ヶ発見され、P_1～P_9の番号を与えた。大きさについては図示のとおりであり、深さはP_1－35、P_2－30、P_3－20、P_4－25、P_5－25、P_6－25、P_7－20、P_8－20、P_9－20cm、であり、P_2の底に径12cmの礫が入っていた。

住居址の南東隅では1.5×1mの範囲に、焼土の堆積と人頭大の礫がいくつかみられたが、さらに精査したところ、壁に対し斜めに南東隅に向って地山のローム層が焼けていた。また、壁ぎわには深さ8cmの小ピットが存在していた。これらのことから、この地点を石芯粘土製カマドの崩壊した跡と考



第19図　2号住居址(1：60)

えることができ、小ピットは支石の痕跡と考えた。またカマドの左右に－30cmと－20cmの穴があった。

このほか、住居址中央にも、焼土と木炭が重なりあう形で少々うず高くなって検出された。これも浮上物であり、下部よりロームの床面が検出された。つまり、この焼土と木炭は住居の破壊と共に生じた事象と考えることが出来る。

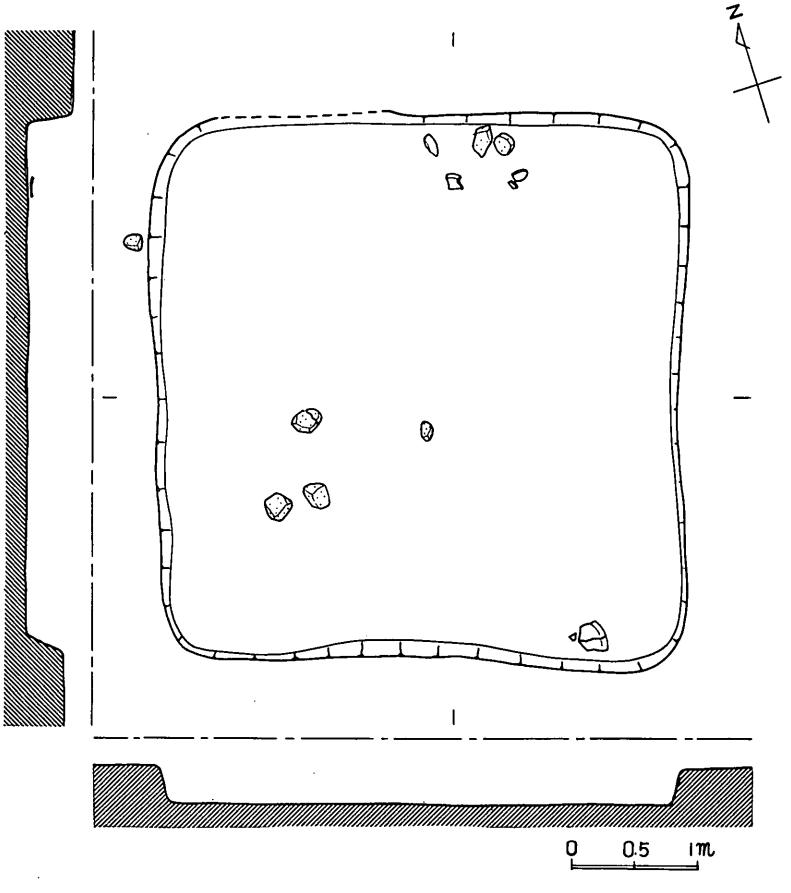
また、この焼土とは別に中央からやや北東隅よりに径35cm、深さ20cmの地床炉が発見され、ローム面が焼けていた。炉址内部には焼土と焼けた土師器の破片が認められた。

なお、全体の壁が角度が強いのに反して、南西隅の壁は、幅約60cm程がなだらかになっているので、出入口と考えたいがどうであろうか、問題点を残しておこう。

遺物については、床面直上に若干の土師器と須恵器片が認められ、カマドの焼土堆積物や、左右のピット内からも土師器片の出土があった。カマド内のものは焼けているものも見受けられた。

3号住居址（国分期）（第20図）

4.3m×4mの方形プランをなす。現存壁高は北壁40～20cm、東壁20cm、南壁20～30cm、西壁30～40cmとかなり深い。床面は比較的平坦である。柱穴は無い。



第20図　3号　住　居　址(1:60)

北側の壁、西よりに、2m×1.5mの範囲が攪乱されており、焼土が掘りかえされていた。小学生が発掘調査以前に掘ってしまったというとのことであるが、この地点がカマドの位置であった可能性がある。

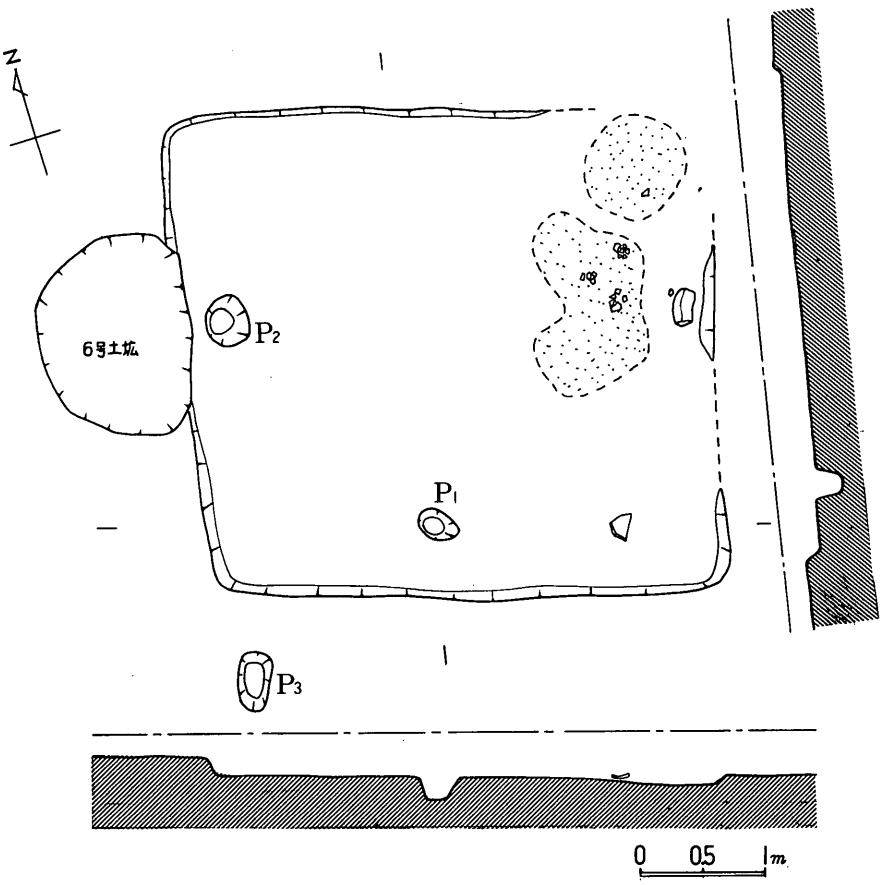
遺物は北壁中央に近く、床面上に土師器の甕と坏の破片が、また南隅に近い床面上で、土師器の口縁部破片が発見された。この他、床面上で土師器の小破片が少々見受けられた程度であった。

4号住居址（国分期）（第21図）

4.2×3.9mのほぼ方形プランをなす。ローム面での壁高は南壁15cm、西壁17cm、北壁7cmで東壁は判然としない。ロームを床面とし、柱穴は南壁に近いところ（P_1）と、西壁に近いところ（P_2）と二箇所のみである。P_1の深さは20cm、P_2は18cmである。

西壁にそって縄文時代と思われる6号土坑がくい込んできているので、その部分のみ、厚さ5cmの粘土の張床となっていた。

北東隅には図示のとおり焼土が二箇所認められ、付近には人頭大の礫もあった。但し、この焼土は浮上物であって、焼土を除いたところ、北東隅のものは深さ15cm程の浅い窪みとなり、やや南位置のものも床面が焼けていなかった。従って、カマドの確認は出来なかったが、礫などの存在により、こ



第21図　4号　住　居　址(1:60)

の付近を一応カマドの位置に想定しておこう。

遺物は南壁よりに土師器、須恵器の破片が床面上に存在し、同じく南東隅には鉄片が発見された。

（水野裕美子）

第2節　遺物

本遺跡における国分期住居跡は確実なもの三つであり、2号、3号、4号住居址が該当する。出土遺物の特徴等については煩雑を避けるため第2表にまとめたので、参照にされたい。

遺物は床面直上かそれに近い位置、崩壊したカマド遺構内、その他、住居址内のピットや炉址中から出土した。破片が主で、このような場合、住居使用中の破損物の残存、また住居廃絶後における器物の混入が考えられる訳であり、厳密には、個々の遺物に関して、ある時間幅を考えなければならない。しかし、各住居址において、床面から大きく浮上した遺物は無に近い状態であったので、考古学上の土器型式を設定する場合、一型式の時間幅を越えることはないと思われるので、ここでは大きな意味における一つのセットとして取り扱いたい。

2号住居址出土遺物の要点（第22図）

土師器甕では頸部が「くｌの字に外傾し胴部にやや張りのあるものと、同様、小形の甕の二種類がある。いずれも外面にロクロ痕が目だち、内面はナデにより調整される。

坏は内湾ぎみの、浅いものが多く、底部は目の粗い回転糸切痕（註1）のあるものと、回転篦削の再調整のあるものが多い。再調整痕が立ち上がり部分にも及ぶものが多い。再調整痕には静止篦削のものもあった。坏の内面はすべて研磨され、炭素吸着の黒色化をなすものが多い。なお小破片ではあるが、須恵器の甕破片が出ている。

3号住居址出土遺物の要点（第23図）

土師器大形の甕は、口頸が「く」の字に外傾し、やや長胴のもの。いわゆる烏帽子形になるものであろう。外面口縁から胴上部にかけて、ロクロ痕が目だち、胴下半には縦位の篦削調整痕がある。内面は特に口縁にナデが目だち、胴部に横位の刷毛目状痕の残るものがある。小形の甕は、やはり胴下半が篦削となるものがあるが、すべてそうであるか（註2）完形品がないので不明である。内面に刷毛目状痕が密に残るものもある。これら小形甕は口径に比べて器高が低く、ずんぐりした器形が通常となろう。

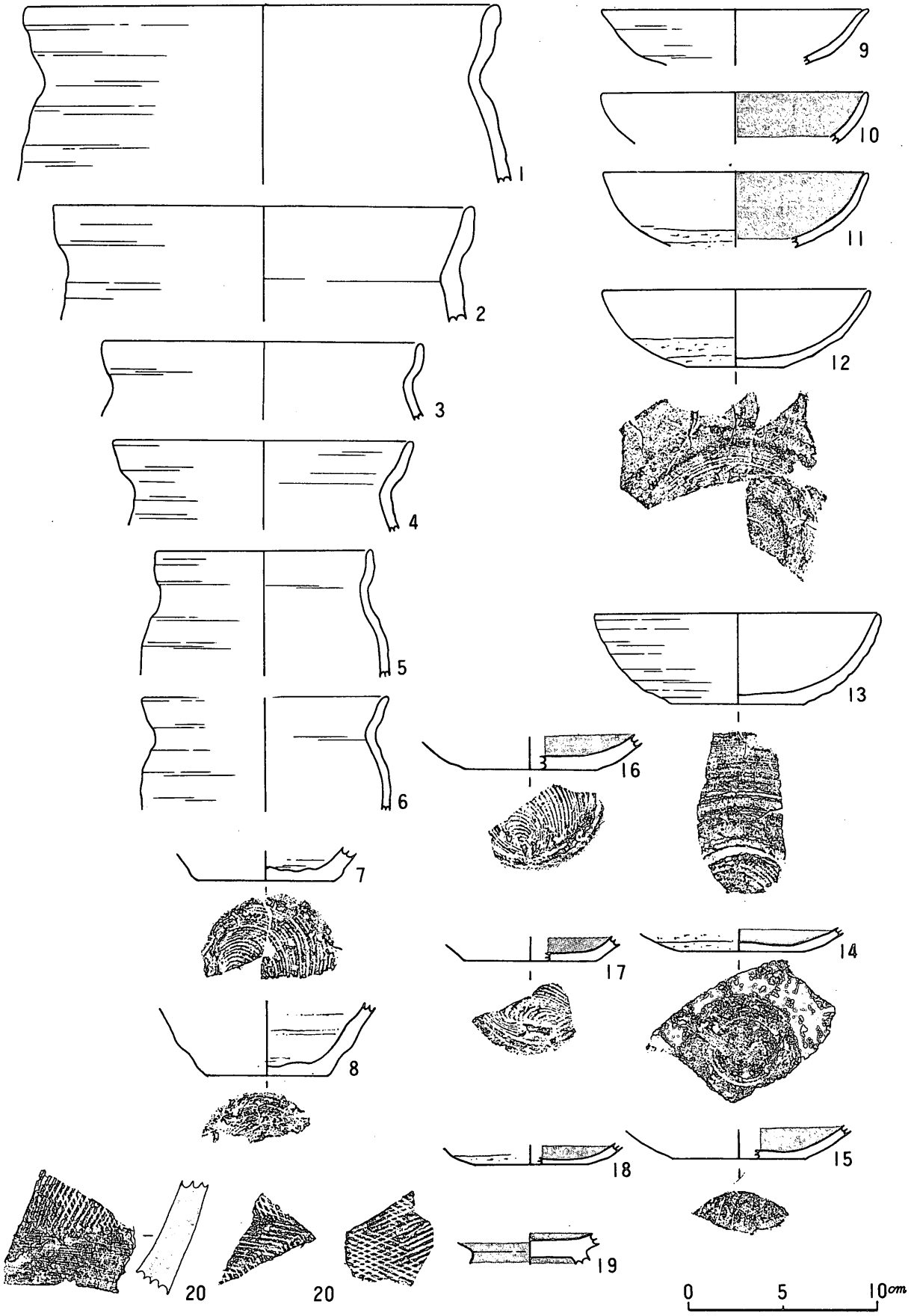
坏はすべて口縁端部が僅かに外反する。外面はロクロ痕がナデにより調整されているものが多いが、ロクロ痕が明瞭に残るものも少しある。内面はすべて研磨され、炭素が吸着し黒色をなす。底面は密な回転糸切痕を残すもの。

なお、11は墨書された土師器で「加」と読めるが、それ以外に字が存在していたかは、破片のため分らない。

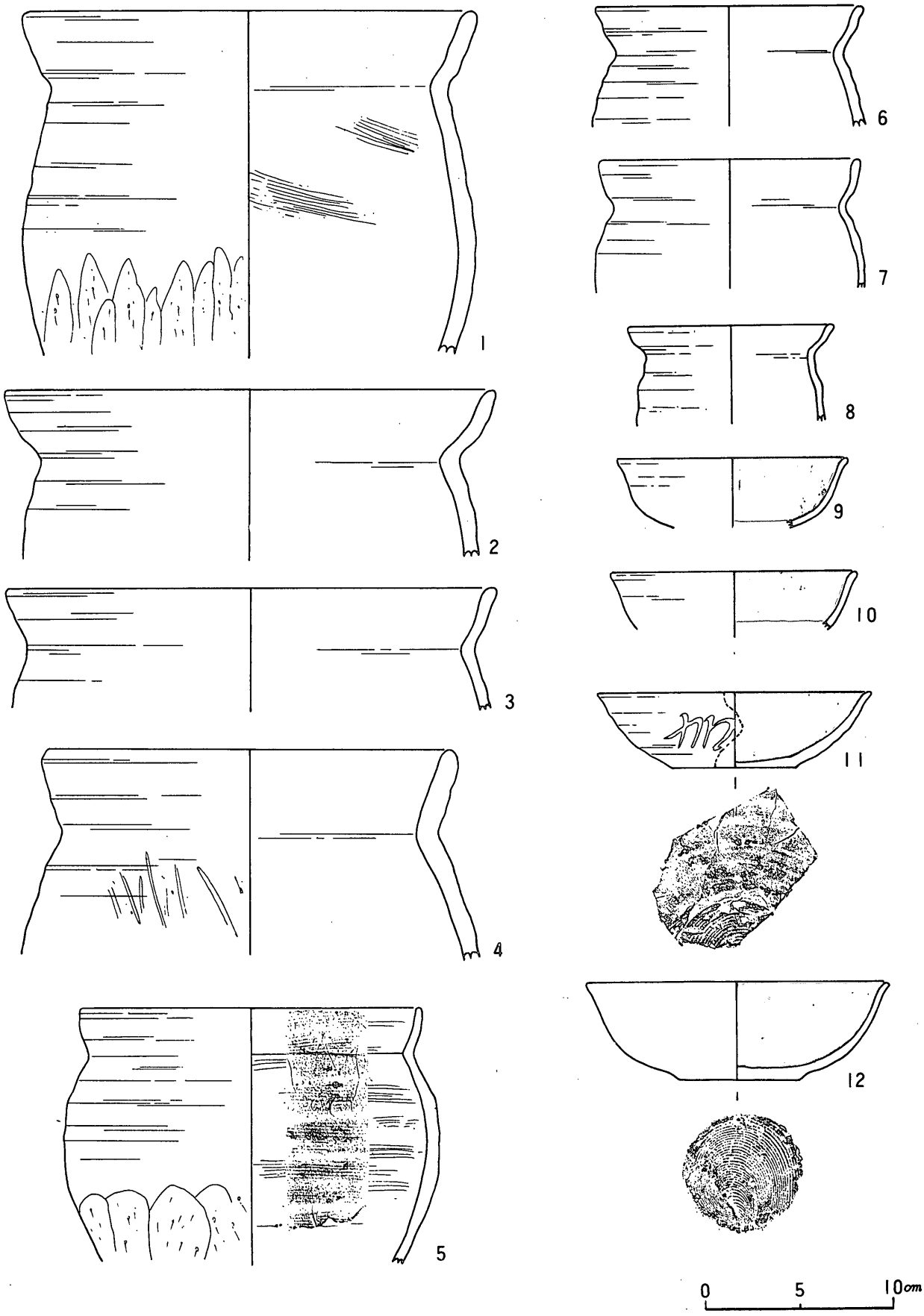
4号住居址出土遺物の要点（第24図）

大形の甕は2号、3号住居址と同じような特徴を有する。小形甕についても、多少、趣が異なるけれども、大きな意味では大差ない。

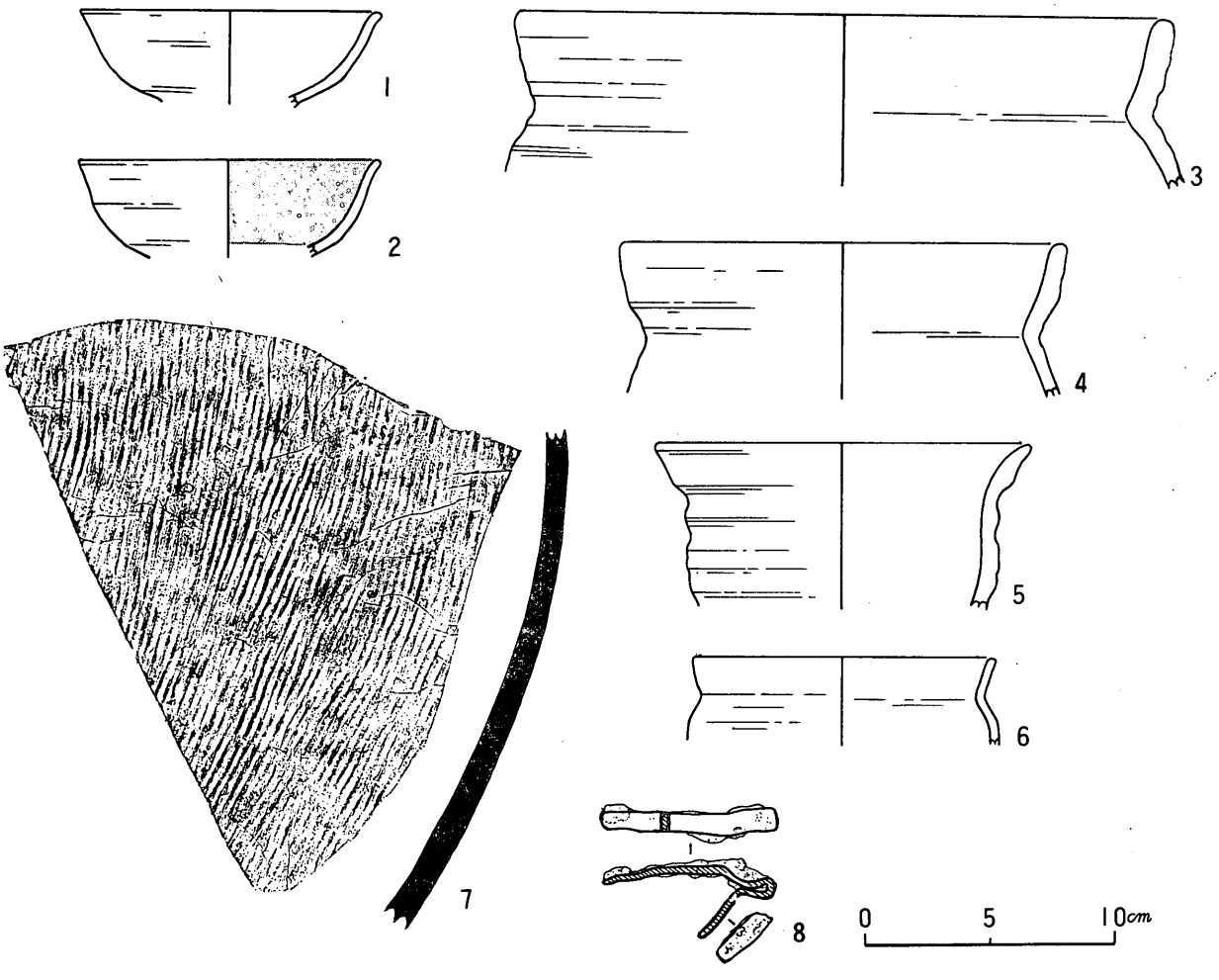
坏は口縁端部が僅かに外反するもので、内面は研磨され、黒色化されたものと、そうでないものとがあった。底面の破片が無かったので、回転糸切か再調整か判然としないけれども、口縁端部の状態



第22図　2号住居址出土遺物



第23図　3号址出土遺物



第24図　4号住居址出土遺物

からみて、3号住居址の坏に類似したものと考えられる。

須恵器の破片も一点ある。外面にタタキ目、内面は指痕のみのもの。大形の甕破片か。

なお、土器類以外の遺物として鉄製品（第24図8）があるが、用途は不明である。（松沢芳宏）

註1．本稿におけるナデは、「陶邑古窯址群Ⅰ」で田辺昭三が分類した、横ナデ、ナデの二種を包括した大きな意味でのナデであることを了解されたい。

2．刷毛目という用語は外見のみのもので、実際、刷毛状工具を用いたものか、あるいは薄い柾目板の端を用いたものか不明である。

第2表　2号住居址出土遺物（数字単位はcm）

番号	器形	口径（底径）	高さ	器形の特徴	手法の特徴	胎土、焼成	出土地点その他
1	甕	25		口唇部玉状 頸部「く」の字に外傾、胴部やや張る	外面ロクロ成形痕、 内面はナデ	黄褐色 焼成良好 砂粒含	炉址中 土師器
2	甕	22.5		頸部やや直立ぎみに「く」の字外反、胴部は長胴ぎみに	外面ロクロ 内面ナデ	砂粒なし、 胎土ち密、 黄褐色焼成良好	カマド 土師器
3	甕	17		頸部「く」の字、口縁付近袋状	内外面ナデ	砂粒少量、 黄褐色、焼成良	床面
4	甕	16		頸部「く」の字外反、口縁付近やや袋状	外面ロクロ痕、 内面ナデ	胎土ち密、 黄褐色、 焼成良好	カマド 土師器
5	甕	11.5		頸部「く」の字外反、口縁は袋状、胴部はやや張る	外面ロクロ痕少し、 内面ナデ	砂粒やや含む、 黄褐色、焼成良好	カマドわきの床直上、 土師器
6	甕	13		頸部「く」の字外反、口縁はやや袋状、胴部はやや張る	外面ロクロ痕がつくがナデぎみ、 内面口縁付近ナデ	砂粒少量、 黄褐色、 焼成良	炉址中と床上のを接合、 土師器
7	甕	(7.2)			内面ロクロ痕、 底部回転糸切	砂粒少量、黄褐色、焼成不良	カマドわきの床直上、土師器
8	甕	(7.5)			内面ロクロ痕 底部回転糸切	同上	床面
9	坏	14.5		浅い坏、 口縁端少し開く	外面ややロクロ痕 内面研磨のみ	胎土ち密 黄褐色 焼成良好	カマドわきのpit、No.10 土師器
10	坏	14.5		浅い坏、 口縁内湾ぎみ	外面ナデ 内面研磨黒色	同上	同上
11	坏	14.5		浅い坏、 口縁直斜状	外面ナデ 底部付近外面は回転ヘラ削、 内面研磨黒色	胎土ち密 やや砂粒含 黄褐色 焼成良好	床面 土師器

2 号 住 居 址 出 土 遺 物 （数字単位はcm）

12	坏	14.5 (5.0)	4.0	浅い坏 半球状に開く	外面ナデ 底部と底部付近外面、 回転ヘラ削、 内面研磨のみ	胎土粗、 砂粒多し、 黄褐色、 焼成良好	カマドわき床直上と炉址中、その他、床上のものを接合、土師器
13	坏	15.2 (7.0)	4.8	埦状、半球状に開く	外面ロクロ痕 内面研磨のみ 底部回転糸切	胎土ち密 茶褐色 焼成良好	カマドわき pit №10 土師器
14	坏	(6.5)			底部回転ヘラ削、 底部付近外面はヘラ削、 あるいはゆるい回転ヘラ削、内面研磨、黒色化は一部のみ。	砂粒多い 黄褐色 焼成良好	カマドわき pit №10 土師器
15	坏	(7.0)			底部静止ヘラ削、 内面研磨黒色	砂粒少量 黄褐色 焼成良好	土師器 床面
16	坏	(7.0)			底部回転糸切、 内面研磨一部黒色化	同上	南壁付近床直上 土師器、
17	坏	(7.0)			底部回転糸切、 内面研磨黒色	砂粒多い、 黄褐色、 焼成良好	カマド付近床直上、土師器
18	坏	(6.0)			底部及び底部付近の外面に回転ヘラ削、 内面黒色研磨	同上	カマド付近床直上 土師器
19	坏	(6.0)		高台付きの坏	内外面黒色、 内面研磨	胎土ち密 焼成良好	カマド付近の貯蔵穴状ピット、 №8、土師器
20	?				外面タタキ目	胎土ち密 青灰色 焼成良好	カマド付近床直上、 須恵器

3 号 住 居 址 出 土 遺 物（数字単位はcm）

番号	器形	口径（底径）	高さ	器形の特徴	手法の特徴	胎土、焼成	出土地点その他
1	甕	24.5		頸部「く」の字に折れ、外面少し段あり、胴部長胴ぎみ。	外面ロクロ痕、胴部以下ヘラ削、内面口縁ナデ、頸部以下刷毛目状の刷痕部分的に残る。	砂粒多い、黄褐色、焼成良好	床面、土師器
2	甕	26		頸部「く」の字に折れ、口縁やや袋状	外面ロクロ痕内面口縁付近ナデ	同上	同上
3	甕	26		頸部「く」の字に折れ、口縁やや開く。	同上	同上	同上
4	甕	22		頸部「く」の字に折れる。胴部少し張る	同上	砂粒少量黄褐色、焼成良	東壁に近い床面土師器
5	甕	18		頸部「く」の字に折れ、口縁やや袋状、胴部球状、ずんぐりした形。	外面ロクロ痕、下胴部ヘラ削、内面横走する刷毛目状の痕	同上	床面土師器
6	甕	14.5		頸部「く」の字に折れる。胴部やや張る	外面ロクロ痕	同上	同上
7	甕	14.0		頸部「く」の字に折れ、外面やや段あり、胴部やや張る	外面ロクロ痕とナデ、内面ナデ、	砂粒多い暗褐色焼成良好	口縁内面スス付着あり、床面土師器
8	甕	11.0		頸部「く」の字、口縁外傾、胴部長胴ぎみ	外面ロクロ痕内面、口縁付近ナデ、	砂粒少量黒褐色焼成良好	外面頸部付近スス付着、床面、土師器
9	坏	12.0		口縁端、僅かに外反、以下椀状	外面ロクロ痕僅かに残り、あとはナデ、内面研磨黒色、	砂粒少量黄褐色焼成良好	床面、土師器
10	坏	13.0		同上	同上	胎土ち密黄褐色、焼成良	同上
11	坏	14.5 (6.5)	4.0	同上	外面ロクロ痕明瞭内面研磨黒色（薄黒）底部回転糸切	胎土ち密赤褐色焼成良好	墨書あり「加」と見るか？床面、土師器
12	坏	16.0 (6.5)	5.3	同上	外面ロクロ痕少しとナデ、底部回転糸切内面研磨黒色	胎土ち密黄褐色焼成良好	東壁近くの床面土師器

4 号住居址出土遺物（数字単位はcm）

番号	器形	口径（底径）	高さ	器形の特徴	手法の特徴	胎土、焼成	出土地点その他
1	坏	12.0 (5.0)?		口縁端部僅かに外反以下宛状	外面ロクロ痕少々とナデ、 内面研磨、但、赤褐色で炭素吸着黒色化なし	砂粒少量 黄褐色 焼成良好	床面 土師器
2	坏	12.0		同上	外面ロクロ痕少々とナデ、 内面研磨黒色	同上	同上
3	甕	26.5		頸部「く」の字、口縁やや立上りぎみ、肩がやや張る。	外面ロクロ痕 内面ナデ	胎土粗 砂粒少量 黄褐色、焼成良	同上
4	甕	18.0		頸部「く」の字、口縁やや立つ。	外面ロクロ痕少し 内面ナデ	砂粒少量 胎土ち密 黄褐色、焼成良	同上
5	甕 (鉢)?	15.0		甕か鉢か判然とせず、口縁外反、 胴部の張りは少ない。	外面ロクロ痕明瞭 内面ナデ	同上	同上
6	甕 (鉢)?	12.0		頸部「く」の字に折れ、口縁直斜状に開く。胴部は張る。 口唇部、平担。	外面ロクロ痕少し、	同上	同上
7	甕 ?				外面平行線状のタタキ目、 内面、指によるナデ、	青灰色 胎土ち密 砂粒少量 焼成良	床面 須恵器
8	鉄器						用途不明、 床面直上、

第Ⅵ章　考　察

第１節　縄文時代の遺構と遺物について

土坑について

本遺跡では31基にのぼる土坑を検出した。出土遺物からそのうちわけは縄文早期子母口式期１基、前期諸磯ａ式期１基、同諸磯ｂ式期12基、同諸磯ｃ式期５基、後期加曽利Ｂ式期１基、不明11基である。これらの土坑は当舌状台地内における立地、出土遺物等にいくつかの特色を有している。

第１に、当舌状台地に認められる住居址は全て土坑とは時期的に異なり、住居址を除くと当舌状台地は土坑群により占有されている。

第２に、土坑検出地点は舌状台地中央頂部から北縁部にかけて東西に長く散在するブロック（Ａブロック）と、舌状台地南縁の比較的小範囲な地点にまとまる群（Ｂブロック）とがある。

第３に、土坑の時期に関しては、不明なものを除いて９号及び12号土坑の他は全て前期後半に時間的位置を置き、特に諸磯ｂ式期が主体をなす。

第４に、特に諸磯ｂ式期に限定していえば、２号、17号土坑に代表される特定器積の出土が目立ち、29号土坑のように人骨が検出されている例もある。

以上、当選跡における土坑の特色を掲げてみたが、９号は後期、12号は早期の土坑であり、それぞれが該期においては単独で存在するため、その土坑のもつ性格については不明な点が多く、資料提供という形で割愛させていただき、ここでは前期、特にその主体をなす諸磯ｂ式期の土坑の性格について他の遺跡の資料をあげながら考究していきたい。

長野県内における縄文前期の土坑群は先学諸氏の報告例からいくつか見い出すことができる。

大町市上原遺跡は立石配石址（環状石籬）のあることで著名であるが、発掘区域内で住居址は検出されず、立石配石址の周辺地域から集石址（石組）と土坑が確認されている。報告書中、故大場磐雄博士は立石配石址を信仰関係の遺構と想定し、石組及び土坑についてはそれに関連するものと考えられている。さらに立石配石址の位置を遺跡全体における集落の端に存在する共同祭祀場と推測し、この特殊な遺構が遺跡内における１つの領域を保有している可能性を指摘している。

東筑摩郡唐沢遺跡では７号土坑のような集石址が１ヶ所確認され。『火所』と想定している。

北安曇郡有明山社遺跡は諸磯ｂ式期から同ｃ式期にかけて主体を占めるピット44基、集石８基が確認され、ピット中には滑石製品の完製品、未製品、骨片等も出土している。また発掘区域には住居址が一基確認されているが、黒浜期であり、土坑と同時期の住居址は認められない。したがって、土坑群としての領域に当たるものと推定される。さらに、Ｅトレンチより完形の浅鉢形土器（諸磯ｂ式）を検出しているが、黒色土中より出土しているので何らかの遺構に伴うものかどうかは不明である。ただ写真で見る限りでは凹みの底（土坑）に存するようにもとれる。

埼玉県浦和市大谷場貝塚では、集落址より20から30m隔てた台地縁辺部付近の報文中で「広場」と想定している地点の土坑内より近接して、大小２個体の浅鉢形土器が出土している。この２個体の浅鉢形土器が出土している。この２個体の浅鉢形土器の出土状況は当遺跡17号土坑と共通している。

東京都町田市本町田遺跡では数地点に分かれる複合的な遺跡立地を示すが、そのうち、縄文前期諸磯b式期の集落址がA地点で確認され、その地点よりかなり離れたC・D地点において同時期の竪穴状遺構と土坑群が検出されている。A地点とC・D地点との距離は相当あるが、同一型式内におさまる点で同時存在の可能性がかなり強い。この竪穴状遺構の近くからは土器と共に副葬品と思われる石製垂飾が出土し、また土坑形態により埋葬に関連する土坑と報告している。

千葉県船橋市飯山満東遺跡では、集落の西端である台地縁辺部の一画（約300m²）に黒浜期から諸磯b式期にわたる200余のピットが確認され、浅鉢形土器の完形品や深鉢形土器の胴下半部、玉類等が多数出土している。清藤氏はこの報文中において該出土坑、特に諸磯b式期のそれは発掘区域内での同期の集落が認められていないことも含めて宗教的遺構としての性格を有する土坑群と想定し得る可能性を示唆している。その後、同氏は『何らかの祭祀遺構、あるいは規模から考慮して幼児埋葬などの特殊な性格を有していたと思われる。』と述べ、さらに国分谷周辺地域を中心として集落の成立と展開の構成について論究する中で、1つの集落構成における墓域としての領域を保有しているものと推測し、浅鉢形土器を幼児骨用器としている。

以上、類例遺跡を考慮しながら当丸山遺跡にもどり論述していこう。

9号及び12号土坑については縄文後期、早期の単独の遺跡であるため、遺跡全体からみた土坑の性格については認識し難く不明であると言わざるを得ないが、前期、特に諸磯b式期の土坑群については他のいくつかの遺跡例と比較してその性格を想定できよう。先述したように当遺跡（発掘調査区域である舌状台地部分）には該期の集落は存在せず、土坑及び集石土坑による一時期の舞台であり、それらの遺構のみによる領域を確立していることがわかる。立地面では見晴らしの良い地点にあることも土坑群のあり方と無関係ではあるまい。ただ、台地先端部にあるいくつかの土坑の中には陥し穴的性格、機能を有するものも存在したと考えられないこともないが、2号、17号土坑のように浅鉢形土器という特定器種の完形品が出土することを無視することはできまい。浅鉢形土器が他のいくつかの遺跡において当遺跡のような状況で認められていることは前述したところであるが、一方、住居址内からもその出土を見ることがある。飯山盆地の大倉崎遺跡では2軒の住居址が検出されたが、1号住居址から完形品こそないが多くの深鉢形土器に混って十数個体分の浅鉢形土器が出土しているし、また本町田遺跡J4号住居址覆土内においても浅鉢形土器が1個体、深鉢形土器数点とセットをなして出土している。このような浅鉢形土器は一住居址において認められる生活用具としての一形態であるといいうる。ただ、他のいくつかの遺跡例から特殊な状況下においては、日常生活具からその機能を転化した浅鉢形土器の存在が想定できる。2号土坑の場合、浅鉢形土器は口縁部の前方の河原石があたかも蓋をしたかのごとく横たわっており、何か入っていたことを思わせた。また17号土坑のように2個体の豪華に加飾された浅鉢形土器のうち、大形のそれは土坑の壁に接した部分があたかも折れているかのごとき状況を示していることは、たとえば土坑が長方形で人体が脚を伸ばして調度納まる大きさであることも考慮して、埋没当時浅鉢形土器の下に何らかの有機物があり、それが腐敗することにより土圧により割れたものと考えられる。さらに7号集石が焼けて炭化材が残存していることから儀礼に関連した火所と考えることはできないか。2号、17号土坑とは土坑形態の違いこそあれ29号土坑のように浅鉢形土器が出土する土坑において確実に人骨片を伴う例がある。このことから2号、17号、

27号を始めとして他のいくつかの土坑に関しても土坑墓としての機能を保持したものがかなり存在していたものと思われ、当遺跡は埋葬に関連する土坑による墓域としての領域が、近接するであろう集落領域と対をなして存在していたものと考える。

このような稀少な例をとり上げて、浅鉢形土器を埋葬に関連する納骨品、あるいは副葬品と考えることは飛躍し過ぎの感も強いが、十分その可能性を指摘できるところである。

今だこのような遺跡例も少ない上、はなはだ浅学にして暴言を述べてきたきらいはあるが、土坑群の一資料として提示し、今後同様な遺跡の発見を期待したい。(太田文雄)

参考引用文献

「飯山満東遺跡」房総考古資料刊行会。1975

「上原」長野県教育委員会

「本町田遺跡群」

「有明山社」

「研究紀要２」千葉県文化財センター、1975。

「考古学ジャーナル」№127、1976。

「唐沢、洞」長野県考古学会、1971。

「大倉崎遺跡、発掘調査報告」高橋、金井、中島、信濃28―４、S51。

「大谷場貝塚」浦和市郷土文化会、S51。

「浦和市史」

縄文早期の土器について

本土器は、絡条体圧痕文が大きなメルクマークとなっている事は前述したとうりであり、子母口式に比定されるものであろう。絡条体圧痕文は、従来から子母口式土器の一つの指標として捉えられてきた〔山内、1941〕。しかしながら子母口式土器については、まとまった資料が少なく、その分析もあまり行なわれておらず、子母口式土器の型式内容は不明な点が多い。数少い論考としては、多摩ニュータウン№269遺跡出土遺物の分析を行い子母口式土器の様式構造を分析した安孫子氏のものが挙げられるよう（安孫子、1967)。この論考で、子母口式は大多数の無文土器と少量の条痕文土器、それと僅かな装飾的な土器（絡条体圧痕文など）で構成されているとし、装飾的文様の要素に関する分析、更に他の遺跡出土の子母口式土器との比較検討により、田戸上層式と野島式との間に少なくとも４段階が予想されるとしている。しかしながら氏がこの論考の中でも述べているように、この分析のみで子母口式土器の様式構造が全て明らかになったわけではない。

これに対し近年絡条体圧痕文に関して新しい問題提起がなされてきた。(註１)この問題提起で指摘されている様に、絡条体圧痕文にもその構成、他の文様との組み合せ等にかなりのバラエティーが認められる。又絡条体圧痕文土器に共伴して出土した遺物にも変化が見られ、絡条体圧痕文がある時間巾を保有した文様であることが理解される。東海地方東部の静岡県木戸土遺跡、清水柳遺跡出土の土器は、

絡条体圧痕文の文様構成、伴出土器等からして報告者が指摘されているように子母口式に後続する時期のものである可能性が高いと思われる。又、長野県男女倉遺跡出土の絡条体圧痕文土器は、報告者は茅山下層式に比定されるとしているが、新しい要素を含んでいる土器であることは事実であるが、不明な点もある。

以上の指摘等からしても、絡条体圧痕文土器は、子母口式のみでなく後続する野島式に伴う可能性があるといえよう。しかしながら新しい要素をもった絡条体圧痕文土器は、今日まで東海地方東部を中心とした地域には認められるものの他の地域では殆ど認められておらず、これが如何なる意味をもつのであろうか。

翻って本土器をみると、本土器の絡条体圧痕文は、木戸上遺跡、清水柳遺跡や男女倉遺跡の絡条体圧痕文とは様相が異なり、それらの土器よりも古い時期のものと考えたい。本土器と類似した文様構成をもつ絡条体圧痕文土器は子母口貝塚より出土している。このような点からして本土器は子母口式に比定されるものと考えたい。いずれにしても長野県下ばかりでなく、絡条体圧痕文土器については資料が乏しく、資料増加に期待したい、又今後とも充分な分析、比較検討を行なわなければならないと思う。

（本土器の復原修正に関しては、東京国立博物館の野口義磨氏、櫻井洋氏の多大なる協力を得た。記して厚く御礼を申し上げたい。）（広瀬昭弘）

註1．静岡県木戸上遺跡の報告〔十菱、須磨位、1976〕。同県清水柳遺跡の報告〔瀬川他、1976〕。長野県男女倉遺跡の報告〔笹沢、森島他、1975〕等で述べられている。

参考文献

山内清男、1930「繊維土器に就いて」（追加第三）史前学雑誌第2巻3号

山内清男、1941「日本先史土器図譜12」

江坂輝弥、吉田格、1942「貝殻山貝塚」『古代文化』13―9

赤星直忠、1948「神奈川県野島貝塚」考古学集刊第一冊

吉田　格、1955「千葉県城ノ台貝塚」石器時代1

芹沢長介、杉原荘介、1957「神奈川県夏島に於ける縄文早期初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告第2冊

岡本　勇、1962「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」
『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』6

雪田　孝、1967「№52遺跡―縄文早期後半の土器群」
『多摩ニュータウン遺跡調査報告』III

安孫子昭二、1967「№269遺跡―縄文早期後半の土器」
『多摩ニュータウン遺跡調査報告』IV

笹沢浩、森島稔他、1975「男女倉」和田村教育委員会

十菱、須磨他、1976「沼津市木戸上遺跡の調査」考古学ジャーナル、119（愛鷹縄文遺跡研究グループ）

森島稔、笹沢浩他、1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」
『長野県考古学会誌』23、24。

瀬川裕一郎他、1976「清水柳遺跡の土器と石器」沼津市歴史民俗資料館紀要1

川崎義男、安孫子昭二他、1976「田中谷戸遺跡」

協力者　永峯光一、野口義磨、安孫子昭二、川崎義男、櫻井洋

縄文前期の土器について

関山式土器は出土量が少なく、十分な分析はできないが、2・3の問題点が指摘できる。まず、1号住居址から出土した櫛歯状工具による連続刺突文土器は、関東の関山式土器にない文様であり、長野県における関山式併行とされている神ノ木式土器の最も特徴的な文様である。また、縄の束の文様も神ノ木式の特徴的な文様である。従来、この神ノ木式土器は、南信地方にのみ分布する一群であり、北信地方にはほとんど分布していないとされていた。しかし、客体的であるかもしれないが、神ノ木式土器は北信地方にまで広がっていることが予想される。さらに、23～24号土拡から出土したコンパス文土器の胴部文様である網目状撚糸文は、筆者の乏しい知見では関山式土器に類例はなく、東北地方からの影響か、搬入品のように思われる。

諸磯a式土器は、長野県においては南大原式という名称が与えられている。その標式遺跡である南大原遺跡出土土器は、いわゆる肋骨文が主体的な文様となっている。しかし、本遺跡からは肋骨文土器は全く出土しておらず、前述したように爪形文と格子目文のみである。加えて、本遺跡と南大原遺跡は、直線的距離にして10kmと離れていないのである。この相違は時間差であろうか。あるいは諸磯a式に分類した一群が他の型式に含まれるものであろうか。資料が少ないため詳細な検討は後日に譲りたい。

諸磯b式土器は2分類して、それぞれb1式・b2式とした。これは、我々がかつて調査した飯山市大倉崎遺跡の報文の中で問題提起した、諸磯b式細分の一試案である。b1式・b2式はそれぞれまとまって出土したわけではなく、ましてや、それぞれに同一遺構から出土したものではないため、きわめて説得力は弱い。したがって、今ここで新しい型式設定をするつもりはなく仮称とし、以後、資料を集積して明確にしていきたい。諸磯b1式土器は、縄文のみの深鉢形、爪形文の深鉢形、浮線文のキャリパー形、箆切文の浅鉢形をセットとし、また、諸磯b2式土器は、縄文のみの深鉢形、平行沈線による凸レンズ状文の深鉢形・無文の浅鉢形をセットとした。

さて、ここで、完形で3個体出土した浅鉢形土器について触れておこう。この浅鉢形土器の分布は、関東から中部にかけてのいわゆる諸磯式文化圏と呼ばれている地域であり、諸磯b式の遺跡からは必ずといって良いほど出土している。しかし、ほとんどが小破片であり、量的にも少ないために、あまり注目されていなかった。ところが、昭和48年に、我々が調査した飯山市大倉崎遺跡から完形品が1個体出土し、さらに、1号住居址からは破片が多量に出土した。それらはいずれも無文で、しかも口縁部には必ずいくつかの孔が開けられていた。そして、これらの土器はきわめて大きく（完形品は小さいが）、最大径50～60cmもあった。以来、我々はこの特殊な土器に注目し、類例を求めたところ、埼玉県浦和市大谷場貝塚から、若干、器形は異なるが、浅鉢形土器が土拡から出土しており、また、千葉県船橋市飯山満東遺跡からも、やはり器形は若干異なるが、浅鉢形土器が土拡内から出土しており、同じ時期の所産であることを考え合わせると、かなりの広範囲で同じ風習があったことが予想される。

土坑内の遺物はいずれも土坑の底からは出土せず、ほとんどが土坑の縁からずれ込んだような状態で出土している。また、29号土坑のように浅鉢とともに人骨も発見されており、土坑の性格判定に役立つであろう。以上、浅鉢については資料の集積途中であるので、後日稿を改めて論述したい。

諸磯c式土器は、第2号A土坑、第3号土坑、第31号土坑及び集石東側の落ち込みから出土したが、他の土坑からはあまり出土していない。出土量は比較的多いが、文様等よくまとまっているのであまり問題はない。ただ、この中で結節状浮線文土器は、全て一括してしまったが、大きく2分類できる。すなわち、平縁の深鉢で結節状浮線文が粗いもの、及び波状口縁の深鉢で結節状浮線文が細かいものである。この2種はやはり、時間差と考えられる。

前期末の土器は、いわゆる十三菩提式併行及び縄文中期直前のものを指す。長野県においては、踊場式あるいは桜沢式等、いろいろな型式が入り乱れており、未だ、確たる編年は確立していない状況にある。本遺跡からは4片しか出土していないので考察は控えておく。

註1．信濃史料刊行会編『信濃考古総覧』昭和32年

2．神田五六「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報」信濃3－8昭和26年

3．高橋桂他「北信濃大倉崎遺跡調査報告」信濃28－4　昭和51年

4．長野県教育委員会刊『上原』長野県埋蔵文化財発掘調査報告II　昭和32年
岡野隆男『平台貝塚』昭和48年、他

5．註3に同じ

6．浦和市史編纂室『浦和市史第1巻』考古資料編　昭和49年

7．千葉県都市公社『飯山満東遺跡』昭和50年

8．鈴木孝志「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」考古学雑誌42－2　昭和32年

9．武藤雄六「信濃境籠畑遺跡出土縄文前期末の土器について」信濃15－7　昭和38年

第2節　歴史時代の遺構と遺物について

第5章2節で住居址出土土器の要点を述べた。このうち甕については、いずれの住居址もほぼ同じ様相をもつ。しかし、坏については3号、4号住居址が類似するのみで、2号址は少し異なる。

2号住居址にみられる底面の再調整の坏は、北信地区では大室428号墳付近住居址(註1)、灰塚遺跡(註2)などで既に類例が知られる。底面付近の外面にも箆削が行なわれたものがあり、特に大室では粗い回転糸切痕を残す坏が僅かに伴出しており、当2号住居址の土器構成とよく似ている。また大形、小形甕についても類似点を見いだすことが出来る。大室遺跡の報告書では9世紀前半と断定しているが、実年代については、なお慎重な検討が必要であろう。

しかし、それら底の再調整痕を残す坏の流行が回転糸切の坏に先行することは東北地方でも明らかにされており、北信地方においても、それらの考え方に準ずることは可能である。

ちなみに、国分期後半代に比定される長野市、浅川西条遺跡(註3)では、底面再調整の坏の量がきわめて少ないし、黒笹90号窯期に比定されるという灰釉陶器(註4)を伴出した更埴市、大塚遺跡(註5)でも同様に再調整の坏は少ない。

加えて、当該3号4号住居址にみられる坏の回転糸切の手法、また口縁端が僅かに外反する形態は

上記の浅川西条や大塚遺跡に多く見られる。

そのようなわけで、本遺跡の国分期住居址遺物の時間差関係は、3・4号住居址はほぼ近接した時期、そして、それらに先行して2号住居址遺物があるものと考えられよう。

そして、その実年代は、今日なお流動的であるが、3つの住居址の甕形土器に、いずれも奈良時代を代表するとされる真間式土器の影響を受けたものや、口唇断面が角ばった、口縁外反度の強い長胴甕の形態をとるものがないことから、平安時代の初期に溯ることはないものと思われる。(註6)

つまり、3つの住居址は、平安時代前半の9世紀後半から灰釉陶器の盛行する平安時代後半の11世紀（あるいは12世紀代）の時間帯のいずれかの時期に営まれたものでなかったであろうか。(註7)

なお、2号住居と3号住居址の年代差は、それほど隔たりのあるものではなく、2号住居址の坏に回転糸切もあること、甕については3つの住居址の土器すべてが共通していることなどから、継続的か、断続的であっても比較的その年代差が少ない生活の痕跡と考えたい。

そのようにして、3、4号住居に先行して2号住居が営まれたことが判明したわけであるが、それでは遺構上においても、はたして各住居址において、相違点を見いだし得るか考えてみよう。

はたして、3・4号住居址は柱穴が無いか、あってもほんの少しであって、その点、多数の柱穴を有する2号住居址とは明らかな相違がある。先記した浅川、西条遺跡においても柱穴の無い住居址が大部分であり、国分期後半代において、柱穴のない住居が増加する傾向にあることを暗示する。

柱がどのように支えられたか、この点について、既に弥生式時代に認められ、多少の考究がなされている地方もあるけれども、はたして国分期にも、それらの考え方をとり入れることが出来るか問題になろう。(註8) ともかくこのことは住居形態の変遷上、重要な問題をはらんでいると思われるので、別の機会に考察するとしよう。

カマドの位置については、3・4号住居址は判然としないが、2号住居址のみ、壁の隅に設置されている。また、同住居址ではカマドとは別に住居址の中央からやや片寄った所に地床炉が認められる。こうした、地床炉を伴なう住居址は平安期に多く認められる特徴であるとされ、古代末から中世にかけての、カマドから囲炉裏へ転換する過程での、過渡的現象と述べられたのは桐原健氏であった。

しかし、住居内にあって、冬期の暖をとるため、屋内の中央に炉を持つことは、むしろ自然のなりゆきであって、中・近世へかけての囲炉裏の発達は、そのような意味において、考えるべきことではないだろうか。(註9) カマドは造り付け小型のものから次第に高い空間を占めるものに移行したものと考えられ、その点、現在の考古学的調査では充分その構造を知りつくせないことが、カマド発見の少なさにつながっているものと考えられはしないだろうか。(註10)

以上のように、本遺跡における平安期の住居は確実なもの三軒であり、一時期にして一軒あるいは二軒の構成かと思われた。標高約700mに位置するこの立地は、平地集落に対する山地住居に属し、種々、論考の対象となってきた。

かつて桐原健氏は、民俗学的考察をも加えて、猟、鍛治、箕直し、トベナイなどを業とする山中流浪の山の民の居住地とした説を発表した。

その後、筆者らは山地集落のいくつかに谷水田の開発も関係あることを述べ、(註11) 続いて笹沢浩氏は上水内郡下の山地遺跡を対象として、やはり谷水田の開発を論じ、(註12) 平安中期以降、荘園の発達と共に生

じた農民層の開拓と結んでいる。

鎌倉時代の末期、元徳元年(註13)の「守矢文書」には

「左頭、大田庄内赤治郷豊後大夫判官、小玉郷地頭等、付同庄内野村上、今井、」また、「黒河、福王寺、長治、下浅野郷豊後左京進入道跡」などの記述が見える。野村上、黒河は牟礼村内の集落名として現存し、鎌倉時代当地一帯が太田庄の中に含まれていたこと(註14)を証明する。太田庄の成立が平安時代後半にあるとすれば、牟礼地区一帯も平安時代から太田庄に含まれていた可能性がある。

在地領主の配下にくみ込まれ、本村の沖積地を離れて、山地の谷水田へと進出していった農民の一つの痕跡として、当遺跡の存在意義を認めたい。

そして、その性格は桐原健氏のいわれる「山の民」的な性格（炭焼、猟、箕直し）等をあわせもったものと考えることも出来よう。　　（松沢芳宏）

註

1.『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』　長野県、大室古墳群調査会、1970

2.『下条・灰塚』　更埴市教育委員会、1971

3. 小笠原好彦、「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」、東北考古学の諸問題、東北考古学会編、1976

4.『浅川西条』長野県住宅供給公社、長野市教育委員会、1975

5. 岡田正彦、「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告」第Ⅲ次信濃第22巻4号、1970
なお、同氏は大塚遺跡出土遺物を11世紀前半に推定されているが、灰釉陶器自体の実年代編年が不安定な今日、狭い年代に限定するのは困難であろう。

6. 多賀城址その他東北地方で見られる特徴的な甕、本県では飯山市田草川尻遺跡で発見されている。(第2次調査)

7. 平安時代中期を国分式土器の下限とする考え方がある一方、逆に古銭等の伴出物から一部国分式土器使用年代を13世紀に下げる意見があるけれども、本遺跡の遺物の様相は国分期最末期のつば釜土器の盛行年代には下げられないので、13世紀代をのぞき、下限を12世紀におさえた。註9を参照のこと。

8. 据え柱、(柱を据え、さらに粘土等を床面に張って柱を固定する方法)との考え方が関東では一般的であるという。

9. 桐原健、「宋銭出土の竪穴住居址」伊那路、第21巻7号、1977

10. 光明真言切徳絵詞、応永5年（1398）滋賀県明王院蔵には、鉄釜のかかった大きな粘土製のカマドが描かれている。(集英社、日本の歴史6、1974年を参照)

11. 桐原健「平安期にみられる山地居住人の遺跡」第三次信濃第20巻第4号、1968

12.「周辺遺跡と歴史的環境」飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書、飯山市教育委員会、1973

13. 笹沢浩他『上水内郡誌歴史編』第5様式期の生活、上水内教育会、1976

14. 信濃史料第五巻所載、諏訪郡宮川村、守矢真幸氏所蔵

ま と め

今回の発掘調査は、わずかに4日間という常識的には考えられないほどの短期間であった。それにもかかわらず私達が得た成果は大きなものがあった。遺構、遺物についての説明や性格については項目ごとに執筆者が、それぞれの立場で詳細に触れている。従って、ここでは今回の調査を通じて得た所見を大まかに触れることにしたい。勿論、各項目ごとに触れていることと重複するところが多々あることと思う。

本遺跡を特徴づける最大のものは、何といっても土坑の量の多さであろう。縄文早期、前期、後期と時代判定ができ得るものが20基、時代判定不能のもの11基の計31基が検出されている。31基の内、縄文前期に属するものが18基であって、土坑全体の過半数を占めている。そして、その内でも諸磯b式期の土坑が主体となっている。諸磯b式期土坑の中でも1号、17号土坑は完形の浅鉢形土器が出土しており、29号土坑では10数片の人骨と推定されるものが出土した。以上の3基の土坑は太田文雄が土坑の項で、金井正三が土器の項ですでに触れているところであり、その特異な出土状態や特徴的な土器の出土という点から考えて、単なる土坑ではなく土坑墓としての性格を強く保持したと想定してよいのではなかろうか。いずれにしても検出した土坑は、土坑の項で触れているように集落址と直接の関係を有せず、舌状台地上に営まれた土坑群と考えられる。換言すれば、集落の営まれた場所とは分離して台地という特定の区域に土坑を構築したとしてよいであろう。ブルドーザーによる台地全体の削平によっても関山式期の住居址一軒の他は、ことこまかに探査したけれども縄文時代の住居址はおろか、その痕跡すらも見出せなかった。従って関山式期の住居址の他は縄文時代の住居址が営まれなかったと断定してよいであろう。何故にこのような土坑が集落地と分離して台地上に構築されたのであろうか。ここに本遺跡の土坑群の謎が秘められているやに考えられるのである。とはいえ、先記した1号、17号、29号の土坑以外は、土坑墓的性格を有すると考えてもよいような遺物やその出土状態が認められないことからすれば、かかる土坑群が営まれた場所をもって集落と明確に一線を画した墓域であると速断するのは、この際避けねばならないであろう。このような土坑群が今、各地で次々と発見されているようである。従って、今後ますますの資料の集積と分析が行われることによって、その性格が明確化されるであろう。それまでは、土坑群が集落と分離されて舌状台地上に存在したことを明記して、今後の研究の一資料としておきたい。

北信地方における数少ない縄文前期前半の関山式期の住居址が検出し得たことも成果の一つといえよう。ブルドーザーによって壁が相当破壊されてしまったことは返す返すも残念であった。従って住居址の全容を知るにいたらなかったけれども、長方形のプランと有する住居址であった。当地方における貴重な資料となるであろう。

縄文土器についてみれば、早期後半に位置づけられる完形の尖底土器を検出したことが大きな意味をもつであろう。県内における早期後半の初めての例である。文様は、絡状体圧痕文を口縁部に施文し、以下底部にいたるまで条痕文を施している。この土器の編年的位置については、種々と論議の余地もあろうが、広瀬昭弘のいうように関東地方の子母口式に併行するものとしてよいであろう。ただ1点の完形土器であり、しかも土拡内から単独に出土している。いかなる意味をもっているのであろ

うか。他の土拡の性格と同様に今後の究明に期待することとしたい。いずれにしてもこの尖底土器は、県内の早期土器編年に重要な位置を占めることは疑う余地がない。

前期の土器についてみれば、神の木式土器が検出されたことが重要なことであろう。神の木式土器は南信地方に分布の中心を置き、北信地方には及んでいないとされていたからである。本遺跡において少量ではあるが検出し得たことは、前期前半における南北信の文化交流を示すものとして重要な意味をもつであろう。それと同時に、前期における文化交流現象の複雑さを示しているものといえよう。次に諸磯b式土器についても金井正三が示しているように、試案ではあるけれども二分類することの可能性を示唆できるような資料を得たことも成果としてよいであろう。勿論、諸磯b式土器を二分類するためには、まだまだ資料の集積と厳密な分析が要求されることはいうまでもない。

歴史時代のものとしては、国分期の住居址が三軒検出された。土師器、須恵器の比較検討を通して、松沢芳宏はこの住居址が平安時代の前半から同時代末のいずれかの時期に営まれたものであろうと推定している。そして、かかる高地に位置するあり方を牟礼村の開発が平安時代に進展し、それが荘園制の成立と関連を有するものとして把えている。そして、具体的には太田庄の支配下に組み込まれた一つの痕跡としての意義を深めたいとしている。いずれにしても、歴史的環境の項でも触れたように牟礼村の開発は当に平安時代に入って本格化したといえよう。このことは、牟礼村における遺跡のあり方が如実に示している。

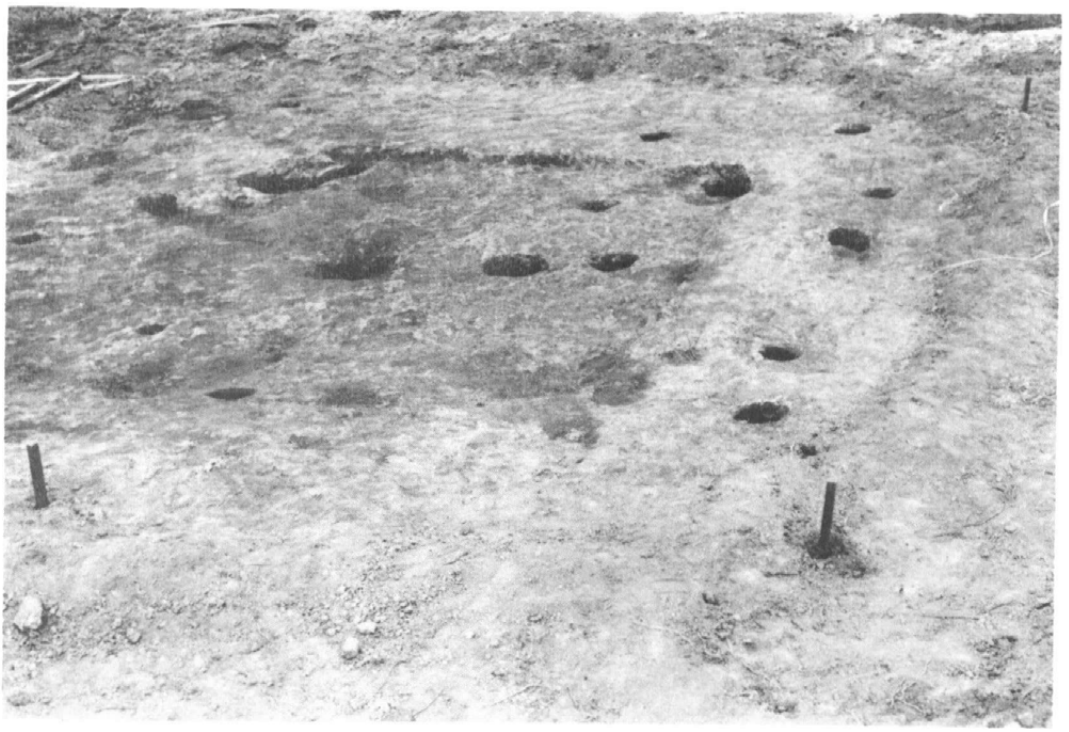
以上、取りとめなく所見を述べてきたが、最後に本発掘調査に際しての感慨をいささか記しておきたい。

本遺跡が、縄文前期、中期、後期の遺物を豊富に出土することは夙に知られていたところである。昭和52年度における牟礼村高岡地区圃場整備にあたって、本遺跡もその範囲内に包括されており、埋蔵文化財保護の立場からすれば、当然調査の対象とされるべきであった。しかしながら、種々の事情により縄文時代の貴重な遺跡であるにもかかわらず、ブルドーザーによる地均し工事が施行された段階において落込みが数ケ所発見されて初めて調査を行なうという状態にいたったのである。

私達が、発掘調査の依頼を受けた時点では圃場整備事業が著しく進捗しており、最終段階として本遺跡の存在する台地の削平が残されているのみであった。従って、短時日に調査が完了しない限り、整備事業そのものが大幅に遅延し種々の障碍が惹起される懸念があった。埋蔵文化財の保護保存は、地元民の理解があってこそその効力を発揮することはいうまでもないことである。そこに今回の発掘調査は、当初から大きな制約が加わっていた。ひるがえって、研究者の立場からいうならば何等の外的制約がなく、調査時間が充分にとれ自由に調査を行ない得ることが望ましい訳けである。ただ、牟礼村の現状をつぶさにみたとき、それは到底不可能な状態であった。私達は、種々と悩み、検討をした結果、圃場整備事業が、ここまで進行している以上は多大の困難が横たわっていようとも、地域住民の切なる声を受とめることが将来、該地区における埋蔵文化財保護に大きな進展をもたらすであろうと思考し、牟礼村教育委員会の調査計画を無理を承知で、そのまま受諾することとしたのである。今、ここに報告書を出すにあたって、矢張り短時日の発掘調査では種々と欠落したものが多いことをしみじみと反省している。今後はこのような切迫した発掘調査は行いたくないし、行なってはならないであろうことを痛感している。

末尾ながら、一々姓名を記さないけれども御協力、御援助をたまわった地元の皆さんに心から感謝の意を表したい。

（高橋　桂）

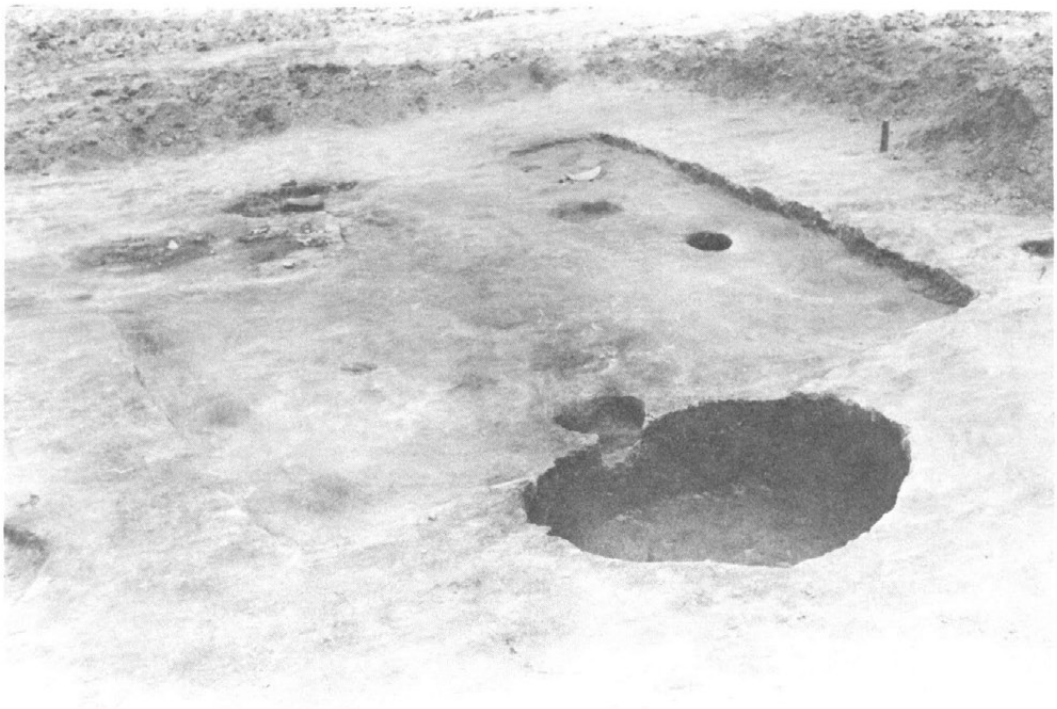


1号 住 居 址

2号 住 居 址

図版二　住居址

3号　住　居　址



4号　住　居　址

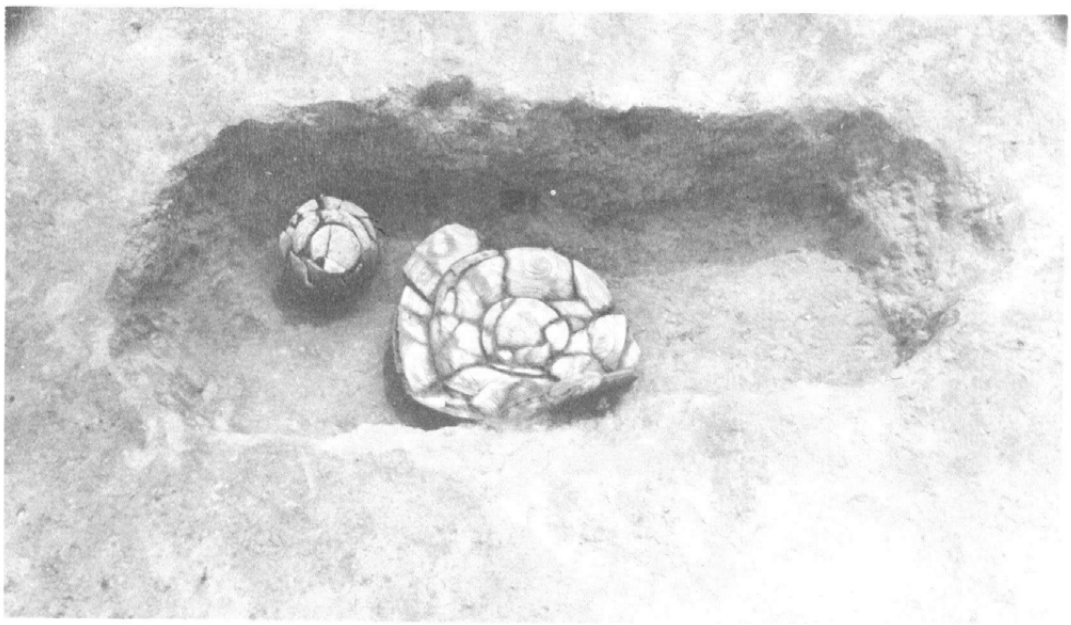
12号　土　拡

12号　土拡遺物出土状態

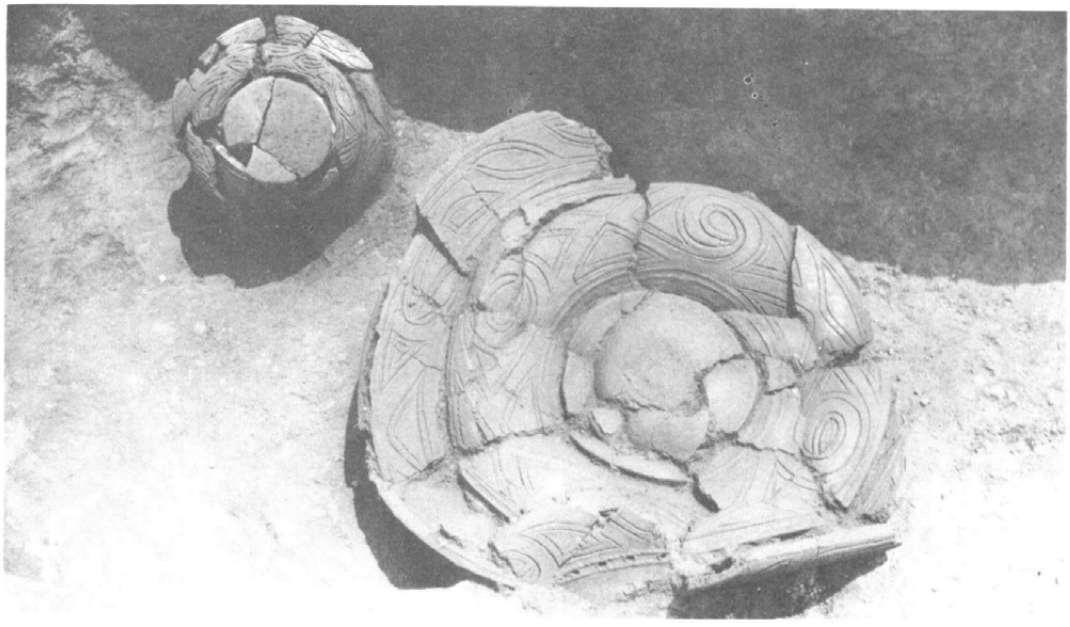
図版四　土　拡

2B号　土　拡

2B号　土　拡



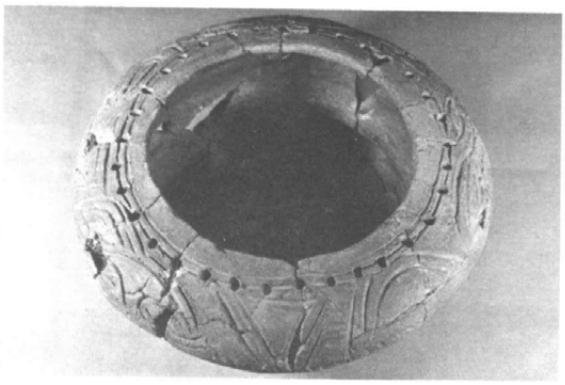
17号　　拡

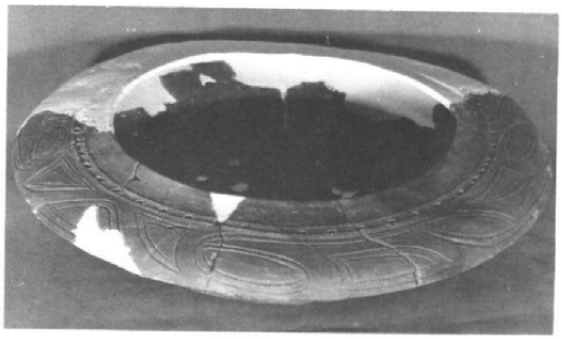


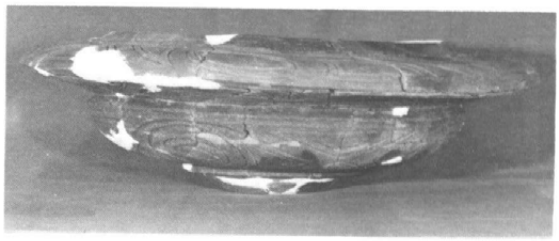
17号　土拡遺物出土状態

図版六　土拡内出土遺物

図版七　土拡内出土遺物



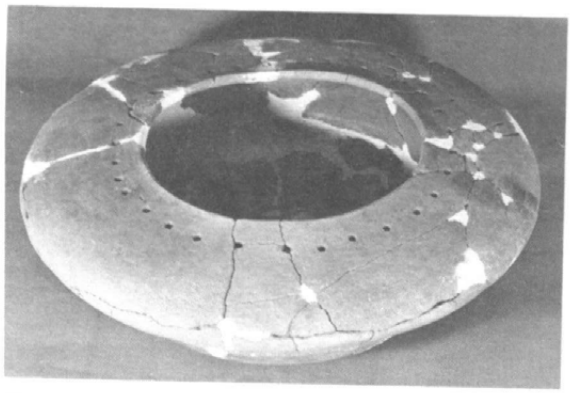


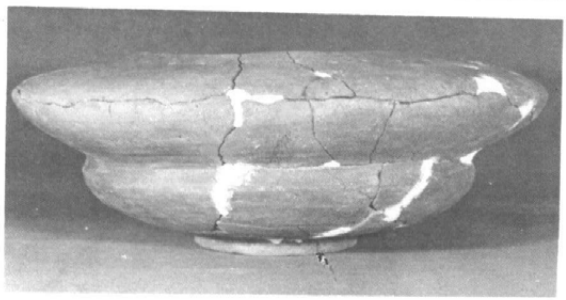


17号　土　拡

19号　土　拡

5号　土　拡

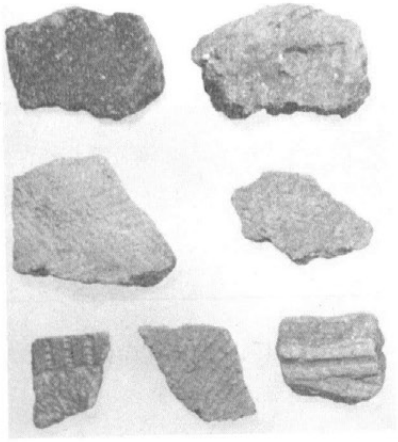




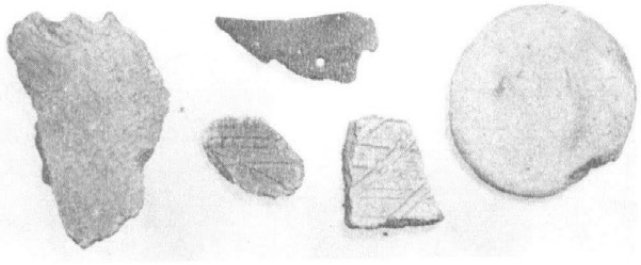
2号　B　土　拡

履　土　内

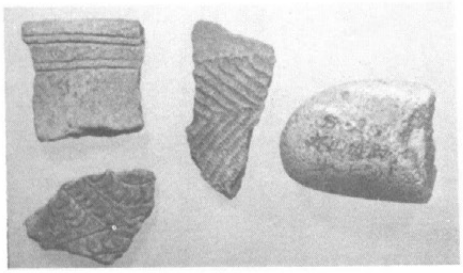
図版八　住居址・土拡内出土遺物



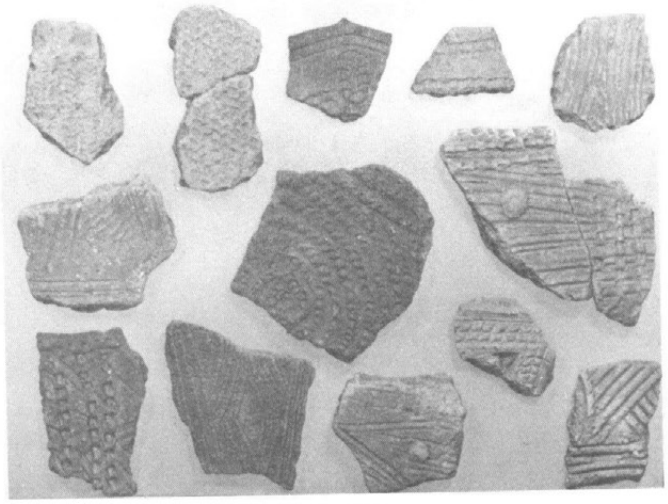
1号　住　居　址



2号　A　土　拡

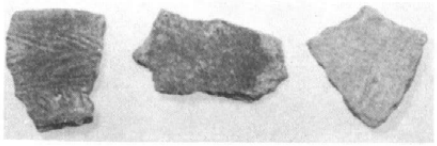


1号　土　　拡

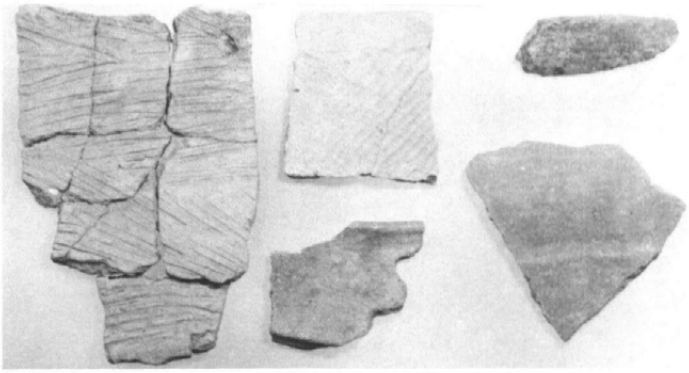


2号　B　土　拡

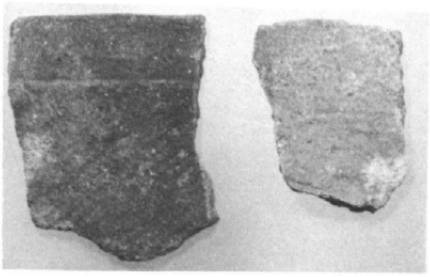
3号　土　　拡



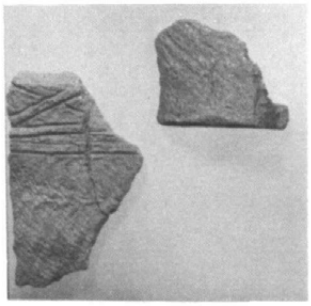
4号　土　拡



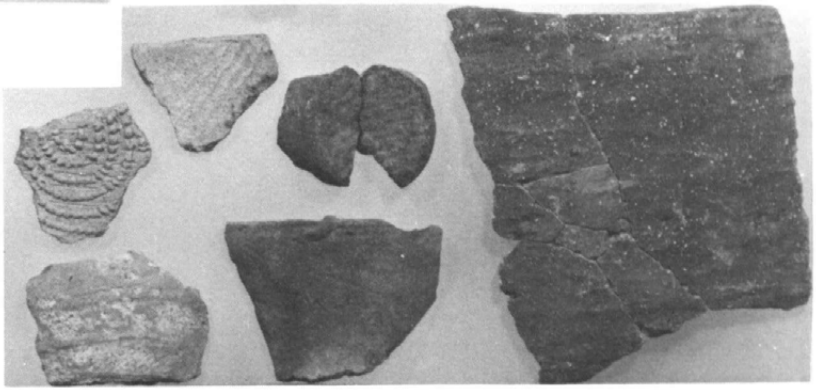
6号　土　拡



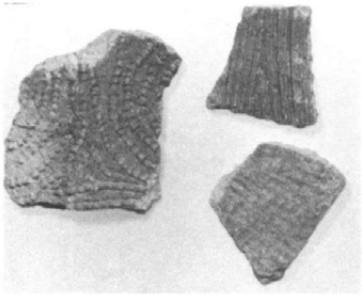
5号　土　拡



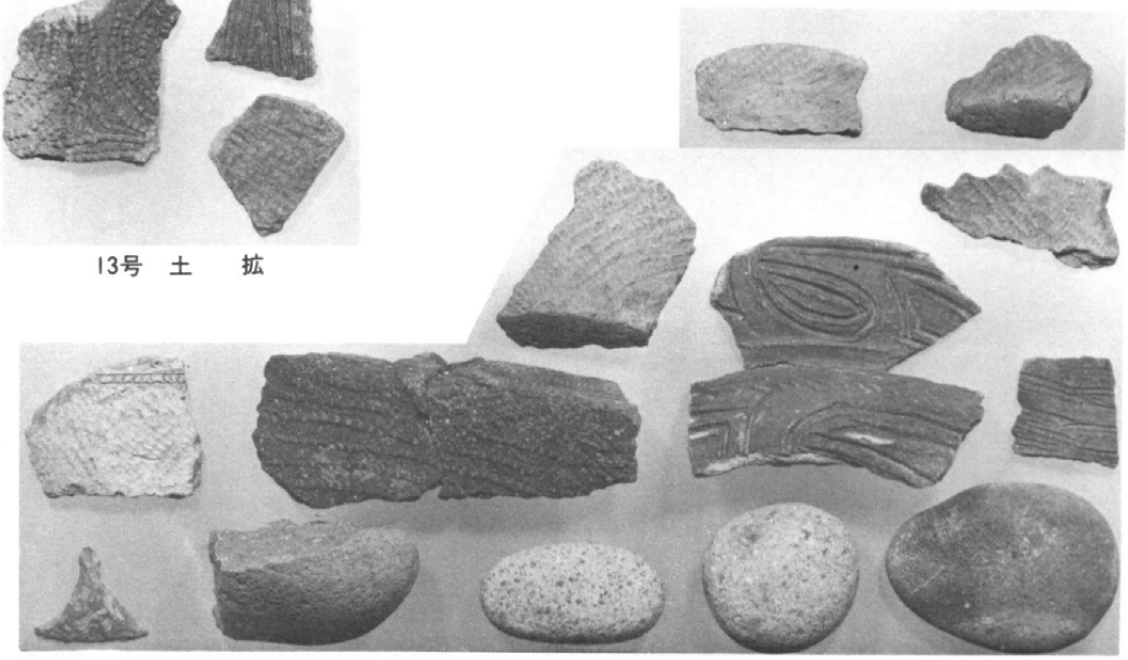
8号　土　拡



9号　土　拡



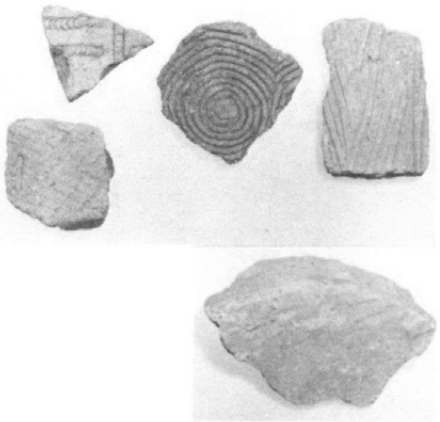
13号　土　拡



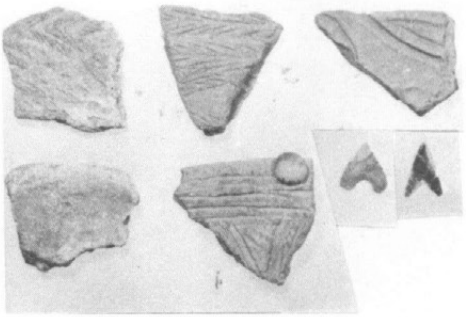
16号　土　拡

図版十　土拡内出土遺物

22号　土　　拡

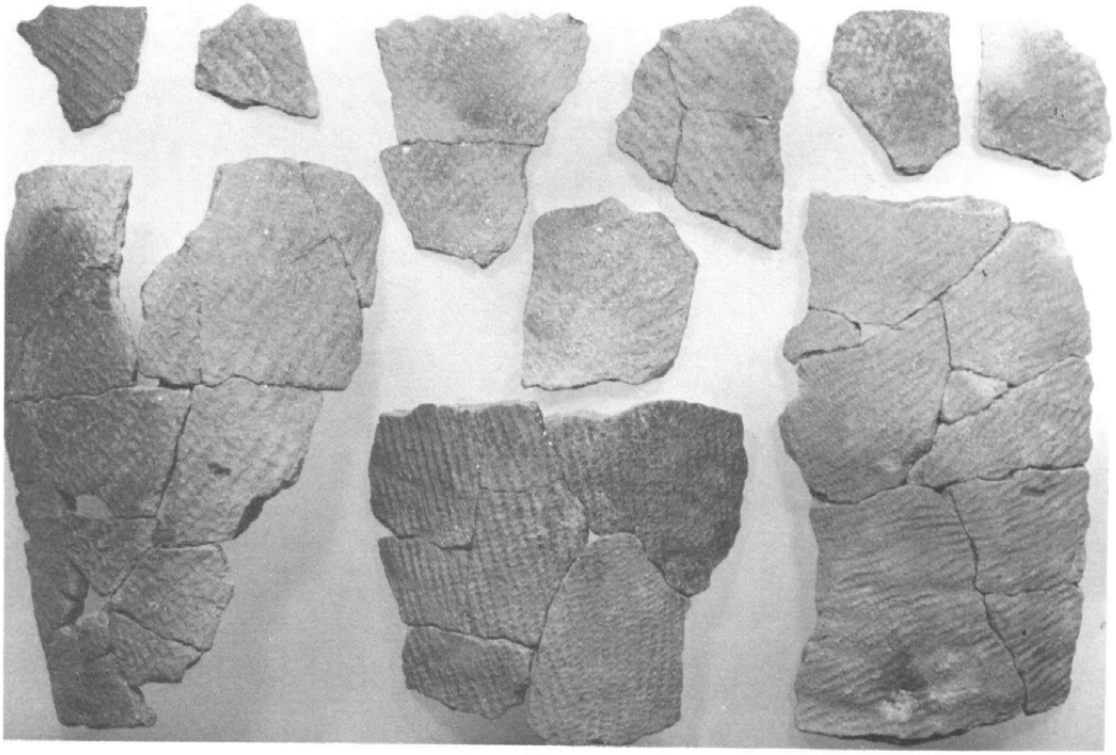


22号　土　　拡

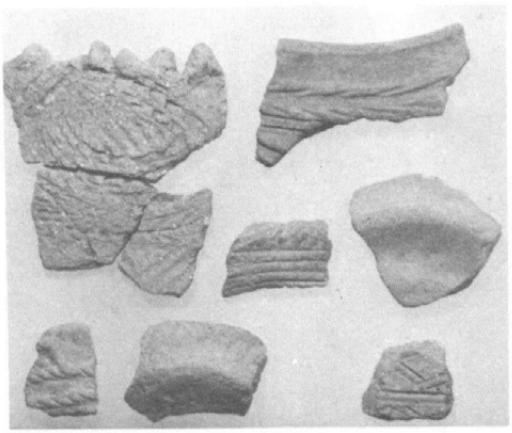


23～24号　土　拡

23～24号　土　拡



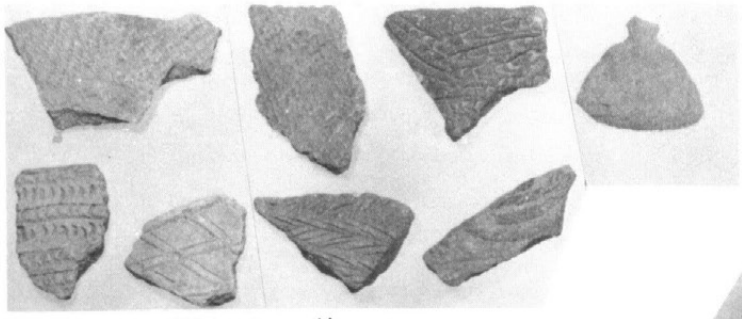
23～24号　土　　拡



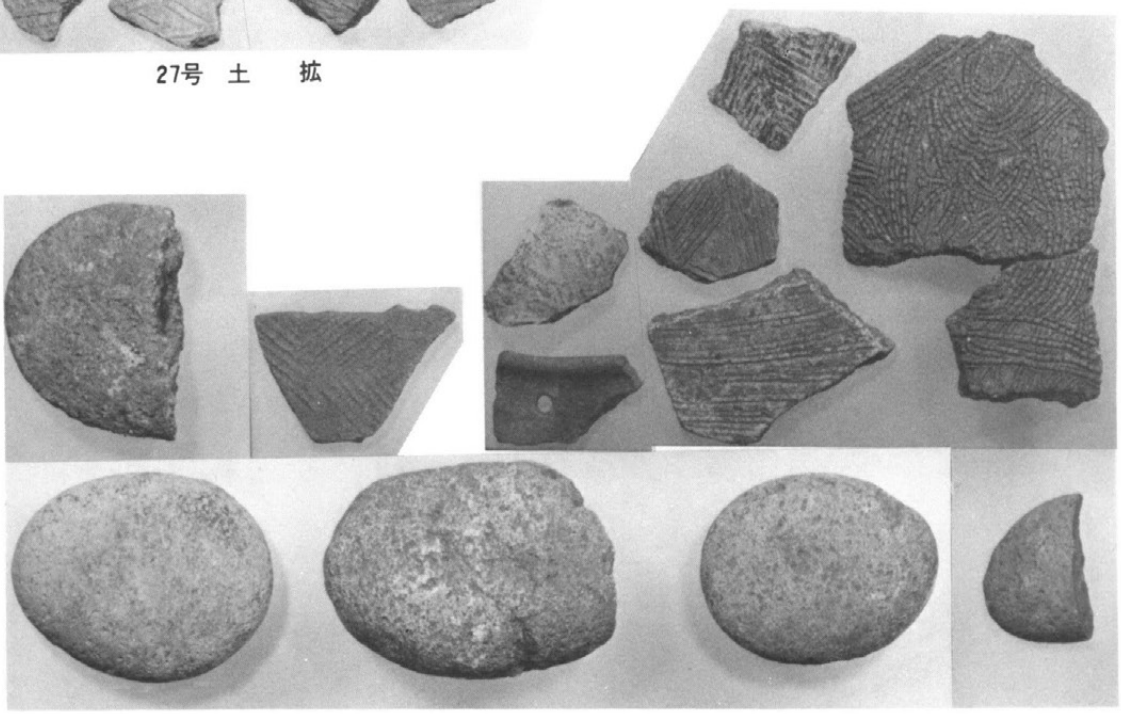
26号　土　　拡

25号　土　　拡

図版十二　土拡内・遺構外出土遺物

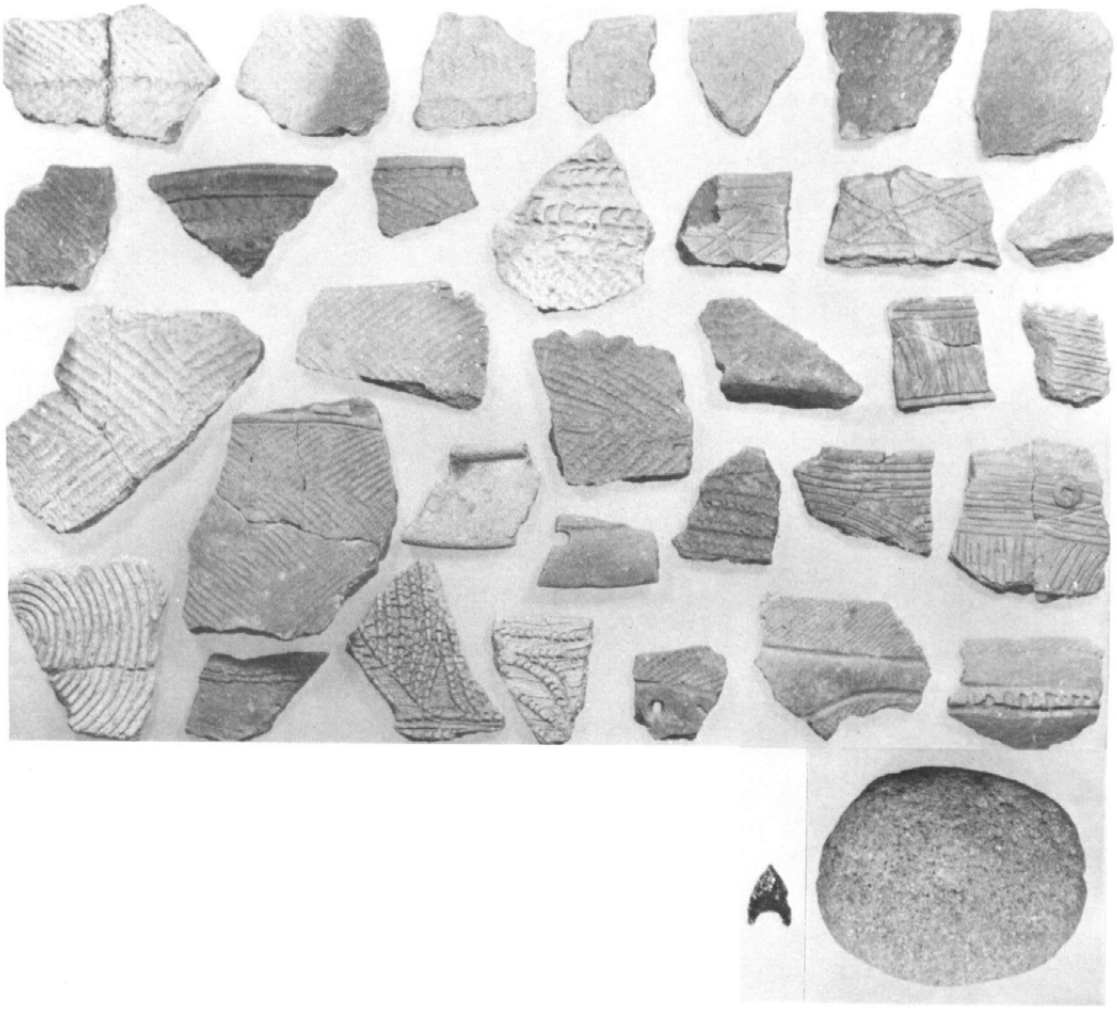


27号　土　　拡



31号　土　　拡

遺構外出土遺物



図版十三　遺構外出土遺物

「牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書」正誤表

ページ	行	誤	正
表紙	表題	発堀	発掘
内表紙	〃	〃	〃
序	14	調査よ結果	調査の結果
例言	①	報告である。	報告書である。
〃	③	討議にうえ	討議のうえ
挿図目次	第18図	覆土内一括	遺構外出土
1	4	われた以下	われた。以下
5	5,23	魔石斧	磨石斧
5	36	山開地	山間地
6	註1	振興等開地域	振興等開発地域
7	第2図	発堀図	発掘図
8	17	堀り込み	掘り込み
8	25	のくすぎで	のしすぎで
9	22	必要土壙	必要上土壙
9	30,31	土拡	土壙
12	4	便宣上	便宜上
12	9	付髄する	附随する
12	14	瓢形	瓢箪形
13	第5図	土拡	土壙
14	3	隋円形	楕円形
14	4	桑弱で	軟弱で
14	17	挙大の(2ヶ所)	拳大の
14	28	土上部	土壙上部
15	第6図	土拡	土壙
16	13	土壙とB号	土壙をB号
16	19	1個体出した	1個体出土した
16	29	桑弱で	軟弱で

16	29	粘土プロ	粘土ブロ
16	30	土拡中位	土壙中位
16	30	挙大の	拳大の
16	31	土拡で	土壙で
17	第7図	土拡	土壙
18	4	1号住居北側	1号住居址北側
18	10	土拡とは	土壙とは
18	12	大先・小形	大形・小形
19	第8図	土拡	土壙
20	14	〃	〃
21	3	舌状頂部	舌状台地頂部
21	3	16号土拡	16号土壙
21	17	城の立ち上り	壁の立ち上り
23	第10図	土拡内	土壙内
24	第11図	〃	〃
25	11	めぐらるもの	めぐらせるもの
26	第12図	土鉱内	土壙内
27	第13図	土拡内	土壙内
28	第14図	〃	〃
29	13	平行波線文	平行沈線文
30	第15図	土拡内	土壙内
31	第16図	〃	〃
32	第17図	〃	〃
33	25	爪先文帯	爪形文帯
39	4	三つ	3つ
41	第23図	3号址	3号住居址
47	13	特定器積	特定器種
47	15	当選跡	当遺跡
47	33～34	この2個…出土している。	（この部カット）

48	6	黒浜期	黒浜式期
48	8	該出土壙	検出土壙
49	28	論考の	論考の
49	34	木戸土遺跡	木戸上遺跡
50	15	復原修正	復元修正
50	17	須磨位	須磨他
51	1.2	川崎義男	川崎義雄
51	8	されていた。	されていた(註1)。
51	9	土拡から	土壙から
51	13	ている。	ている(註2)。
51	19	である。	である(註3)。
51	27	している。	している(註4)。
51	29	出土した。	出土した(註5)。
51	32	土拡から	土壙内から
51	32	しており、	しており(註6)、
51	33	土拡内から	土壙内から
51	33	しており、	しており(註7)、
52	9	指す。	指す(註8)。
52	11	にある。	にある(註9)。
52	31.32	ちなみに(註3)(32行)	にされており(註3)(31行)
53	9	2号住居	2号住居址
53	12	4号住居、…2号住居	4号住居址、…2号住居址
53	33	山中流痕の	山中流浪の
55	20	いるやに	いるように
55	29	プランと有する	プランを有する
56	1	土拡の	土壙の
61～70		土拡	土壙
63		17号　拡	17号土壙
65		履土内	遺構外

発掘関係者一覧表

発掘調査委員長	（文化財調査委員長）	小林幹雄
〃 副委員長	（牟礼村長）	金井義男
〃 〃	（教育委員長）	原田清繁
発掘調査委員	（議会議長）	中川功
〃	（議会文社委員長）	原田幸衛
〃	（土地改良区理事長）	岡田一雄
〃	（文化財調査副委員長）	上野涼
〃	（文化財調査委員）	白鳥耀
〃	（〃）	矢野恒雄
〃	（〃）	風間敏
〃	（〃）	臼井健太郎
〃	（〃）	武居襄
〃	（〃）	丸山久
〃	（牟礼村助役）	黒柳多十
〃	（〃 収入役）	目須田勉
〃	（〃 総務課長）	金井庄五
〃	（〃 総務係長）	原田忠直
〃	（教育委員長職務代理）	石川穂積
〃	（教育委員）	井沢静
〃	（〃）	丸山良雄
発掘調査委員会事務局	（教育長）	米沢竹志
〃	（教育次長）	池内健造
〃	（公民館主事）	青木清
〃	（公民館主事）	近藤克彦
〃	（教委事務局書記）	加藤みどり
〃	（西小校務技手）	朝比奈利和

発掘調査団

団長	（日本考古学協会々員 飯山北高教諭）	高橋桂		
調査員	松沢芳宏	金井正三	松沢伸一	
	望月静雄	今井正文	太田文雄	
	水野裕美子	広瀬昭広	大原正義	
補助員	（北部高等学校教諭 郷土研究グループ顧問）	金井清敏		
	（北部高校生）	宮田忠彦	倉石和彦	田中博敏
		野村彰人	久保田克彦	滝沢純一
	（長野東高生）	青木勝彦	（専修大学生）	米沢勇志
	（牟礼村高坂）	土屋トナ子		

発掘協力者

（県教委文化課指導主事）　関　孝一
（北信土地改良事務所長）　岡田謙一
（　〃　管理係長）　赤沼好男
（　〃　技師）　坂本光男
（牟礼村土地改良事務局長）　丸山義一
〃　技師　本山　秀　長沢昭和　北沢京子
（公民館八ミリ編集員）　北沢悦登　柳沢博見
飯島　孜　寺島政次
（旧地主）　松沢順造　小池長男
（調査団長送迎）　萩原正明